岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第607集

中嶋遺跡発掘調査報告書

2013

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 607 集

# 中嶋（なかしま）遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

2013

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

# 中嶋遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

# 序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に関連して平成23年度に実施された花巻市東和町中嶋遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。発掘調査では、平安時代の竪穴住居などの集落を構成する遺構が見つかりました。出土した遺物としては、おもに平安時代の土器などの遺物がみられます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、花巻市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成25年２月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　池田克典

# 例　言

1　本書は、平成23年度に行われた東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に伴う中嶋(なかじま)遺跡の緊急発掘調査成果を収録したものである。
2　中嶋遺跡の岩手県遺跡登録台帳遺跡番号はME28 － 2198であり、遺跡略号はNS － 11である。
3　今回の調査区は岩手県花巻市東和町安俵11区150-2ほかに所在する。
4　発掘調査および整理作業は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
5　発掘調査は福島正和・巴　亜子、整理作業は福島・巴が担当した。
6　発掘調査面積は2,811㎡であり、発掘調査期間は平成23年10月17日～12月2日、整理作業期間は平成23年12月1日～平成24年3月31日である。
7　本書の執筆および編集は福島・巴が分担して行った。
8　発掘調査に際する基準点測量は慶長測量設計株式会社に、航空写真撮影は東邦航空株式会社にそれぞれ業務委託した。
9　出土した石器等の石材の肉眼観察は花崗岩研究会へ業務委託した。
10　発掘調査においては、国土交通省東北地方整備局、花巻市教育委員会、東和ふるさと歴史資料館、近隣住民の方々のご理解とご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
11　発掘調査および整理作業にあたり以下の方々のご教示をいただいた(敬称略・順不同)。瀬川司男・橋本征也・中村良幸・千葉悟・高橋信一郎・菊池賢・国生尚・菅野成寛・千葉周秋・浅利英克。
12　本書では、国土地理院発行「土沢」1：25,000地図を使用した。また、遺構の土層注記における土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版　標準土色帖』2008年度版に準拠した。
13　発掘調査で作成した各種記録、出土した遺物および実測図、写真等の一切は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
14　本書発刊以前に現地公開や当センターのホームページ（http://www.echna.ne.jp/~imaibun/）等で調査成果および調査経過の一部を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業を経ている本書をもって正とする。

目　　次

Ⅰ 経緯と経過
1 調査経緯 …… 1
2 調査経過 …… 1

Ⅱ 位置と環境
1 遺跡の位置 …… 3
2 地理的環境 …… 3
3 歴史的環境 …… 3

Ⅲ 調査方法
1 発掘調査の方法 …… 6
2 整理作業の方法 …… 7

Ⅳ 調査成果
1 調査概要と基本層序 …… 9
2 検出遺構 …… 10
（1）竪穴住居 …… 10
（2）土　　坑 …… 23
（3）湿　　地 …… 26
3 出土遺物 …… 29
（1）土　　器 …… 29
（2）陶磁器・漆器 …… 48
（3）その他の遺物 …… 50

Ⅴ 総　　括
1 遺　　構 …… 61
（1）竪穴住居 …… 61
（2）土　　坑 …… 64
2 遺　　物 …… 64
（1）土　　器 …… 64
（2）その他の遺物 …… 65
3 ま と め …… 68

報告書抄録 …… 114

# 図版目次


第 1 図　遺跡の位置 …… 2
第 2 図　周辺の遺跡 …… 5
第 3 図　全体平面および基本層序 …… 8
第 4 図　SI1101 …… 10
第 5 図　SI1102 …… 11
第 6 図　SI1103 …… 12
第 7 図　SI1104 …… 14
第 8 図　SI1104 カマド …… 15
第 9 図　SI1105 …… 18
第 10 図　SI1105 カマド …… 19
第 11 図　SI1106 …… 21
第 12 図　SI1107 …… 22
第 13 図　SI1108 …… 24
第 14 図　SI1109 …… 24
第 15 図　SK1101～1109 …… 27
第 16 図　調査区南側湿地 …… 28
第 17 図　土器製作工程と表現方法 …… 32
第 18 図　土器（SI1102～1105） …… 34
第 19 図　土器（SI1107・1108・SK1106） …… 35
第 20 図　土器（SK1107・1109） …… 37
第 21 図　土器（湿地その 1） …… 38
第 22 図　土器（湿地その 2） …… 40
第 23 図　土器（湿地その 3） …… 42
第 24 図　土器（湿地その 4） …… 43
第 25 図　土器（湿地その 5） …… 45
第 26 図　土器（湿地その 6） …… 46
第 27 図　土器（湿地その 7） …… 47
第 28 図　土器（湿地その 8） …… 49
第 29 図　土器（湿地その 9 遺構外）・陶磁器・
漆器 …… 51
第 30 図　その他の遺物（石製品） …… 52
第 31 図　その他の遺物（石製品・石器・金属製品・
土製品・木製品） …… 53
第 32 図　中嶋・羽黒田遺跡全体平面 …… 62
第 33 図　羽黒田遺跡竪穴住居変遷 …… 63
第 34 図　坏類変遷（羽黒田遺跡） …… 66
第 35 図　供膳具変遷（中嶋遺跡 2011） …… 67


# 表　目　次


表 1　竪穴住居一覧 …… 26
表 2　掲載遺物一覧（器類） …… 54
表 3　掲載遺物一覧（石器・石製品・土製品・
金属製品・木製品） …… 60


# 写真図版目次


写真図版 1　航空写真 …… 71
写真図版 2　調査区全景 …… 72
写真図版 3　SI1101 …… 73
写真図版 4　SI1102 …… 74
写真図版 5　SI1103 …… 75
写真図版 6　SI1104（1） …… 76
写真図版 7　SI1104（2） …… 77
写真図版 8　SI1105（1） …… 78
写真図版 9　SI1105（2） …… 79
写真図版 10　SI1105（3） …… 80
写真図版 11　SI1106 …… 81
写真図版 12　SI1107 …… 82
写真図版 13　SI1108・1109 …… 83
写真図版 14　土坑（SK1101～1107） …… 84
写真図版 15　土坑（SK1107～1109）・湿地 …… 85
写真図版 16　土器（1～10） …… 86
写真図版 17　土器（11～18） …… 87
写真図版 18　土器（19～26） …… 88
写真図版 19　土器（27～36） …… 89
写真図版 20　土器（37～42） …… 90
写真図版 21　土器（43～52） …… 91
写真図版 22　土器（53～60） …… 92
写真図版 23　土器（61～71） …… 93
写真図版 24　土器（72～83） …… 94
写真図版 25　土器（84～97） …… 95
写真図版 26　土器（98～110） …… 96
写真図版 27　土器（111～122） …… 97
写真図版 28　土器（123～132） …… 98
写真図版 29　土器（133～143） …… 99
写真図版 30　土器（144～154） …… 100

写真図版 31　土器（155～163）……101
写真図版 32　土器（164～176）……102
写真図版 33　土器（177～186）……103
写真図版 34　土器（187～196）……104
写真図版 35　土器（197～202）……105
写真図版 36　土器（203～209）……106
写真図版 37　土器（210～217）……107
写真図版 38　土器（218～223a）……108
写真図版 39　土器（223b～227）……109
写真図版 40　土器（228～232）……110
写真図版 41　土器（233～241）……111
写真図版 42　土器（242～244）・陶磁器（245～247）・
漆器（248）・石製品（249～253）・
土製品（267・268）……112
写真図版 43　石器・石製品（254～263）・
金属製品（264～266）・
木製品（269～272）……113

# Ⅰ　経緯と経過

## 1　調査経緯

中嶋遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区域内に遺跡が存在することから、発掘調査を実施することになったものである。

東北横断自動車道は、東北縦貫自動車道（東北道）に合流、さらに北上にて分岐し、西和賀・横手・大仙を経由して、秋田市内に至る総延長 212km（岩手県内 113km・供用区間 45km）の高規格道路である。

本線は、釜石・大船渡港といった重要港湾や、観光資源として有数な陸中海岸国立公園の拡がる三陸地方拠点の諸都市と、先端技術産業の集中が著しい北上中部地方拠点の諸都市や花巻空港等、岩手県内中枢地域、そして秋田県を結び、岩手・秋田両県全域の産業・経済の発展を担うことを目的に策定された。遠野－東和間については、平成 10 年度に遠野－宮守間で整備計画が、宮守－東和間では施行命令が、それぞれ出されている。また、平成 16 年度には新直轄方式による整備が決定している。

中嶋遺跡については、過年度に対象地周辺の発掘調査を実施しており、当該対象地内が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されたものであり、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所は協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手文化振興事業団に委託することとした。

この協議を受け、平成 23 年 4 月 12 日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、用地解決を待って発掘調査が行われることとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

## 2　調査経過

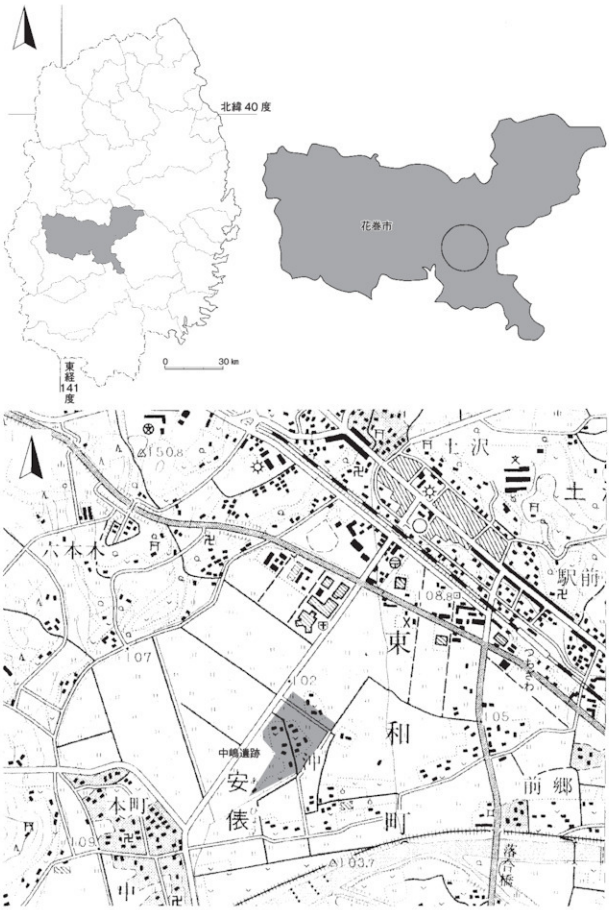
中嶋遺跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所との委託契約に基づき、平成 23 年 10 月 17 日より（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

今回の調査区は平成 19 年度・20 年度調査区の西側隣接地であると同時に、平成 20 年度に調査が行われた羽黒田遺跡の北側に水路を挟んで隣接する。

調査においては調査済みである羽黒田遺跡に築かれている暫定盛土の西側平坦地にプレハブおよび駐車場用敷鉄板を設置した。また、このプレハブから調査区へ進入するため用水路を渡る必要性から、ここにも敷き鉄板と水路にパイプを入れる準備工を（株）成和建設に委託した。

10 月 17 日に資材を搬入し、現場設営をおこない、先行着手する箇所の雑物撤去を人力によっておこなった。10 月 18 日よりトレンチの掘削を人力でおこない、表土の層厚や遺構面を確認し、翌日からこれらトレンチを基準に重機による表土除去をおこなった。重機による表土除去は、述べ 10 日あまりおこない、その間人力による遺構検出作業や遺物包含層の掘削作業もおこなっている。11 月初旬には、遺構の掘削作業および実測作業にも着手し、本格的な調査を進めた。なお、実測作業に必要な基準点については業務委託した。11 月 23 日は祝日であったが、一般の方への現地公開をおこない、73 人の参加があった。11 月 29 には現地にて国土交通省、岩手県教育委員会の立ち会いの下、終了確認がおこなわれた。12 月 2 日には航空写真撮影をおこない、同日すべての調査を終了し撤収した。

（福島）


北緯 40 度
花巻市
東経 141 度
0
30 km
土沢
六本木
駅前
東
和
町
安
俵
中嶋遺跡
本町
前郷
落合橋
150.8
108.8
107
102
105
109
103.7

第１図　遺跡の位置

# Ⅱ 位置と環境

## 1 遺跡の位置

中嶋遺跡は、岩手県花巻市東和町安俵11区に所在する。

花巻市は岩手県のほぼ中央に位置し、平成18年1月1日に花巻市、大迫町、石鳥谷町、東和町の1市3町が合併し、新「花巻市」となり現在に至る。市域の北は盛岡市、紫波町、雫石町、宮古市、東は遠野市、南は北上市、奥州市、西は西和賀町と接している。平成23年11月30日現在で、市域面積908.32㎢、人口102,293人、世帯数35,952世帯となっている。また、花巻市内には県内唯一の空港施設であるいわて花巻空港があり、陸路では東北新幹線、東北本線、釜石線、東北自動車道、東北横断自動車道などが整備された交通の要衝の地である。

遺跡の所在する旧東和町は花巻市の東側に位置し、花巻市役所から約10km東に東和町中心部の土沢地区が所在する。旧東和町を横断する国道283号は釜石街道と称され、内陸部と沿岸部を結ぶ重要なルートとなっており、これと併走するようにJR釜石線が横断している。遠野市や奥州市と接する旧東和町東端部には、周囲が45kmに及ぶ人工湖の田瀬湖がある。田瀬湖ではヨットやボート競技の競技場としても有名であるが、一方でキャンプ場など観光資源としての施設も整備されている。旧東和町出身の画家である萬鉄五郎は、日本画壇に大きな功績を残した一人である。現在も彼の生まれた土沢地区には萬鉄五郎記念美術館が設置されており、同時に周辺では芸術活動が盛んである。

中嶋遺跡は旧東和町中心部土沢地区の南に位置する安俵地区にあり、JR東日本釜石線土沢駅南約1kmの地点である。現在、共用されている東和インターチェンジに近い。遺跡周辺は起伏の無い水田地帯であり、今回の調査区も大半が水田であった。

## 2 地理的環境

岩手県は西側から奥羽山脈、北上川流域の北上盆地、東側の北上山地、リアス式海岸として有名な三陸海岸を有する沿岸地域からなっている。

旧東和町は、北上川中流域の北上盆地東部に立地し、標高1913.6mの早池峰山を起源とする猿ヶ石川が東から西へ流れる。周囲を山地で囲まれた小盆地となっており、狭い範囲で丘陵地や段丘が形成されている。

安俵地区の大半は猿ヶ石川の氾濫原を含む谷底平野広がる地帯となっており、標高100m前後の東和低地に立地している。

中嶋遺跡は、猿ヶ石川の0.5km北に位置し、この沖積作用によって形成された氾濫平野上に立地する。遺跡周辺は比高差のない水田地帯となっているが、本来は沖積作用による微地形が存在したものと推察される。遺跡内においてもその微妙な高低差を反映した地形の痕跡が認められる。

## 3 歴史的環境

中嶋遺跡の所在する旧東和町では、縄文時代～近現代に至る数多くの遺跡が確認されているが、本調査に至った遺跡は少なく未だ断片的な状況である。確認されている遺跡について、時代順に記述し

ていく。これらの遺跡は第２図によって位置を示した。

縄文時代では、古い時代の資料として西上町Ⅲ遺跡で貝殻腹縁文が施された早期の土器が出土している。中期の集落遺跡甚五郎遺跡では、複式炉を有する大形住居が検出されている。また、この地域を代表する中期～後期の集落遺跡である安俵６区遺跡では、環状列石を有する住居や集石遺構が検出されている。さらに、この遺跡では土器廃棄場と考えられる地点から多数の遺物が出土している。安俵６区遺跡に近在する清水屋敷Ⅲ遺跡では、後期の環状列石や配石遺構が検出されている。晩期に属する集落とみられる田光遺跡では、住居や貯蔵穴など集落構成要素の遺構が検出されている。

古代では、奈良時代の遺跡が未発見であるが、９世紀以降の平安時代の遺跡は多くみられ、特に中鳴遺跡周辺城では平安時代の集落遺跡が多く分布している。過去に中鳴遺跡の北にある清水屋敷Ⅱ遺跡で竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が検出されている。中鳴遺跡では過年度の調査で平安時代の井戸、竪穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出され、風字硯や刻書土器など特殊な遺物も多く出土した。調査成果から中鳴遺跡の集落は、この地域の拠点的な集落としての性格が浮かび上がった。南に隣接する羽黒田遺跡でも同時代の集落が調査され、平安時代の居住域が周辺一帯に広がっていたことが判明した。

中世では、城館が多く分布しており、これら城館は和我氏に関連するものと考えられている。中鳴遺跡周辺には、安俵五館と呼ばれる城館群が存在し、そのうち安俵城跡が調査されている。この安俵城跡は三連郭構造となっており、発掘調査では掘立柱建物や多数の柱穴群が検出されている。

以上のように中鳴遺跡周辺の歴史的環境について調査された遺跡から概観した。現在、旧東和町は花巻市の一部となったが、それ以前は「和賀郡東和町」であった。一方、合併した他２町の石鳥谷町や大迫町は、「稗貫郡石鳥谷町」・「稗貫郡大迫町」であった。中鳴遺跡が集落として機能した時代である平安時代には文献上からは郡制が採用されていた。当然のことながら、この地域は稗貫（稗縫）郡ではなく、和賀（和我）郡であったものと考えられる。中鳴遺跡や周辺に広がっている平安時代の集落にこの郡制がどのように関係しているかは不明であるが、今後考察する材料となる可能性は大いにあると思われる。

（福島）

**引用・参考文献**

・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発刊調査報告書
2010　岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第 547 集『中嶋遺跡発掘調査報告書』
2010　岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第 548 集『羽黒田遺跡発掘調査報告書』
・花巻市教育委員会
2008　花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書第５集『花巻市東和町内遺跡発掘調査報告書　倉沢 10 区Ⅰ・田光・押熊・長森遺跡』

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 中橋 | 散布地 | 平安 | 20 | 中屋敷 | 散布地 | 平安 | 39 | 北成島A | 散布地 | 縄文 | 58 | 西上町Ⅰ | 散布地 | 縄文 |
| 2 | 羽黒田 | 散布地 | 平安 | 21 | 前郷 | 散布地 | 平安 | 40 | 行人塚 | 塚 | 不明 | 59 | 和田Ⅰ | 散布地 | 平安 |
| 3 | 愛宕神社下 | 散布地 | 縄文？ | 22 | 新丁 | 散布地 | 平安 | 41 | 北成島上 | 散布地 | 縄文？・平安 | 60 | 中野 | 散布地 | 縄文 |
| 4 | 愛宕 | 散布地 | 平安 | 23 | 清水屋敷 | 散布地 | 縄文・平安 | 42 | 成崎寺Ⅱ | 散布地 | 縄文・平安 | 61 | 田手野 | 散布地 | 縄文・平安 |
| 5 | 愛宕鎮町 | 散布地 | 平安 | 24 | 清水屋敷Ⅱ | 型紙跡、集落跡 | 縄文・平安 | 43 | 成崎寺跡 | 散布地 | 縄文・近代 | 62 | 西上町Ⅱ | 散布地 | 平安 |
| 6 | 高八卦Ⅱ | 散布地 | 縄文後期 | 25 | 津島屋 | 散布地 | 縄文？・平安 | 44 | 昆沙門下ームⅡ | 散布地 | 縄文 | 63 | 西上町Ⅲ | 散布地 | 縄文 |
| 7 | 安俵3区 | 散布地 | 平安 | 26 | 舞六本木館跡 | 城館跡 | 中世 | 45 | 昆沙門下ームⅠ | 散布地 | 縄文 | 64 | 和田Ⅱ | 散布地 | 平安 |
| 8 | 安俵3区Ⅱ | 散布地 | 平安 | 27 | 舞押乗館 | 城館跡 | 中世 | 46 | 成島中田 | 散布地 | 平安 | 65 | 畑中 | 散布地 | 縄文・平安 |
| 9 | 安俵4区 | 散布地 | 縄文？・平安 | 28 | 押御堂墓跡 | 塚 | 江戸初期 | 47 | 奈良野 | 散布地 | 縄文・平安 | 66 | 下屋敷 | 散布地 | 平安 |
| 10 | 高八卦 | 散布地 | 縄文 | 29 | 押乗 | 散布地 | 縄文 | 48 | 一反田 | 散布地 | 平安 | 67 | 町井Ⅱ | 散布地 | 平安 |
| 11 | 舞並鹿館跡 | 城館跡 | 中世 | 30 | 安俵城跡 | 城館跡 | 中世 | 49 | 長根・成島館 | 散布地・城館跡 | 縄文・中世 | 68 | 新田Ⅱ | 散布地 | 平安 |
| 12 | 赤坂Ⅲ | 散布地 | 縄文 | 31 | 大石 | 散布地 | 縄文・平安 | 50 | 小通高屋敷 | 散布地 | 縄文 | 69 | 新田Ⅲ | 散布地 | 縄文 |
| 13 | 赤坂Ⅱ | 散布地 | 縄文 | 32 | 駒場日向 | 散布地 | 縄文・平安 | 51 | 矢崎橋下 | 散布地 | 平安 | 70 | 土橋 | 散布地 | 縄文 |
| 14 | 赤坂Ⅰ | 散布地 | 縄文 | 33 | 舞安俵高館跡 | 城館跡 | 中世 | 52 | 黄金山 | 散布地 | 平安 | 71 | 芦田橋 | 散布地 | 縄文 |
| 15 | 安俵6区 | 集落跡 | 縄文・近世 | 34 | 安俵9区 | 散布地 | 縄文 | 53 | 落合館野神社 | 散布地 | 縄文 | 72 | 小通中田 | 散布地 | 縄文 |
| 16 | 土沢城跡 | 城館跡 | 近世 | 35 | 矢崎Ⅱ | 散布地 | 縄文 | 54 | 田光 | 散布地 | 縄文 | 73 | 高屋敷 | 散布地 | 縄文 |
| 17 | 能山東 | 散布地 | 縄文？ | 36 | 矢崎 | 散布地 | 縄文・平安 | 55 | 落合2区Ⅰ | 散布地 | 縄文・平安 | | | | |
| 18 | 照谷 | 散布地 | 平安 | 37 | 中久田 | 散布地 | 縄文・平安 | 56 | 落合2区Ⅱ | 散布地 | 縄文・平安 | | | | |
| 19 | 清水ヶ丘 | 散布地 | 縄文 | 38 | 北成島B | 散布地 | 縄文・平安 | 57 | 西上町Ⅳ | 集落跡 | 縄文・平安 | | | | |

第２図　周辺の遺跡

# Ⅲ 調 査 方 法

## 1 発掘調査の方法

今回の調査区の調査前現況は水田・植栽地・雑種地に大まかに分かれる。調査開始当初は植栽地の植木が立っていた状態であったためそれ以外の地点から着手した。なお、植木についてはその後地権者によって撤去された。

雑種地に茂っていた植物を人力で除去し、その部分について人力でトレンチを掘削した。トレンチによる土層の大まかな把握が目的であった。湧水によって難航したが、表土や盛土の層厚や、遺構の広がりについて確認した。

その後は重機により表土を除去し、微低地部分については遺物包含層の直上まで重機による掘削を行った。重機による掘削が終了した部分については、順次遺構検出作業を人力で行ったが、微低地部分については人力によりトレンチ掘削や遺物包含層掘削作業を行った。

調査区はグリッドを設定した。このグリッドは過年度調査区で設定されたものに基づいてこれに連続するように設定した。このグリッドは、平面直角座標Ｘ系を基準とし、100m 四方の大グリッド、これを細分した５m 四方の小グリッドをそれぞれ設けている。大グリッドは東西を西から東へローマ数字により表現し、南北を北から南へアルファベット大文字により表現している。したがって、大グリッドでは、北西隅の区画が「ＩＡ」、この「ＩＡ」東隣の区画が「ⅡＡ」、「ＩＡ」南隣の区画が「ＩＢ」となる。小グリッドは東西を西から東へ算用数字により表現し、南北を北から南へアルファベット小文字により表現している。したがって、大グリッド「ＩＡ」を細分した北西隅の区画が「ＩA1a」、この「ＩA1a」東隣の区画が「ＩA2a」、「ＩA1a」南隣の区画が「ＩA1b」となる。ただし、微低地部分に広がる遺物包含層については調査区の形状や地形に合わせて上記のグリッドとは別に専用のグリッドを設定した。これは、５m 四方の区画をおおむね北西隅を起点の「１A'」とし、東隣に「２A'」、南隣に「１B'」と呼称した。したがって、微低地部分の遺物包含層出土遺物に関してのみ、このグリッドを用いている。

遺構の掘削作業は２分法あるいは４分法で掘削し、その断面により堆積状況の把握に努め、同時に記録した。

遺構名については、過年度調査に合わせ汎用的な遺構略号を用いた。遺構略号は竪穴住居や竪穴建物を「SI」、独立した土坑を「SK」、独立した柱穴を「SP」、独立した焼土遺構を「SF」とし、これに調査年度である 2011 年の 11 を頭に付けた 01 から順次番号を付与した。なお、竪穴住居に属する施設と考えられる遺構については、主体遺構名の後に「-」を付け、種別によって「S」と「0」を外して表現している。すなわち、今回の調査で検出した「竪穴住居１」内にある付属遺構の土坑については「SI1101-K1」、同じく柱穴については「SI1101-P1」となる。

調査に際して、遺跡名および調査年次は略号（NS-11）を用い、調査で記録したものすべてが、この略号によって管理されている。

遺構実測は、電子平板による測量を行い、遺構平面図・断面図を作成した。また、遺構の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラによる撮影を基本とし、６×７判モノクロによる写真を保存用として適宜撮影した。撮影に際しては、撮影カードの記入・写し込みを行い、撮影写真の整理に活用した。

## 2　整理作業の方法

発掘調査終了後の整理作業は、当センターの室内で行った。

遺構実測図はデータを基に編集し、遺構図版としての体裁を整えた。この作業は発掘現場で取得した点のデータを基に作成しており、これら各測点は変更せず必要な点や線を加えて整えた。これらのデータの座標値等はデータとして保存している。

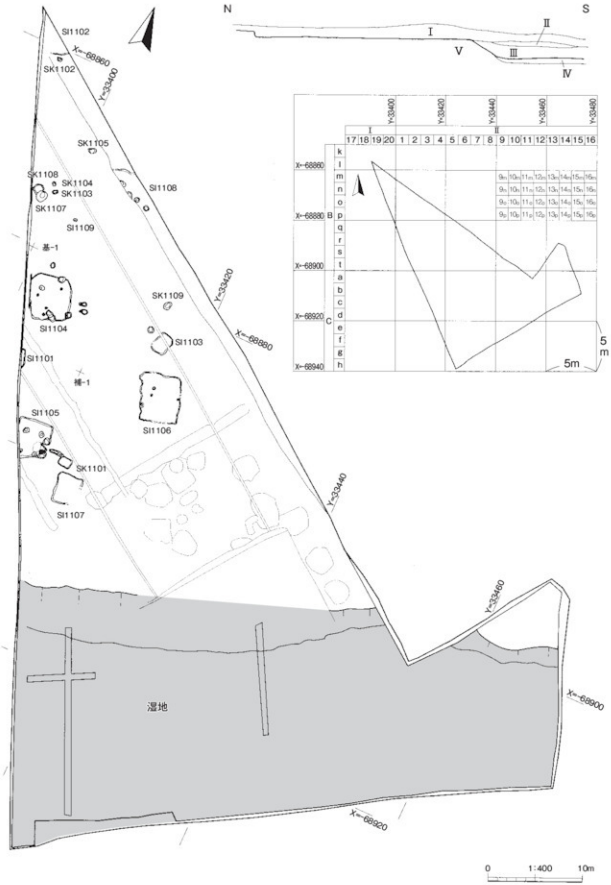
発掘調査現場で撮影した写真は、デジタル写真データは台帳を作成し、データ毎フォルダ整理を行った。また、ネガフィルムについては、それぞれアルバム整理を行った。本書に掲載する遺構写真は選択した後、レイアウト案を作成した。

出土した遺物は、すべて洗浄および注記を行い、その過程を経たものの接合作業を行った。これらの内、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影を行った。選択基準は、実測可能な残存状況の良いもの原則とし、土器類の破片につては、特徴から時期や土器型式が判明するもの、口縁部のあるものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での作業を基本とした。原寸で行った実測図は、縮尺を整えトレースを行い、図版用の版下を作成した。また、縄文土器表面や銭貨等は湿拓により拓本とした。遺物の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いて当センター内で行い、撮影したデータは編集し、写真図版として本書に掲載した。

すべての処理が終了した記録類および遺物は、所定の場所へ収納した。遺物の収納は、掲載遺物と不掲載遺物に分けて収納している。

本書に掲載した実測図のスケールは図版にスケールバーを付けた。遺構は原則的に竪穴住居を1/40、土坑等を1/20で掲載し、遺物は原則的に土器・陶磁器・漆器は1/3、石器および石製品は1/2あるいは1/4、銭貨の拓図は原寸で掲載した。

（福島）




第3図　全体平面および基本層序

# Ⅳ 調 査 成 果

## 1 調査概要と基本層序

今回の発掘調査区は、おおむね南北方向に延びるが、調査区北端に頂点を持つ三角形となっている。三角形は東側に張り出した部分を有する。この形状は現在の地割りによるところが多い。調査前の現況は水田と樹木が植えられているエリアに分かれるが、おおむね平坦である。

調査区は平成19・20年度調査区の西側に接している。また、南側は現在の水路を挟んで羽黒田遺跡と接している。平成19・20年度の調査では平安時代の竪穴住居が多数調査されており、今回はこの竪穴住居群で構成される集落が連続する。過年度調査区も含め、調査区内の地形は大きく分けて微高地部分と微低地部分に分けることができる。遺跡全体では、北側と南側にある微低地に挟まれた微高地が広がっており、この微高地部分において竪穴住居などの遺構が検出される。一方、微低地では平成19年度調査でやはり平安時代の井戸が調査されている。また、微低地部分は湿地化しており、平安時代の遺物を比較的多く含む遺物包含層が存在する。

今回の調査区では、北側の微低地部分は掛かっておらず、微高地部分とその南側に位置する微低地部分が対象である。検出した遺構はすべて微高地部分に存在し、竪穴住居9棟・土坑9基からなる。竪穴住居はすべて平安時代であり、土坑もやはり平安時代のものが主体であると考えられる。検出した竪穴住居はいずれも現代の水田造成によって削平されており、壁が残存するものは少なく、壁が残存していても非常に浅い。本来は遺構として存在したが、完全に削平されてしまい、失われたものもある可能性がある。竪穴住居や土坑では、おもに9～10世紀にかけての土師器や須恵器が出土した。湿地化した微低地部分には遺物包含層が広がっている。遺物包含層中には、土器類や木製品などがみられた。包含層で出土した土器は、摩滅した縄文土器（中期）や弥生土器少量と平安時代の土師器や須恵器がコンテナ約9箱出土した。遺物包含層より出土した土器は、微高地に所在する遺構出土のものと同時期のものも多く含まれているが、より年代幅が広く、9世紀前半～10世紀後半までのものが認められる。

基本層序は、微高地部分において水田耕作土等の表土を除去すると砂質シルトの地山が検出される。これが遺構検出面となっている。本来、この微高地には、微低地に存在する堆積層に連続する層もあったと考えられるが、やはり削平のため調査では確認できなかった。したがって、表土および水田耕作土よりも下位の層はすべて微低地部分に存在することになる。

Ⅰ層・・・表土［黒褐色粘質シルト］・水田耕作土［暗褐～青灰色粘質シルト］（微高地～微低地に存在）、盛土［褐色シルト主体］（微低地のみ存在）。いずれも現代の所産である。

Ⅱ層・・・中世遺物包含層［暗褐色粘質シルト］（微低地にのみ存在）。古代～中世の遺物を少量含む。攪乱を受けている箇所が多く残存度低い。

Ⅲ層・・・古代遺物包含層［暗褐～青灰色粘質シルト］（微低地にのみ存在）。縄文時代～古代の遺物を含む。特に平安時代の遺物が多い。

Ⅳ層・・・地山［青灰～灰色粘土］（微低地にのみ存在）。還元顕著な無遺物自然堆積層。

Ⅴ層・・・地山［浅黄橙～青灰色砂質シルト］（微高地では浅黄橙色、微低地では青灰色）。無遺物の自然堆積層で周辺域に広がる猿ヶ石川に起因する沖積層の一部であると考えられる。

## 2　検　出　遺　構

### （1）竪　穴　住　居

SI1101（第４図、写真図版３）

調査区北側の微高地の北西端に位置する。調査前の現況は水田の一部であった。遺構の大半が西側調査区外へと続いており、今回の調査では遺構東端部のみを検出した。検出層位は表土直下のⅤ層上面であり、暗褐色土の広がりを確認した。調査に際しては調査区際の壁面を断面として利用し掘削をおこなった。

規模は計測可能な範囲で長軸 2.05m、短軸 0.41m であり、検出した範囲から平面方形を基調とするものと推測される。検出面からの深さは８cm であり、上部が大きく削平されていることが想像される。

主軸方位は検出範囲のみで考えるとN-20.36°-W を指向すると想定される。

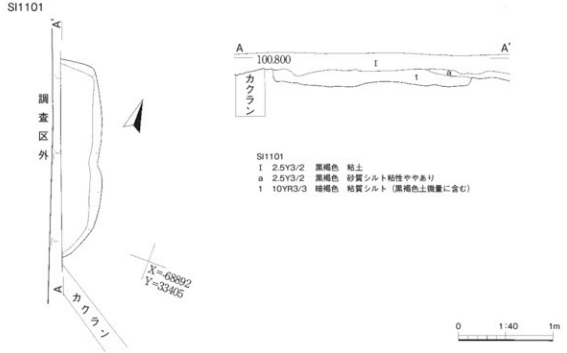
埋土は暗褐色土の単層である。検出範囲が限られているため、自然堆積、人為堆積の別は判断できないが、埋土に顕著なブロック土は含んでいないため自然堆積の可能性が高い。

壁は東側がすべて検出され、わずかに外傾して立ち上がる。北側および南側も同様の立ち上がりがみられるが、一部のみであるため全体の様相は不明である。

床面はわずかに凹凸がみられ、極端に締まった状況ではない。検出範囲内の床面では柱穴やカマド等の付属施設はみられない。また、床面直上に炭化物等の混入物も認められなかった。

出土遺物は２片の土師器片があるが、いずれも微細な破片であるため詳細な時期は不明である。また、これら遺物がこの遺構に帰属していたものかどうかも不明である。

このSI1101 は周辺の検出遺構や出土遺物から古代の竪穴住居である可能性が高い。さらに周辺に他時期の遺構がみられないことを考慮すると９～ 10 世紀の竪穴住居である可能性が考えられる。




第４図　SI1101

SI1102（第５図、写真図版４）

調査区北側微高地の西端に位置する。遺構の大部分が東側・西側調査区外に続いている。また中心部分が撹乱を受けており、確認できたのは南壁の一部のみである。

検出層位は表土直下のⅤ層上面であり、黄灰色土とオリーブ褐色土の広がりを確認した。

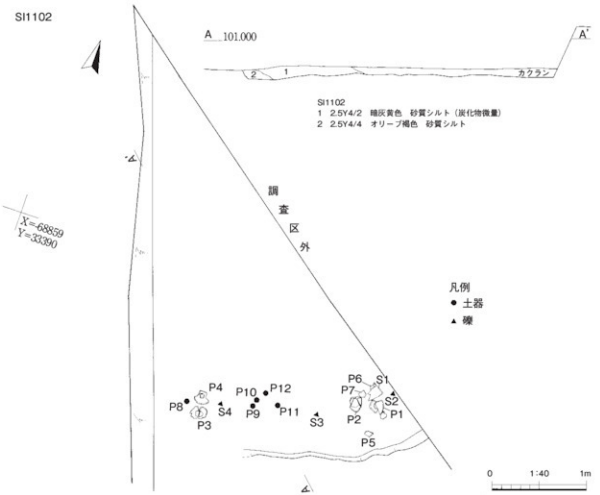
規模は計測可能な範囲で長軸 2.44 m、短軸 3.31 mであるが、平面形は不明である。検出面からの深さは 13.6cm であり、上部が大きく削平されていることが想像される。主軸方位は検出された範囲のみで考えると N-20.36°-W を指向すると想定される。

埋土は上下２層に分層でき、それぞれがレンズ状の堆積を示していることから自然堆積であると考えられる。

壁は外傾しながら立ち上がる。しかし、確認できた壁は南壁の一部のみであるため、全体の様相は不明である。

床面はわずかに凹凸があるが、極端な締まりはなく床面が北に向かってわずかに高くなっている。検出範囲内の床面では柱穴やカマド等の付属施設はみられない。また床面直上に炭化物等の混入物も認められなかった。

南壁付近で土師器坏や礫が出土した。遺物は南壁から約 50cm 内側で、壁と平行になるように列状に出土した。これら遺物は床面よりわずかに浮いた状態で出土した。壁から一定の間隔を持ちながら列状に遺物が出土する状況は、あたかも壁上部に並べ置かれていたものが遺構の廃絶とともに壁上面




第５図　SI1102

の土とともに転落したことが想起される。

出土遺物は先述の通り、土師器坏を中心にまとまっており、これらのうち10点を掲載した。いずれも平安時代（9～10世紀）のものである。出土状況から考えて、一括性の高い遺物群であるとみられる。また、永楽通寶が1点出土したが、後世の混入遺物であると判断される。

このSI1102は、その特徴および出土遺物から平安時代（9～10世紀）の竪穴住居の一部であると考えられる。

SI1103（第6図、写真図版5）

調査区北側微高地のほぼ中央に位置する。調査前の現況は水田の一部であった。検出層位はV層上面で、表土除去後暗褐色土の広がりで確認した。撹乱を受けており、西壁の一部が不明瞭である。また現代の暗渠による撹乱が西から東へ縦断している。

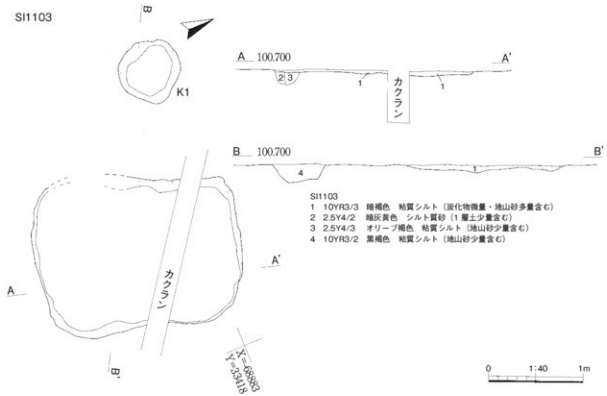
規模は長軸2.21 m、短軸1.62 mで隅丸方形であると考えられる。検出面からの深さは19cmであり、上部が大きく削平されていることが想像される。

主軸方位はN-20.607°-Eを指向すると思われる。

埋土は3層に分層でき、上層は地山に酷似する砂を多量に含んでいた。南壁付近でのみ検出された中・下層は締まりが強く、貼床であると考えられる。壁はわずかに外傾しながら立ち上がる。

床面と考えられる面は凹凸があり、西側で特に凹凸が多い。床面で柱穴やカマドなどの付属施設は確認できなかった。

西壁から外側へ少し離れて土坑を1基確認した。土坑の規模は長軸66.7cm短軸63.3cmで、平面形は不整円形である。検出面からの深さは20cmである。壁は外傾しながら立ち上がり、底面に凹凸はほとんどないが、東から西に向かって傾斜している。この土坑は竪穴住居跡カマドの脇につく土坑と考えられる。しかし上部が大きく削平を受けているため、本来どの壁に付属する土坑であったかは不明である。土坑の埋土は、地山砂が混じる黒褐色土の単層で、大きなブロック土を含んでいないた




第6図　SI1103

め自然堆積の可能性が高い。

出土遺物は平安時代（９～ 10 世紀）の土師器類が 20 点あまり出土しており、うち土師器坏１点を掲載した。

このSI1103は、その特徴および出土遺物から平安時代（９～ 10 世紀）の竪穴住居であると考えられる。

**SI1104**（第７・８図、写真図版６・７）

調査区北側微高地の西端に位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後褐色土の広がりを確認した。遺構内部は複数の撹乱を受けていた。

規模は長軸 4.71 m、短軸 4.15 mであり、隅丸方形の平面形態である。検出面からの深さは 11cmであり、上部が大きく削平されていると思われる。

主軸方位は N-21.896°-W を指向する。

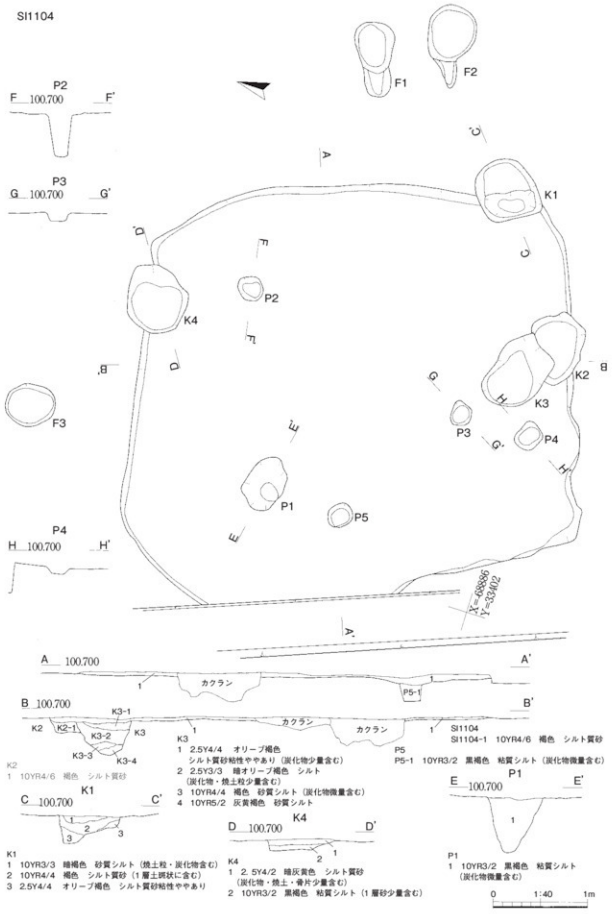
埋土は混入物を含まない褐色土の単層であるが、自然堆積、人為堆積の別は判断できない。壁は調査時のトレンチに掛かる西壁の一部を除いて検出され、わずかに外傾しながら立ち上がる。

床面はわずかに凹凸があり、東から西へ緩く傾斜している。貼床は確認できなかった。

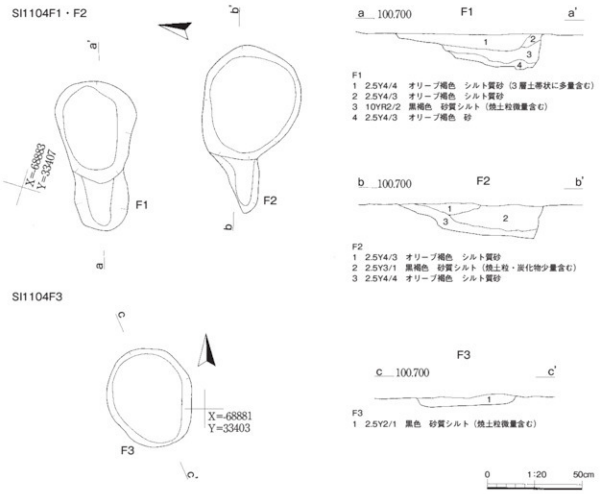
この遺構に帰属すると思われる煙出しを壁の外で３基（F1 ～ 3）確認した。東壁には F1・2、北壁の外側には F3 のそれぞれを検出した。F1 は東壁の中央よりやや南寄りの外側に位置し、F2 より北側にある。規模は直軸 79cm、短軸 42cm の不整楕円形である。検出面からの深さは西側が３cm、東側が 22cm である。壁は西側が外傾しつつ、階段状に立ち上がるのに対して、東側はほぼ垂直に立ち上がる。床面は西側の階段部分は凹凸もほとんどなく平滑であるが、東側は凹凸が多い。埋土は４層に分層でき、３層に焼土粒をわずかに含んでいる。オリーブ褐色土の１・４層が３層を挟むようにほぼ水平に堆積する。３層土中で遺物を数点確認した。F2 は東壁の南寄りの外側に位置し、F1 よりも南側にある。規模は長軸 89cm、短軸 50cm の不整楕円形である。検出面からの深さが西側３cm、東側 18.7cm である。壁は西側が一度ほぼ垂直に立ち上がり、半ば辺りから緩やかに外傾しながら立ち上がる。東側はわずかに外傾しながら立ち上がる。底面は西側にはやや凹凸があるが、東側はほとんど凹凸がなく滑らかである。埋土は３層に分層でき、２層が炭化物と焼土粒を含んでいる。１・３層には混入はほとんど認められない。また底面に沿って３層がほぼ一定の厚さで堆積している。遺物は認められなかった。F ３は北壁中央の外側に位置する。規模は長軸 54.8cm、短軸 46.7cm の楕円形である。検出面からの深さは 10cm である。壁はわずかに外傾しながら立ち上る。底面は凹凸がなく、滑らかであるが、わずかに南から北へ傾斜している。埋土は焼土粒を微量含む黒色土の単層である。これらＦ１～３はカマドの煙道から煙出しにかけての一部と考えられる。煙道の大半は、上部の削平で失われたものと考えられる。

床面では土坑を４基（K1 ～ 4）確認した。K1 は南東隅に位置する。規模は長軸 65cm、短軸 65cm の円形に近い楕円形である。検出面からの深さは南西側が 31cm、北東側が 10cm である。壁は南西側がわずかに外傾しながら立ち上がる。北東側は外傾しながら立ち上がり、途中でほぼ平らになり、そこからさらに立ち上がる。底面はほとんど凹凸がなく滑らかである。埋土は３層に分層でき、上層には炭化物と焼土を含んでいるが、レンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。

K １は住居跡の壁の輪郭を超えて、大きく外へ突出している。これは隣接する羽黒田遺跡、中嶋遺跡（平成 19・20 年度調査）でも確認されたカマド脇に付属する土坑であると考えられる。土坑の配置、カマドの煙道・煙出しと考えられる F1 ～３の配置から、F1・2 のカマドに付属する土坑であると考えられる。K ２は南壁のほぼ中央に位置し、K3 と重複し、これに切られる。そのため、北西側


SI1104
P2
F 100.700 F'
P3
G 100.700 G'
P4
H 100.700 H'
F1
F2
K1
K2
K3
K4
P1
P2
P3
P4
P5
F3
X=-68886
Y=33402
A 100.700 A'
カクラン
P5-1
B 100.700 B'
K3-1
K2 K2-1 K3-2 K3 K3-3 K3-4
カクラン
カクラン
1 SI1104
SI1104-1 10YR4/6 褐色 シルト質砂
K2
1 10YR4/6 褐色 シルト質砂
K3
1 2.5Y4/4 オリーブ褐色
シルト質砂粗性ややあり（炭化物少量含む）
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト
（炭化物・焼土粒少量含む）
3 10YR4/4 褐色 砂質シルト（炭化物微量含む）
4 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルト
P5
P5-1 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト（炭化物微量含む）
C 100.700 C'
K1
1
2
3
K1
1 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト（焼土粒・炭化物含む）
2 10YR4/4 褐色 シルト質砂（1層土斑状に含む）
3 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト質砂粗性ややあり
D 100.700 D'
K4
2
1
K4
1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質砂
（炭化物・焼土・骨片少量含む）
2 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト（1層砂少量含む）
E 100.700 E'
P1
1
P1
1 10YR3/2 黒褐色 粘質シルト
（炭化物微量含む）
0 1:40 1m

第7図　SI1104




第８図　SI1104 カマド

が不明であるが、確認できる範囲での規模は長軸 81.2cm、短軸 60.3cm の平面不整楕円形である。検出面からの深さは 19cm である。壁は確認できた南側はわずかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、ほぼ平らである。埋土は混入物を含まない褐色土の単層であり、地山ブロックなどの混入は認められない。K3 は K2 と同様南壁のほぼ中央に位置し、K2 と重複し、これを切る。規模は長軸 78.3cm、短軸 53.5cm の不整楕円形である。検出面からの深さは 38cm である。壁はわずかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がある。埋土は４層に分層でき、上部１～３層目は炭化物を含んでいる。K2・3 は南壁のほぼ中央に位置していた。この二つの土坑もＫ１と同様にカマドに付属する土坑であると考え、周辺を精査したがカマドやカマドに伴う煙出しなどは確認できなかった。中鳴遺跡（平成 20 年度調査）では南壁につくカマドは１基だけである（ＳＩ 0802 新段階カマド）。K4 は北壁中央よりやや東寄りに位置する。規模は長軸 76.4cm、短軸 67.2cm の不整楕円形である。検出面からの深さは 12.2cm である。壁は西側がほぼ垂直に立ち上がるが、東側は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はわずかに凹凸がある。埋土は上下２層に分層できる。いずれも炭化物を少量含んでいる。また上層には微細な骨片・焼土も微量含んでいる。K4 は K1 と同様に、土坑の輪郭が住居跡の輪郭を超えている。これは、カマドに向かって右脇に付属する土坑であると考えられる。位置関係からすると、F3 が北壁に作られていたカマドの煙出し部であると考えられる。

床面で柱穴（P1 ～ 5）と思われる小ピットを検出したが、これらの平面的な配置には、規則性が

認められない。P1 は北西中央に位置し、長軸 60.8cm、短軸 41.6cm の不整楕円形である。検出面からの深さは 57.6cm である。壁は垂直に立ち上がるが、途中から外傾して立ち上がる。底面が一段下がっている部分は柱が据えられていた可能性が考えられるが、埋土は炭化物を微量含む黒褐色土の単層であり、断面や検出面で柱痕跡は確認できなかった。そのため、柱を抜き取ったあと埋め戻したと考えられ、底面は平坦である。P2 は北東中央に位置し、長軸 41.6cm、短軸 41.6cm の円形に近い楕円形である。検出面からの深さは 34.5cm である。壁はわずかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がほとんどなく、滑らかである。埋土は、その他の撹乱と見分けがつかなかった。P3 は南西中央に位置し、長軸 27.7cm、短軸 27.7cm の円形に近い楕円形である。検出面からの深さは 10.4cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。底面はわずかに凹凸があるが、滑らかである。埋土はその他の撹乱と見分けがつかなかった。P4 は北東やや南寄りに位置し、長軸 29.9cm、短軸 22.3cm の楕円形である。検出面からの深さは 7.4cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、滑らかである。埋土は、その他の撹乱と見分けがつかなかった。P5 は中央よりやや西寄りに位置し、長軸 28.9cm、短軸 24.6cm の円形に近い楕円形である。検出面からの深さは 19.4cm である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面は滑らかである。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色の単層である。

出土遺物は埋土、K1 ～ 4 などで土師器類がみられ、うち 2 点の土師器甕を掲載した。1 点はロクロによる調整がなされており、平安時代（9 世紀）のものである。

このSI1104 は、その特徴および出土遺物から平安時代（9 世紀）の竪穴住居であると考えられる。

**SI1105**（第 9・10 図、写真図版 8 ～ 10）

調査区北側微高地中央よりやや西寄りに位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後オリーブ褐色土の広がりで確認した。煙出しが SK1101 と重複しており、これを切る。南壁と西壁の一部が調査区外へと続いている。

確認できた範囲での規模は長軸 4.17 m、短軸 3.58 mの平面隅丸方形である。検出面からの深さは 13cm であり、上部が大きく削平されていたことが想像される。

主軸方位は N-16.018°-W を指向する。

壁は外傾しながら立ち上がる。床面はわずかに凹凸があるが、ほぼ平坦で貼床の存在は確認できなかった。

カマドは東壁のやや南寄りに位置し、両袖部・燃焼部被熱範囲・煙道部・煙出し部をそれぞれ検出した。カマド本体の規模は長軸 2.58 m、短軸 0.97 mである。煙道残存部と煙出しは長軸 1.59 m短軸 38.8cm である。検出面からの深さは煙出し側で 31cm、煙道側で 5 cm であった。壁は煙道部側が大きく外傾し、複数の段を形成しながら立ち上がるが、煙出し側はわずかに外傾しながら立ち上がる。底面はわずかな凹凸があるものの、滑らかである。カマドから煙出し部にかけての埋土は、9 層に分層でき、1 ～ 5 層は煙道・煙出し内部に堆積した土である。3 ～ 5 層が炭化物や焼土を含む黒・黒褐色土である。2 層が分厚く堆積しており、人為的に堆積したものである可能性も考えられる。6・7 層はカマド上部に堆積した炭化物混じりの黒・褐色土である。8 層はカマド機能時に被熱した焼土である。9 層は炭化物を多く含んでおり、焼土も少量含んでいることから灰や炭を掻きだしたものが堆積したものと考えられる。袖部は地山を掘り残して構築されており、燃焼部には 61cm × 58cm の不整形の焼土が確認された（8 層）。これはカマド機能時の被熱によるものであると考えられる。この燃焼部の手前には、焼土粒と炭化物からなる 1.17 m × 68cm の不整楕円形範囲がみられる（9 層）。これらのことから、このカマドは廃絶後しばらくそのままにされており、ある時期に埋め戻されている可能性が考えられる。カマド天井部や煙道の一部などは上部の削平で失われたと考えられる。

床面では、床面を掘り込み面とした土坑２基（K1・K2）と柱穴４基（P1 ～ 4）を確認した。K1はカマドに向かって右脇、南東隅に位置し、長軸 87.6cm、短軸 73.6cm の不整楕円形である。確認面からの深さは 24cm である。壁は北側が外傾しながら立ち上がり、途中で平らになり、そこからまた外傾しながら立ち上がる。南側は外傾しながら立ち上がる。底面は北側には凹凸があるが、中央～南側は凹凸がなく滑らかである。埋土は３層に分層でき、混入物は認められず、レンズ状堆積であることから自然堆積と考えられる。K2 はカマドに向かって左脇、東壁の中央に位置する。規模は長軸 80.5cm、短軸 73.5cm の不整楕円形である。床面からの深さは 28.5cm である。壁は東側がやや垂直に立ち上がるのに対して、西側は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸がなく、滑らかである。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色の単層である。P1 は北東に位置し、規模は長軸 61.3cm、短軸 46.7cm の楕円形である。床面からの深さは 44.4cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、滑らかである。P2 は北西に位置し、規模は長軸 70.3cm、短軸 51.1 mの楕円形である。床面からの深さは 45.4cm である。壁は北側が外傾しつつ半ばからやや外反気味に立ち上がる。南側は垂直に立ち上がるが、一度外側に開き、さらに垂直気味に立ち上がり、そこから外反気味に立ち上がる。底面は凹凸がなく、滑らかである。P3 は南西に位置する。南西半分が調査区外に続いているため、確認できた範囲での規模は長軸 32.9cm、短軸 43cm である。平面形は不明であるが楕円形に近い形であると思われる。床面からの深さは 57.4cm である。壁は北側がほぼ垂直に立ち上がるが、上部で一度平らになり、そこから外傾して立ち上がる。北側が外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、滑らかである。P4 は南東に位置する。平面規模は長軸 54.3cm、短軸 49.7cm の楕円形である。床面からの深さは 57.4cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。底面はわずかに凹凸がある。P1 ～ 4 の埋土は全て３層に分層できる。各柱穴の土層ごとに多少の違いはあるが、土層の位置付けは同じである。２層が柱痕跡、３層は掘り方埋土と考えられる。また、１層が２層の上に蓋をするように堆積していることから、柱抜き取り後に埋められたあるいは埋まった土層であると考えられる。これらは、この竪穴住居に伴う柱穴と竪穴住居と重複する掘立柱建物の柱穴の二つの可能性がある。今回の調査の成果ではいずれとも断定することはできないが、柱穴の平面配置が竪穴住居の平面形態と齟齬を来していない。

出土遺物は埋土、床面、K2、P1 で土師器・須恵器がみられ、うち２点の土師器甕を掲載した。いずれもロクロによる調整がなされており、平安時代（９～ 10 世紀）のものであると考えられる。

このSI1105 は、その特徴および出土遺物から平安時代（９～ 10 世紀）の竪穴住居であると考えられる。

**SI1106**（第 11 図、写真図版 11）

調査区北側微高地中央に位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後黒褐色土の広がりを確認した。検出当初、遺構の範囲が不明瞭だったため数か所トレンチによって確認した。

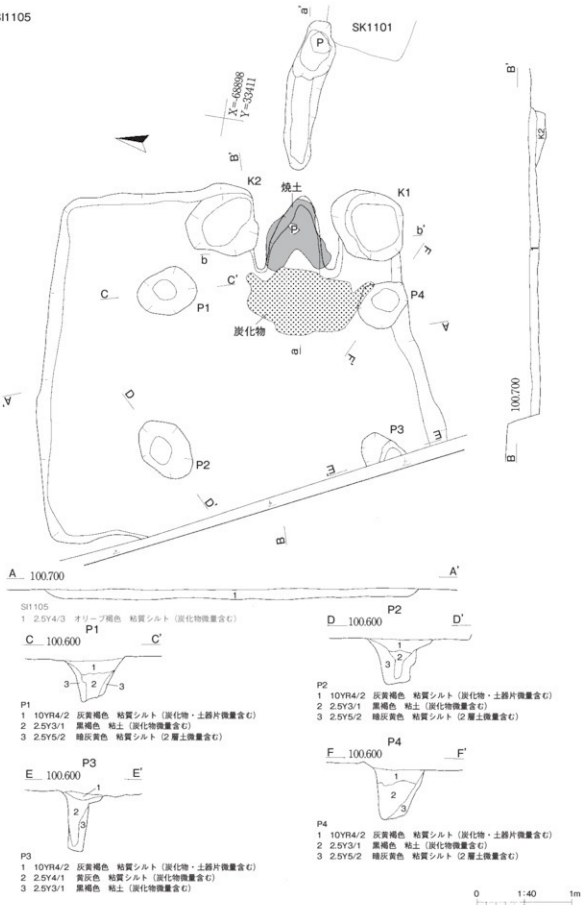
規模は長軸 4.91 m、短軸 4.28 mの隅丸方形であるが、東壁の一部が少し出っ張り、凹凸が激しい。

主軸方位は N-18.541°-W を指向する。検出面からの深さは深い所で 11cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。

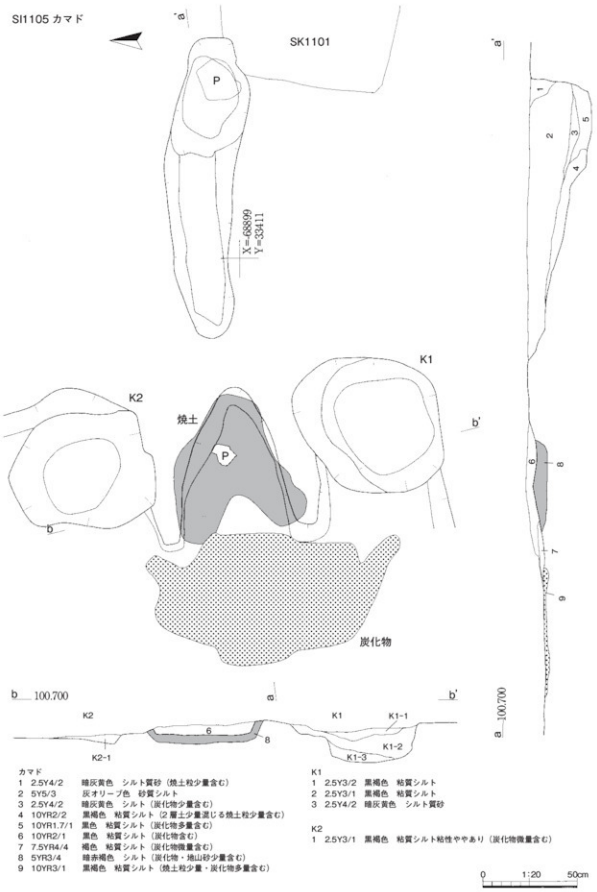
床面には凹凸が多くあるが、極端に締まりが強いところはなく、貼床は確認できなかった。

埋土は炭化物・地山砂を含む黒褐色土の単層である。自然堆積か人為堆積の別は判断できない。遺構の中心部及び南側では埋土がほとんど残存していない部分があるが、これは上部削平により失われたものと考えられる。

床面で柱穴とみられる小ピットを４基(P1 ～ 4)確認したが、これらの平面的な配置は不規則である。


SI1105
SK1101
X=68898
Y=53411
焼土
炭化物
K1
K2
P1
P2
P3
P4
100.700
SI1105
1　2.5Y4/3　オリーブ褐色　粘質シルト（炭化物微量含む）
P1
1　10YR4/2　灰黄褐色　粘質シルト（炭化物・土器片微量含む）
2　2.5Y3/1　黒褐色　粘土（炭化物微量含む）
3　2.5Y5/2　暗灰黄色　粘質シルト（2 層土微量含む）
P2
1　10YR4/2　灰黄褐色　粘質シルト（炭化物・土器片微量含む）
2　2.5Y3/1　黒褐色　粘土（炭化物微量含む）
3　2.5Y5/2　暗灰黄色　粘質シルト（2 層土微量含む）
P3
1　10YR4/2　灰黄褐色　粘質シルト（炭化物・土器片微量含む）
2　2.5Y4/1　黄灰色　粘質シルト（炭化物微量含む）
3　2.5Y3/1　黒褐色　粘土（炭化物微量含む）
P4
1　10YR4/2　灰黄褐色　粘質シルト（炭化物・土器片微量含む）
2　2.5Y3/1　黒褐色　粘土（炭化物微量含む）
3　2.5Y5/2　暗灰黄色　粘質シルト（2 層土微量含む）
0　1:40　1m

第9図　SI1105




カマド
1　2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト質砂（焼土粒少量含む）
2　5Y5/3　灰オリーブ色　砂質シルト
3　2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト（炭化物少量含む）
4　10YR2/2　黒褐色　粘質シルト（2 層土少量混じる焼土粒少量含む）
5　10YR1.7/1　黒色　粘質シルト（炭化物多量含む）
6　10YR2/1　黒色　粘質シルト（炭化物含む）
7　7.5YR4/4　褐色　粘質シルト（炭化物微量含む）
8　5YR3/4　暗赤褐色　シルト（炭化物・地山砂少量含む）
9　10YR3/1　黒褐色　粘質シルト（焼土粒少量・炭化物多量含む）

K1
1　2.5Y3/2　黒褐色　粘質シルト
2　2.5Y3/1　黒褐色　粘質シルト
3　2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト質砂

K2
1　2.5Y3/1　黒褐色　粘質シルト粘性ややあり（炭化物微量含む）

第10図　SI1105 カマド

P1 は中央より西側に位置し、規模は長軸 33.5cm、短軸 31cm の円形である。検出面からの深さは 28cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凹凸があるが、滑らかである。埋土は上下 2 層に分層でき、いずれも炭化物を微量に含んでいる。P2 は西壁付近に位置し、規模は長軸 47.4cm、短軸 36.9cm の楕円形である。床面からの深さは 14cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。底面はやや凹凸があるが、滑らかである。埋土は炭化物を微量に含む黄灰色土の単層である。P3 は中央よりやや西に位置し、規模は長軸 28.8cm、短軸 21.9cm の楕円形である。床面からの深さは南側が 27cm、北側が 12cm である。壁は南側がほぼ垂直に立ち上がるが、北側は段を形成しながら立ち上がる。底面は目立った凹凸はないが北から南へ傾斜する。P4 は東壁付近に位置し、規模は長軸 23cm、短軸 19.2cm の楕円形である。床面からの深さは 25cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。底面は少し凹凸があるが、おおむね滑らかである。埋土は炭化物を微量含む黄灰色土の単層である。床面においては、これら小ピット以外の付属施設は確認できなかった。

出土遺物は埋土、P1 で土師器・須恵器がみられたが、いずれも微細な破片であるため掲載していない。出土した土器はいずれも平安時代（9 ～ 10 世紀）のものであると考えられる。

この SI1106 は、その特徴および出土遺物から平安時代（9 ～ 10 世紀）のカマドを持たない竪穴住居であると考えられる。

**SI1107**（第 12 図、写真図版 12）

調査区北側微高地中央やや西寄りに位置する。検出層位は V 層上面で表土除去後、黒褐色土の広がりで確認した。

南東隅が撹乱によって壊されており、東壁の一部と南壁の一部が壊れているが、確認できる範囲での規模は長軸 3.29 m、短軸 2.79 m の平面隅丸方形である。

主軸方位は N-4.817°-W を指向する。

検出面からの深さは 13cm で、上部が大きく削平されていることが想像される。壁は外傾しながら立ち上がる。

床は凹凸が少なく、比較的平滑であるが貼床は確認できなかった。また、床面においては、付属施設は確認できなかった。

埋土は混入物を含まない黒褐色土の単層である。

出土遺物は埋土で少量の土師器・須恵器がみられ、うち 1 点の土師器坏を掲載した。この土師器坏はロクロによる調整がみられ、平安時代（9 ～ 10 世紀）のものであると考えられる。

この SI1107 は、その特徴および出土遺物から平安時代（9 ～ 10 世紀）のカマドを持たない竪穴住居であると考えられる。

**SI1108**（第 13 図、写真図版 13）

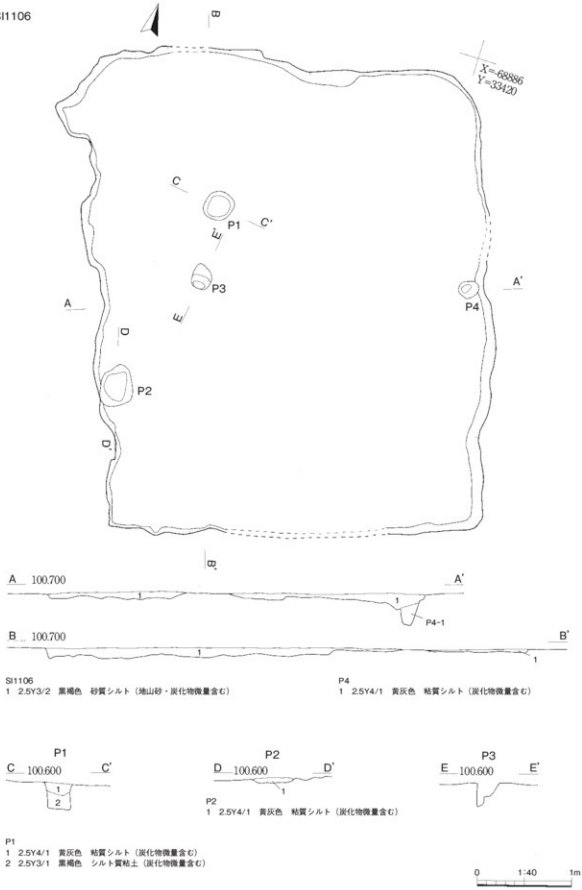
調査区北側微高地中央よりやや北西寄りに位置する。検出層位は V 層上面で表土除去後、にぶい黄褐色土の広がりで確認した。遺構の北東部分は調査区外に続き、南西側は削平のため確認できなかった。残存部分も削平が著しいが、壁はわずかに外傾しながら立ち上がる。

確認面からの深さは 17.4cm である。

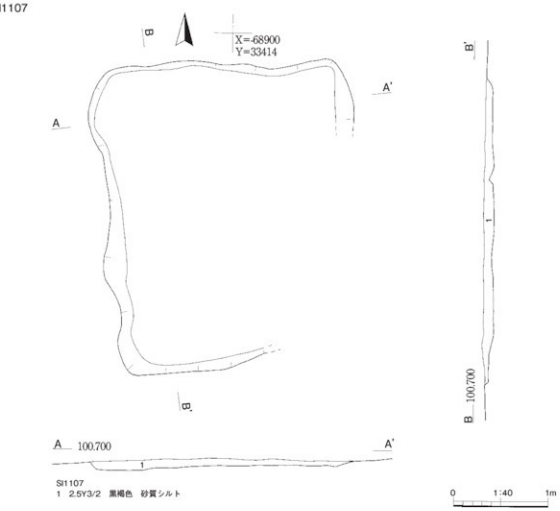
床面は凹凸が少なく平滑であるが、南西から北東に向かってわずかに傾斜する。貼床は確認できなかった。

埋土は炭化物を微量に含むにぶい黄褐色土の単層である。

床面では土坑を 3 基（K1 ～ K3）確認した。K1 は南東に位置し、規模は長軸 50.2cm、短軸 48.9cm の円形である。床面からの深さは 21cm である。壁は外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく平


SI1106
X=-68886
Y=-33420
P1
P2
P3
P4
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
A 100.700
A'
P4-1
B 100.700
B'
SI1106
1 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト（地山砂・炭化物微量含む）
P4
1 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト（炭化物微量含む）
P1
C 100.600
C'
P2
D 100.600
D'
P3
E 100.600
E'
P2
1 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト（炭化物微量含む）
P1
1 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト（炭化物微量含む）
2 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質粘土（炭化物微量含む）
0 1:40 1m

第11図 SI1106




第12図　SI1107

坦である。埋土は炭化物を微量に含む黒色土の単層で、土師器・須恵器片が含まれていた。K2は南西に位置し、大部分は削平されている。確認できる範囲での規模は長軸60cm、短軸35.7cmであるが、平面形は不明である。床面からの深さは19cmである。壁は外傾しながら立ち上がり、底面は丸く窪む箇所があり、その他は凹凸なく滑らかである。埋土は上下２層に分層でき、上層には酸化鉄分を多く含み、下層には混入物は認められなかった。レンズ状堆積をしており、自然堆積と考えられる。K3は北西に位置し、大部分は削平されている。確認できる範囲での規模は長軸55.8cm、短軸36cmであるが、平面形は不明である。検出面からの深さは11cmである。壁は外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸が少なく平坦である。埋土は炭化物を微量に含む灰黄褐色土の単層である。床面においては、これら土坑以外の付属施設は確認できなかった。

遺物は埋土、K1で土師器や須恵器片が少量みられ、うち４点の土師器を掲載した。４点中１点が土師器鉢である以外は土師器甕である。いずれの掲載遺物もロクロによる調整がなされており、平安時代（９世紀）のものであると考えられる。

このSI1108は、その特徴および出土遺物から平安時代（９世紀）の竪穴住居であると考えられる。

**SI1109**（第14図、写真図版13）

調査区北側の微高地中央よりやや北寄りに位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後黒褐色土と被熱土の広がりで確認した。遺構の縁に熱を受けた痕跡を確認したため、カマドの煙道から煙出し

部であると判断しSI1109とした。周辺も精査をしたがその他の遺構は確認できなかった。

規模は長軸42.4cm短軸26.5cmの楕円形であり、検出面からの深さは11cmである。

壁は外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸もなく平坦である。

埋土は炭化物を微量含む黒褐色土の単層である。

出土遺物はみられないが、遺構の位置や方向、周辺の遺構群との関連を考えると、辛うじて残存した平安時代の竪穴住居に伴う竈出し部であると考えられる。

### （2）土　　坑

**SK1101**（第15図、写真図版14）

調査区北側微高地中央よりやや北寄りに位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後黒褐色土の広がりで確認した。SI1105竈出し部と北東隅で重複しているが、遺構上部での切り合いはなく、それぞれの遺構内部で切り合っている。この土坑はSI1105竈出し部先端に切られていると判断した。北東隅が重複しているため北壁・西壁の一部が不明であるが、規模は長軸1.29 m、短軸0.96 mの方形である。主軸方位はN-83.63°-Wを指向する。確認面からの深さは39cmである。壁はすべてほぼ垂直に立ちあがり、底面は凹凸がなく平坦である。このように、底面平坦で壁が極端に垂直に立ち、遺構上部の崩れた形跡もみられないことから、掘削後間もなく埋め戻された可能性が考えられる。埋土は5層に分層でき、全ての層に炭化物を含んでいる。最下層の5層は地山に酷似し、固くしまっている。出土遺物は埋土より土師器および須恵器（9世紀）の微細な破片が少量みられるが、図化に耐えうるものではないため掲載には至らなかった。このSK1101は、整然とした形態や掘削直後に埋め戻されている可能性が高いことから墓壙であると推測される。しかし、遺跡内では類似する遺構はみられないため群構成にはなっていない。

**SK1102**（第15図、写真図版14）

調査区北側微高地北西端に位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後暗灰黄色土の広がりで確認した。規模は長軸48cm、短軸42.8cmの平面不整楕円形であり、確認面からの深さは24cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はわずかに凹凸があるが、おおむね平滑である。埋土は上下2層に分層し、1層には礫が数点含まれており、人為堆積であると考えられる。このSK1102は、出土遺物がみられないが、埋土等の様子から古代の土坑であると考えられる。また、周辺の遺構の状況を考えると完全に削平された竪穴住居に付属する施設であった可能性も考えられる。

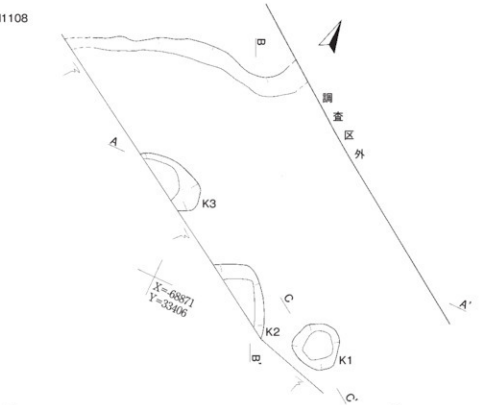
**SK1103**（第15図、写真図版14）

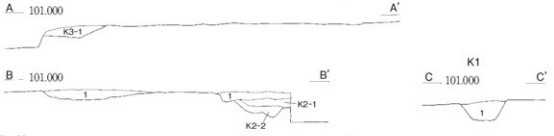
調査区北側微高地西端に位置する。検出層位はⅤ層上位で、表土除去後黒褐色土の広がりで確認した。規模は長軸53.4cm、短軸35.1cmの楕円形であり、検出面からの深さは17cmである。壁は一度ほぼ垂直に立ち上がり、半ば辺りから外傾しながら立ち上がる。底面はわずかに凹凸があるが、おおむね平滑である。埋土は炭化物を微量含む黒褐色土の単層である。このSK1103は、出土遺物皆無であるが、埋土等の様子から古代の土坑であると考えられる。また、周辺の遺構の状況を考えると完全に削平された竪穴住居に付属する施設であった可能性も考えられる。

**SK1104**（第15図、写真図版14）

調査区北側の微高地西端に位置する。検出層位はⅤ層上位で、表土除去後黒褐色土の広がりで確認した。規模は長軸42.6cm、短軸35.1cmの楕円形であり、検出面からの深さは7.4cmである。壁は外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、平坦である。埋土は炭化物を含み、地山酷似の砂が微量に混じる黒褐色の単層である。このSK1104は、出土遺物皆無であるが、埋土等の様子から古代の土

SI1108




SI1108
1　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト（炭化物微量含む）

K3
1　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト粘性ややあり（炭化物・地山砂少量含む）

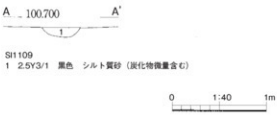
K1
1　2.5Y2/1　黒色　砂質シルト（土器片多量・炭化物微量含む）

K2
1　2.5Y4/3　オリーブ褐色　砂質シルト（酸化鉄分微量含む）
2　2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト質砂

0　1:40　1m

第13図　SI1108

SI1109




SI1109
1　2.5Y3/1　黒色　シルト質砂（炭化物微量含む）

0　1:40　1m

第14図　SI1109

坑であると考えられる。また、周辺の遺構の状況を考えると完全に削平された竪穴住居に付属する施設であった可能性も考えられる。

**SK1105**（第 15 図、写真図版 14・15）

調査区北側微高地中央より北西寄りに位置する。検出層位はⅤ層上位で、表土除去後黒褐色土の広がりで確認した。規模は長軸 73.2cm 短軸 46.5cm の楕円形であり、検出面からの深さは 11.4cm である。壁は南側が垂直に立ち上るが、北側は外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、平坦である。埋土は炭化物を微量に含む黒褐色土の単層である。この SK1105 は、出土遺物皆無であるが、埋土等の様子から古代の土坑であると考えられる。また、周辺の遺構の状況を考えると完全に削平された竪穴住居に付属する施設であった可能性も考えられる。

**SK1106**（第 15 図、写真図版 14）

調査区北側の微高地中央より北西寄りに位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後黒褐色土の広がりで確認した。規模は長軸 58.1cm、短軸 51.2cm の方形に近い円形であり、検出面からの深さは 22cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸がなく、なめらかである。埋土は上中下の 3 層に分層できる。3 層が比較的厚く堆積している。1・2 層は炭化物や礫・焼土を含む。水平に堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。出土遺物は埋土より平安時代の土師器がみられ、うち 3 点を掲載した。掲載遺物は坏 2 点、鉢 1 点でいずれもロクロによる調整がなされている。

このSK1106の性格は不明であるが、出土遺物から平安時代（9～10 世紀）の遺構であると考えられる。周辺の遺構の状況を考えると完全に削平された竪穴住居に付属する施設であった可能性も考えられる。

**SK1107**（第 15 図、写真図版 14・15）

調査区北側の微高地西端に位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後暗灰黄色土の広がりで確認した。SK1108 と北東部分で重複し、これを切る。規模は長軸 1.20 m、短軸 1.0 mの楕円形であり、検出面からの深さは 37cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、半ば付近から外側にやや膨らみながら立ち上がる。底面は西側には凹凸がややあるが、東側は凹凸がなく平坦である。埋土は上下 2 層に分層できる。下層層に混入物は認められなかったが、上層には被熱した礫と土師器坏類がまとまって出土した。これら遺物は中央から南西部にかけて集中しており、すべて同一層からの出土であった。これらのほとんどが欠損のない状態で出土しており、一括して埋められたと考えられる。出土遺物は先述のとおり、完形からほぼ完形の土師器坏類 8 点がまとまっており、これらを掲載した。これらは一括遺物である可能性が非常に高い。この SK1107 の性格は不明であるが、平安時代（9～10 世紀）の遺構であると考えられる。出土遺物は廃棄と捉えるには、あまりにも残存状態良好である。

**SK1108**（第 15 図、写真図版 15）

調査区北側微高地西端に位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後暗灰黄色土の広がりで確認した。SK1107 と南東部分で重複し、これに切られる。確認できる範囲での規模は長軸 1.00 m、短軸 0.76 mの平面やや方形に近い楕円形であり、検出面からの深さは 23.6cm である。壁はわずかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、平坦である。また西から東にわずかに傾斜している。埋土は 4 層に分層でき、レンズ状堆積であるため、自然堆積であると思われる。埋土中には遺物が含まれていない。この SK1108 は詳細な時期も性格も不明であるが、少なくとも SK1107 に先行する遺構であるため平安時代以前であるとみられる。

**SK1109**（第 15 図、写真図版 15）

調査区北側微高地中央よりやや北寄りに位置する。検出層位はⅤ層上面で、表土除去後黒褐色と暗

灰黄色土の広がりで確認した。規模は長軸98cm、短軸69.9cmの平面楕円形であり、検出面からの深さは21.4cmである。壁は北側がわずかに外傾しながら立ち上がる。南側がほぼ垂直に立ち上がり、半ばあたりで平坦になり、またわずかに外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸がなく、平滑である。埋土は上下２層に分層でき、上層に土師器・須恵器が比較的まとまって出土した。これらは一括性が高く、ほぼ同時期に埋まったものと考えられる。遺物は先述の通り、土師器・須恵器（９～10世紀）がまとまっており、うち７点の土師器を掲載した。これら土師器は１点の甕を除きすべて坏である。

このSK1109は、性格不明ながら出土遺物から平安時代（９～10世紀）の土坑であると考えられる。また、周辺の遺構の状況を考えると完全に削平された竪穴住居に付属する施設であった可能性も考えられる。

## （3）湿　　地

**遺物包含層**（第16図、写真図版15）

調査区南側の微低地部分に広がり、隣接する羽黒田遺跡へと続いているものとみられる。また、東西方向へは、今回の調査区外へ続いている。湿地は自然地形を反映する帯状の広がりであるとみられ、古代の遺構が広がる微高地より緩やかに下り傾斜する落ち込みである。

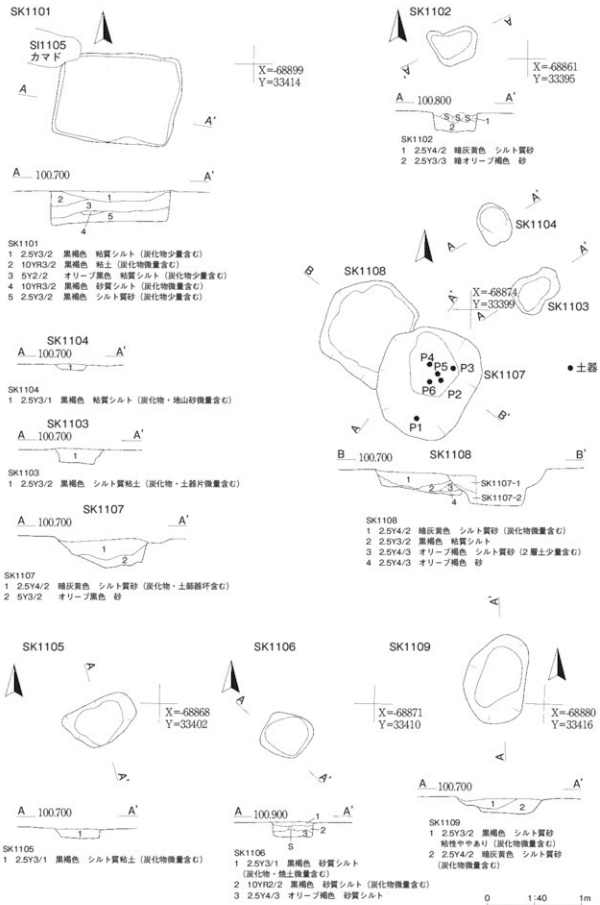
この落ち込む肩部のラインは、おおむね東西方向に延びるが、湿地専用に設けた任意のグリッド３～７の間では、近代の水田区画の段差、暗渠等で失われている。

遺物包含層（基本層序Ⅲ層）中からは平安時代を中心とする遺物が出土したが、遺物包含層上面や検出中には、わずかながらも中世の遺物が出土した。出土遺物は意図的な廃棄等の状況を示す出土ではないため、自然に微高地から流入してきたものと考えられる。また、遺物包含層の掘削時には、水流などで生じるラミナやウェーブリップルなどの単位層理もみられ、特に東側ではそれが顕著であった。ただし、粘質シルト主体の堆積状況からみて絶えず流水していたわけではなく、ある程度の期間滞水状態が続いていたものと考えられる。また、遺物包含層の平面的な広がりは、調査区南端までみられ、これを掘削したが、南に向かうにつれ遺物量が少なくなり、湿地グリッドのC’あるいはD’ではごく少量の出土にとどまった。このような出土遺物密度の差が生じるのは様々な要因が考えられるが、中嶋遺跡の古代集落側、すなわち湿地北側で多く遺物が出土することが、遺物の流入起源が北側にあることを裏付けるものと考えることができる。

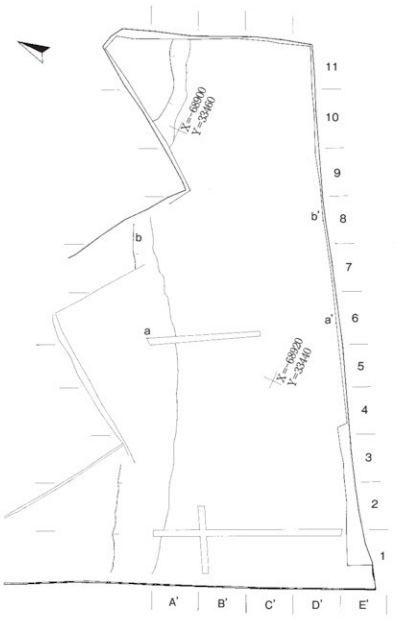
なお、遺物包含層より下位では遺物がみられず、より還元した自然堆積層である。これも南側ではより砂質が強まり、滞水やわずかな流水の作用が大きいものと考えられる。　（福島・巴）

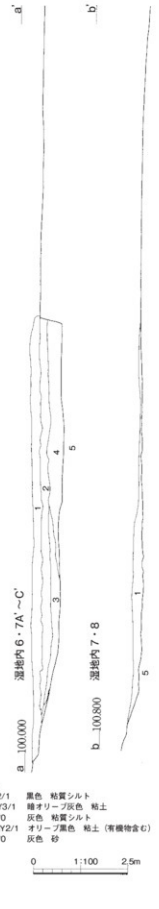
**表１　竪穴住居一覧**

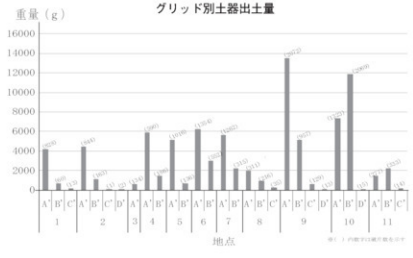
| 遺構名 | | 検出面 | 重複 | 平面形 | 長軸 | 短軸 | 主軸方位 | 深さ | 底面標高 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SI1101 | | V層上面 | なし | 隅丸方形？ | 2.052 | [0.405] | N-20.359－W | 0.08 | 100.425 |
| SI1102 | | V層上面 | なし | 不明？ | [2.449] | [3.355] | N-20.359－W | 0.136 | 100.624 |
| SI1103 | | V層上面 | 攪乱>SI1103 | 隅丸方形 | 2.219 | 1.623 | N-20.607－E | 0.19 | 100.555 |
| | K1 | | なし | 不整円形 | 0.667 | 0.633 | N-40.135－W | 0.184 | 100.425 |
| SI1104 | | V層上面 | トレンチ>SI1104 | 隅丸方形 | 4.719 | 4.15 | N-21.896－W | 0.11 | 100.586 |
| | K1 | | なし | 楕円形 | 0.65 | 0.65 | N-52.495－E | 0.31 | 100.308 |
| | K2 | | 新K3>K2 | 不整楕円形 | 0.812 | 0.603 | N-83.777－E | 0.19 | 100.296 |
| | K3 | | 新K3>K2 | 不整楕円形 | 0.783 | 0.535 | N-27.952－E | 0.38 | 100.18 |
| | K4 | | なし | 不整楕円形 | 0.764 | 0.672 | N-55.562－E | 0.122 | 100.618 |
| | F1 | | なし | 不整楕円形 | 0.791 | 0.42 | N-68.724－E | 0.22 | 100.416 |
| | F2 | | なし | 不整楕円形 | 0.89 | 0.506 | N-73.011－E | 0.187 | 100.428 |
| | F3 | | なし | 不整円形 | 0.548 | 0.467 | N-23.665－W | 0.467 | 100.452 |
| | P1 | | なし | 不整楕円形 | 0.608 | 0.416 | N-76.581－W | 0.576 | 100.029 |
| | P2 | | なし | 不整円形 | 0.416 | 0.416 | N-17.295－E | 0.454 | 100.135 |
| | P3 | | なし | 不整円形 | 0.277 | 0.277 | N-45.584－E | 0.104 | 100.462 |
| | P4 | | なし | 隅丸方形 | 0.299 | 0.223 | N-58.97－W | 0.074 | 100.444 |
| | P5 | | なし | 楕円形 | 0.289 | 0.246 | N-46.82－W | 0.194 | 100.34 |
| SI1105 | | V層上面 | 新トレンチ>SI1105>SK1101 | 隅丸方形 | 4.171 | 3.589 | N-16.018－W | 0.13 | 100.496 |
| | K1 | | なし | 不整楕円形 | 0.876 | 0.736 | N-29.315－E | 0.24 | 100.335 |
| | K2 | | なし | 不整楕円形 | 0.805 | 0.735 | N－54.553－W | 0.286 | 100.241 |
| | P1 | | なし | 楕円形 | 0.613 | 0.467 | N-36.907－W | 0.444 | 100.005 |
| | P2 | | なし | 楕円形 | 0.703 | 0.511 | N-43.616－E | 0.464 | 99.99 |
| | P3 | | なし | 不明 | [0.329] | 0.43 | N-62.89－E | 0.574 | 99.874 |
| | P4 | | なし | 不整楕円形 | 0.543 | 0.497 | N-37.291－W | 0.574 | 99.959 |
| | カマド | | SI1105>SK1101 | | 1.595 | 0.388 | N-89.03－W | 0.37 | 100.202 |
| SI1106 | | V層上面 | なし | 隅丸方形 | 4.912 | 4.289 | N-18.541－W | 0.11 | 100.575 |
| | P1 | | なし | 隅丸方形 | 0.335 | 0.31 | N-26.258－E | 0.28 | 100.224 |
| | P2 | | なし | 不整楕円形 | 0.474 | 0.369 | N-1.812－E | 0.14 | 100.332 |
| | P3 | | なし | 楕円形 | 0.288 | 0.219 | N-19.506－W | 0.27 | 100.247 |
| | P4 | | なし | 楕円形 | 0.23 | 0.192 | N-50.64－E | 0.25 | 100.253 |
| SI1107 | | V層上面 | なし | 隅丸方形 | 3.299 | 2.799 | N-4.817－W | 0.13 | 100.517 |
| SI1108 | | V層上面 | なし | 不明？ | - | - | - | 0.174 | 100.879 |
| | K1 | | なし | 不整円形 | 0.502 | 0.489 | N-10.003－E | 0.23 | 100.879 |
| | K2 | | なし | 不明 | [0.6] | [0.357] | N-30.455－W | 0.19 | 100.568 |
| | K3 | | なし | 楕円形 | [0.558] | [0.36] | N-68.973－W | 0.11 | 100.75 |
| SI1109 | | V層上面 | なし | 不明？ | 0.424 | 0.265 | N-75.931－E | 0.11 | 100.478 |




第15図　SK1101～1109




第16図　調査区南側湿地

## 3　出　土　遺　物

### （1）土　　器

**掲載土器の表現**

掲載した土器は実測図と写真で提示し、本章末の掲載遺物一覧に総覧している。本文中での説明は、表で示すことが困難な個別の特徴等を必要に応じて記載している。ここでは、これらを理解するための前提について記述する。

［器形・器種］今回掲載した古代の土器は土師器や須恵器からなる。土師器は酸化焔で焼成された土器、須恵器は還元焔焼成された土器という根本理念に基づいている。土師器の中に内外面黒色処理された土器と黒色処理されていない土器の両者が存在するが、いずれも土師器とした。ただし、これらが同一の施設および方法で焼成された可能性を否定するものではないことを付け加える。出土した土器にはロクロが用いられないものと用いられるものが存在する。本書では便宜的に前者を「土師器Ⅰ」、後者を「土師器Ⅱ」と分類した。須恵器の場合は、すべてロクロが用いられているため分類呼称は不要だが土師器との統一感を持たせるためあえて「須恵器Ⅱ」と呼称する。

今回の出土資料では供膳具に土師器と須恵器の両者が存在するが、土師器の方が数的優位にある。大半はロクロが用いられた土師器坏Ⅱ・須恵器坏Ⅱである。これらのうち、ロクロが用いられた土師器供膳具は内面を黒色処理されたものを「土師器坏Ⅱ A」、内外面を黒色処理されたものを「土師器坏Ⅱ B」、黒色処理されないものを「土師器坏Ⅱ C」とした。なお、須恵器坏はすべて「須恵器坏Ⅱ D」とした。また、それぞれ高台を有するものに関しては上記分類に「’」を付けて表現した。よって、ロクロが用いられ内面黒色処理された土師器高台付きの坏は「土師器坏Ⅱ A’」と呼称する。この分類は掲載遺物一覧末尾にも示してある。煮沸具は土師器甕で、これもロクロ使用の有無で土師器甕Ⅰと土師器甕Ⅱに分類した。

［成形］先述した通り、土器はロクロが用いられないものをⅠ、ロクロが用いられるものをⅡと分類した。「ロクロ成形」という用語が用いられることがあるが、適切ではない用語であるため本書では単にロクロが使用されているだけの場合は用いていない。土器の製作工程を分解した場合、大まかには成形段階・調整段階を経て焼成される。ロクロの回転力を用いて粘土塊から成形する方法を「ロクロ成形」とするのであれば、中形以上の土師器甕・鉢、須恵器の壺や甕体部はこの「ロクロ成形」には該当しない。これらは、少なくとも成形段階では、「粘土紐巻き上げ」や「粘土紐輪積み」によって成形がおこなわれていることは確実である。今回出土の土師器甕Ⅱにも輪積み痕が確認できる。つまり、成形という工程で粘土紐輪積み成形か否かを問う場合、対立概念として成立するのは供膳具類等の小形器種でみられる本来の意味での「ロクロ成形」である。あるいは、いずれとも異なる成形技法として「手捏ね成形」や「型作り成形」なども加わるものと思われるが、今回はこのような成形を経た土器は出土していない。供膳具等でみられる「ロクロ成形」も土器に残された痕跡から、ロクロの回転力を用いて粘土塊から挽き出す方法であると断定することは困難であることも注意を要する。一方、粘土紐輪積み成形後におこなわれるロクロ作業までを成形段階であると評価し、「ロクロ成形」と一括するのであれば、成形段階を２工程に分ける必要があり、その概念を整理し、説明した上で使用すべきである。したがって、本書では土器製作最初期段階の作業工程を「成形」と称し記述する。今回出土した土器を概観すると、土師器では甕（中形以上）、鉢、土師器坏Ⅰとされるもの、須恵器では壺・甕（中形以上）が「輪積み成形」に該当し、土師器坏Ⅱ・土師器甕Ⅱ（小形で底部に切り離

し痕があるもの）・須恵器坏などが本書で規定するところの「ロクロ成形」に該当する。今回出土の、粘土紐から成形する土師器甕Ⅰを観察すると、粘土紐をトグロ状に巻き上げる方法を採用しているものはなく、すべて輪積みに該当するものと思われる。また、須恵器の成形に関しては壺・甕類の口頸部のみを「ロクロ成形」する上下別成形のものが存在する可能性があることも付け加えておく。

**［調整］**成形後に器表面を整える作業が調整段階である。調整の種類については、土器表面に残存する痕跡の違いから分類される。そのため痕跡の残らないあるいは残りにくい調整を把握することは困難である。同じ調整段階でも、より成形に近い段階のものと見栄えや装飾効果を狙った仕上げ段階のものまで多岐にわたる。

タタキは調整段階の中でも初期に施される。その効果は器壁を叩き締め、内部の空気を逃がすと同時に器形の丸みを生み出すことにある。調整の中でもより成形段階に近い位置付けである。今回出土した土器を概観すると、タタキが施されている器種は土師器甕の一部、須恵器の壺・甕類など比較的大形の製品である。工具は羽子板状のものであると推定されており、工具には平行する刻みがあるものと考えられる。また、タタキは内面に支点となる押さえの必要性から、内面にそのアテ具の痕跡が伴う。タタキがみられる土師器甕は完全な丸底のものは認められないが、丸底傾向にあるものが存在し、これらは出羽の土師器甕の影響を強く受けている。

ハケはハケメとも呼ばれる調整で、器表面に細かな条線が認められる。この条線は工具木口の木目と推定されている（横山 1978）。今回出土の土器では、土師器甕Ⅰの器表面においておもにみられる。このハケ調整の痕跡には細かな木目を示すものから、やや大まかな木目を示すものまで多様である。これは工具に使われた樹種や木取りによるところが大きいと考えられ、実験例も存在する（横山 1978）。本書の実測図では、多様なハケをそのまま写し取った状態を図示している。

ヘラケズリは調整の中でも器表面の乾燥がやや進んだ状態で施される。これはその痕跡が砂粒の動きを伴うことからも明らかである。器壁をより薄くする効果があると考えられるが、どの程度有効な技法だったのかは施される前の厚みが判明しないため不明である。ヘラケズリ調整に使用される工具は木板であることが通常であると思われる。この理由として、同じ個体の中でヘラケズリからハケへと連続して転化している例がみられるためである。これは痕跡こそ異なるが、同一の工具が用いられていることを示唆している事例であり重要である。このヘラケズリはロクロの回転力を利用する「回転ヘラケズリ」と利用しない「ヘラケズリ」の２種が存在する。前者はヨコ方向、後者はタテ方向が主体となる。今回出土した土器を概観すると、「ヘラケズリ」が施される器種は土師器甕や須恵器壺類であり、「回転ヘラケズリ」はおもに坏類体部下端や底部にみられる。

ナデはロクロの回転力を利用しない調整であり、指によって器表面を撫でる調整である。どのような土器であっても製作に際して、様々なタイミングで無数に施されているものと推測される。他の調整よりも比較的無秩序であり、すべてを肉眼で捉えることは不可能である。したがって、本書実測図ではナデの表現はおこなっていない。しばしば、「ヘラナデ」という用語が用いられることがあるが、実際の土器器表面を観察して、その痕跡がハケと区分できない場合がある。これは、観察者によって認定が異なっている可能性があり、定義付けが難しい。また、指で撫でた痕跡を誤認して工具を用いているように捉え、「ヘラナデ」としている場合もある。このような理由から本書では、この曖昧な「ヘラナデ」という表現は用いていない。もし、「ハケ」と「ヘラナデ」が並立するのであれば、前者は工具木口の木目が器表面に条線として残るもの、後者は工具板目方向が用いられた条線の残らないものと区分することも可能である。しかし、後者の例は工具単位が不明瞭であると推測され、また、肉眼観察で特定できない可能性が高いと思われる。

回転ナデはロクロの回転力を利用したヨコ方向の連続するナデ調整である。器表面には凹凸が螺旋構造となって現れる。本書の実測図ではこの凹凸の凸部にロクロ目の稜線として２点抜きの直線で表現した。このようにロクロ作業で生じる凹凸は大半が指によってなされるようであるが、一部に工具が用いられている場合もあるようである。今回出土した土器にも存在しており、本書では指で施されたものと区別するために「回転ヘラナデ」と呼称し区別した。これは指で施される通常の回転ナデの手法と異なり、体部下方に向け強い工具の当たりが連続して看取され、器表面に非常に明瞭な段差が生じている。実測図には工具の当たりが強い下端部のラインを実線で表現している。今回出土した土器では、通常の「回転ナデ」はロクロを使用する器種の大半にみられるが、「回転ヘラナデ」は土師器坏、特に内面黒色処理されないもので多くみられる。

カキメはロクロの回転力を利用し木製工具木口を当て、ヨコ方向に平行する工具木目の細かな条線が水平に入る。装飾的な意味合いの強い調整であるとされており、須恵器壺・甕肩部など特定器種の特定箇所に施されるものに限定される。このような定義からすれば、土師器甕内面に「カキメ」などという表現は誤っている。しかし、既存の名称が無いため、あえて名称を与えるとするならば、「回転ハケ」になるのかもしれないが、今回の出土資料にはみられないため本書では特定しない。

ミガキはその痕跡から、乾燥の進んだ土器器表面に、棒状工具の先端を押しつけて動かすことによって器表面を密にする調整であると考えられる。調整の中でもより仕上げ段階に位置付けられる。今回出土した土器を概観すると、ミガキが施されている器種は土師器坏Ⅱ A・Ⅱ B、土師器鉢などで、供膳具である坏類は細い工具、供膳具より大形の鉢はそれよりやや太い工具の痕跡が認められる。また、ミガキ１単位内に繊維によるものと思われる非常に細かな条線がみられるものがあることから木製や竹製の工具が想定される。また、ミガキは黒色処理を伴う場合が大半である。

ヨコナデは口縁部などおもに端部を滑らかに仕上げるための調整である。大半の土器口縁部に認められる仕上げ段階の調整である。すなわち、ここで示すヨコナデは狭義の「ヨコナデ」ということになる。広義の「ヨコナデ」は単にヨコ方向に撫でる調整すべてを指すものと考えられる。口縁部等に限定されるヨコナデはその他のナデよりも際だって滑らかであることが多く、通常のナデとは手法が異なっている可能性が高い。推測であるが、この滑らかさはヨコナデを施す範囲に水分を与え、布や皮などをあてがっておこなわれていることが多いように思われる。特に土師器甕などは他の器種に比べ胎土が粗い傾向にあるためその滑らかさが際だっている。このヨコナデの痕跡を観察すると、細かな条線が明瞭に認められるものと条線が無く滑らかな状態のものに分かれる。この差異はヨコナデに際して用いられるものに起因する可能性が考えられ、多数の条線が明瞭に認められるものは布、無いものは皮（バックスキン）とそれぞれ当てるものが異なるのではないかと推測される。なお、前者は９世紀以前の甕類に顕著で、後者は９世紀以降の甕類に多く認められる。また、供膳具にも同様のヨコナデは施されており、施される幅が違うのみで甕類と何ら変わりないと考えられる。しかし、この「ヨコナデ」が実測図に示されている例があり、特に「土師器甕Ⅰ」のみに表現されることに違和感を覚える。ヨコナデが図示されるのであれば、ほとんどすべての土器に図示されるべきであり、このような理由から本書では、「土師器甕Ⅰ」であってもヨコナデは図示していない。

**［焼成］**土師器の焼成については不明な部分が多いが、土師器坏Ⅱ AとⅡ C を比較した場合、前者には体部下端から底部にかけて黒斑が認められるものがあるが、後者には黒斑がみられない。これは焼成方法の違いを示している可能性があるが、現段階では不明である。一方、須恵器坏には火襷がみられるものがあり、製品を重ねて稲ワラ等で結束したまま焼成された状況が看取される。

| 各種土器の製作工程（平安時代） | 成形 | → | 調整 | | → | 焼成 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器坏ⅠA | → 粘土紐輪積み | → | ナデ | ヨコナデ／ミガキ | → | 野焼き・焼成土坑 |
| 土師器坏ⅡA・B | → ロクロ | → | 回転ナデ | ヨコナデ／ミガキ | → | 焼成土坑 |
| 土師器坏ⅡC | → ロクロ | → | 回転ナデ | ヨコナデ | → | 焼成土坑・窯 |
| 須恵器坏 | → ロクロ | → | 回転ナデ | ヨコナデ | → | 窯 |
| 土師器甕Ⅰ | → 粘土紐輪積み | → | ヘラケズリ／ハケ | ヨコナデ | → | 野焼き・焼成土坑 |
| 土師器甕Ⅱ | 大 → 粘土紐輪積み<br>小 → ロクロ | →<br>→ | 回転ナデ／ヘラケズリ | ヨコナデ | →<br>→ | 焼成土坑・窯 |
| 土師器鉢Ⅱ | 大 → 粘土紐輪積み<br>小 → ロクロ | → 回転ナデ／ヘラケズリ<br>→ 回転ナデ／ヘラケズリ | | ヨコナデ／ミガキ<br>ヨコナデ／ミガキ | →<br>→ | 焼成土坑 |
| 須恵器壺類 | 大 → 粘土紐輪積み<br>小 → ロクロ | → 回転ナデ／ヘラケズリ<br>→ 回転ナデ／ヘラケズリ | | カキメ／ヨコナデ<br>ヨコナデ | →<br>→ | 窯 |
| 須恵器甕類 | → 粘土紐（帯）輪積み | → | タタキ／回転ナデ | カキメ／ヨコナデ | → | 窯 |

＊焼成施設は想定されるものを示している。

各種調整技法と表現方法

| 調整媒体 | ロクロ等回転力の有無 | 調整技法名 | 器面に残る痕跡 | 実測図表現方法 | 痕跡の写真（写真図版扉参照） |
|---|---|---|---|---|---|
| 工具 | × | タタキ | 平行する著しい太い線状の凹凸 | | №214 |
| | | ハケ（粗） | 断続的な数条単位の細かな条線で木目凹凸明瞭 | | №215 |
| | | ハケ（細） | 断続的な数条単位の細かな条線で木目凹凸細やか | | №13 |
| | | ヘラケズリ | 不定方向で断続的な砂粒の動き | | №23a |
| | | ミガキ | 断続的な光沢のある細かな単位の筋 | | №23b |
| | ○ | 回転ヘラナデ | 横、螺旋方向に連続して見られる工具の単位 | | №184 |
| | | 回転ヘラケズリ | 横、螺旋方向に連続して見られる砂粒の動き | | №158 |
| | | カキメ | 横、螺旋方向に連続して見られる数条単位の条線 | | №221 |
| 指＋皮<br>指＋布 | △ | ヨコナデ | 口縁部などに見られる横方向の連続的な粘土の動き | | |
| 指 | × | ナデ | 各所に見られる不定方向の断続的な粘土の動き | | |
| | ○ | 回転ナデ | 横・螺旋方向に連続的な粘土の動き | | №91 |

第17図　土器製作工程と表現方法

**遺構内出土土器**（第 18 ～ 20 図、写真図版 16 ～ 20）

遺構内（竪穴住居・土坑）から出土した土器のうち、本書に掲載したものは 1 ～ 38 が該当する。すべて平安時代（9 ～ 10 世紀）の土器で、土師器あるいは須恵器のいずれかである。1 ～ 10 は SI1102 出土の土師器である。いずれもこの遺構埋土より出土した坏で、すべてロクロの使用が認められる。土師器坏Ⅱ A と土師器Ⅱ C に分類されるものがみられる。2 は体部中位で故意に打ち欠いたと思われる破面が確認でき、土器の損壊儀礼のような祭祀的な意味合いを示唆している可能性が高い。3 は体部下端から底部にかけて回転糸切りによる切り離し後の回転ヘラケズリがみられる。4 は体部下端に回転ヘラケズリが施されている。6 は小破片であるが、外面に焼成後の線刻が認められるが、この線刻の意味は不明である。7・9 は体部下端に回転ヘラケズリが施されている。

11 は SI1103 出土の高台が付けられた土師器坏Ⅱ A´である。高台は端部を丸く収めた形態で、「ハ」字形に開く形態である。

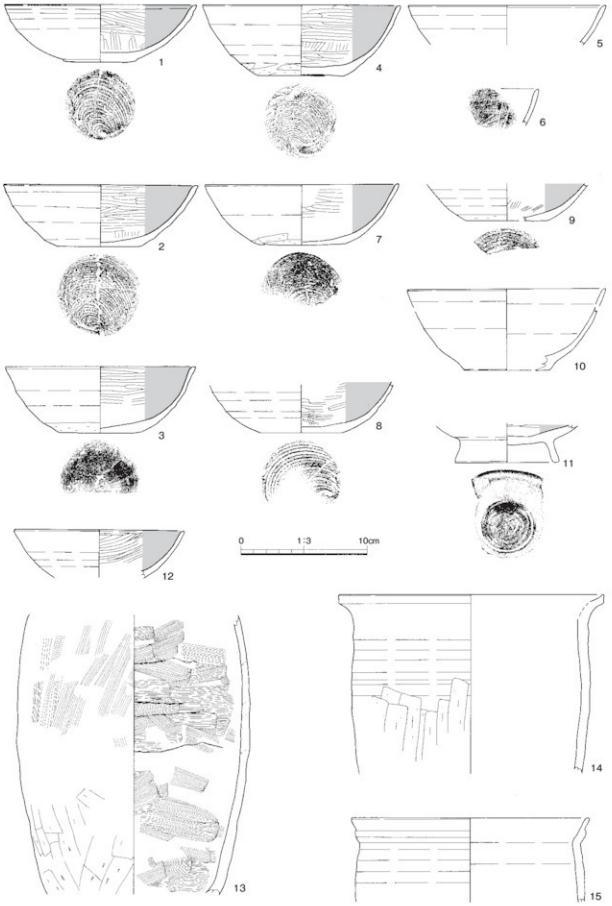
12・13 は SI1104 出土の土師器である。12 は土師器坏Ⅱ A、13 はロクロの使用が認められない土師器甕 I である。B は内面調整ヨコ方向のハケ、外面調整が下半部タテ方向のヘラケズリ、上半部がタテ方向のハケである。この外面のヘラケズリとハケは、工具幅、動かした方向とも共通しており、同一の工具による一連の調整であると考えられる。同様の調整をおこないながらも、土器器表面に残存する最終的な痕跡が異なる理由については、生地粘土の乾燥の進行状況によって変化する可能性が考えられる。すなわち、底部から上へ向かって成形する土器の性格上、調整時において下半部は上半部に比べ、乾燥が進んでいる可能性が高く、工具の木目が明瞭に残るハケよりも砂粒が動くようなヘラケズリとなることが想定される。ただし、調整をおこなう製作者は、下半部において力の入れ具合を強めている可能性は高く、調整痕跡の差はある程度製作者の意識的なものも加わっていると考えられる。

14・15 は SI1105 出土の土師器甕Ⅱである。14 は煙道埋土下層、15 は竪穴住居床面より出土した。15 は頸部に突出する段差が巡り、口縁部はより厚みを減じた特徴的な形態である。体部の形態は通常のものと変わらない。

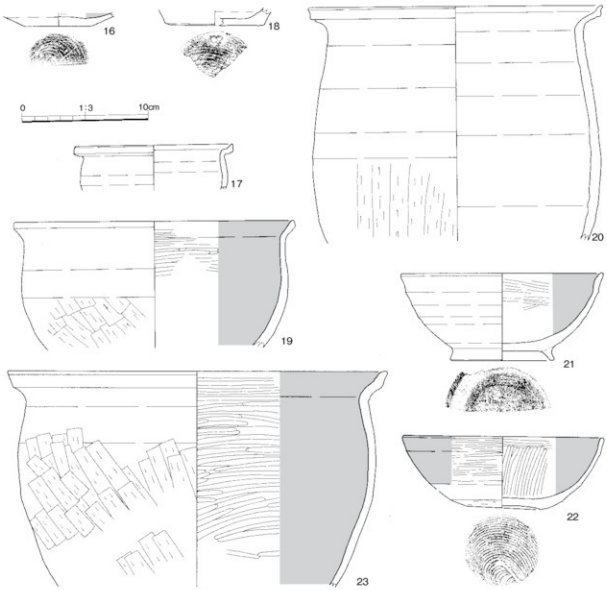
16 は SI1107 埋土出土の土師器坏Ⅱ A である。体部下半から底部のみ残存しており、全体の形態は不明である。

17 ～ 20 は SI1108 出土の土師器類である。17 は竪穴住居埋土、18 ～ 20 は住居内で検出した土坑（SI1108-K1）より出土した。17・18・20 は土師器甕Ⅱに分類できるが、17・18 は小形の甕であると考えられる。18 は底部回転糸切り後無調整である。19 は内面ミガキ・黒色処理されている土師器鉢である。土師器甕Ⅱと比較して、体部に丸みがあり、胎土が緻密で、器壁がより厚めである。煮沸具である土師器甕とは異なり、貯蔵具に属するものと考えられるが、用途不明である。外面にヘラケズリが施されている。

21 ～ 23 は SK1106 埋土より出土した土師器である。21 は土師器坏ⅡA´、22 は内外面黒色処理された土師器坏ⅡB にそれぞれ分類できる。21は内面の黒色処理が 2 次的な被熱で酸化・消失しているが、ミガキ調整の存在から黒色処理器であると考えられる。また、高台を有し、高台は坏部底面外周に貼り付けられている。22 は土師器坏ⅡB としたが、体部外面下半はミガキ調整不明で、なおかつ酸化焔焼成の色調である。一方、体部外面上半のミガキ調整は明瞭であり、色調も黒色である。この黒色は焼成時の黒斑や内面黒処理時の煤漏れで生じた可能性もあるが、同じ幅で残存部ほぼ全周していることから部分的に炭素を吸着させた可能性を指摘できる。ただし、その境界は明瞭ではなく、漸位的な色調変化である。仮に、外面上半のみのミガキ・黒色処理を目指した製品ならば、非常に稀な




第18図　土器（SI1102～1105）




第19図　土器（SI1107・1108・SK1106）

例であると考えられる。23はロクロの使用が認められ、内面ミガキ・黒色処理された土師器鉢である。

24～31はSK1107出土の土師器類である。これらは土坑内でまとまって出土した、きわめて一括性の高い土器群であり、厳密な同時期性を有すると考えられる。これらを分類すると、24・25は土師器坏Ⅱ A、26～29・31は土師器坏Ⅱ Cであり、前者が2点、後者が6点と非黒色処理の土師器坏Ⅱ Cが数的優位にある。なお、30は厚さや胎土などから土師器甕Ⅱであるとみられる。25は体部下端に回転ヘラケズリが認められ、体部外面のロクロによる回転ナデが工具によっておこなわれている。この土器を観察すると、体部下半の螺旋構造と体部上半の螺旋構造が連続しないことがわかる。28はSI1102出土の破片と別遺構間で接合関係が認められる。

32～38はSK1109出土の土師器類である。これらも土坑内で比較的まとまって出土した、きわめて一括性の高い土器群である。32・33・35・36・38は土師器坏Ⅱ A、34は土師器坏Ⅱ A゛、37は土師器甕Ⅱである。33は体部外面に焼成後の線刻がみられる。線刻は細い傷のようなもので、タテ方向に3筋みられる。か細く弱いものであるため意図的なものでない可能性もある。34は底部が完全

に剥落しているが、外反傾向にある口縁部形態や底部の剥落範囲等から本来は高台を有していたものと考えられる。35は体部下端に回転を伴わないヘラケズリが施されている。36は外面橙色の色調であるが、その中に幅約2cmの縦方向に還元色を呈するラインが1筋みられる。これは須恵器坏でしばしば認められる火襷である可能性が考えられる。これが仮に火襷ならば、焼成時に重ねて紐状有機質のもので縛って焼成されたということになる。これを問題提起として挙げ、今後類例を注視したい。38は体部外面に焼成後の線刻がみられる。線刻は細い傷のようなもので、それぞれ交差する3筋からなる。先述した33の線刻よりも意図的なものである可能性が高い。

**湿地出土土器**（第21～29図、写真図版20～41）

湿地の遺物包含層より出土した土器のうち、本書に掲載したものは39～243が該当する。大半が平安時代（9～10世紀）の土器である。これらは、およそ5m四方で区画したグリッド毎に取り上げた。なお、本章末の掲載遺物一覧に示した出土地点のうち、グリッド境で設けたトレンチやベルト出土のものは、それぞれ跨るグリッドを示している。

39は5A′・7B′出土の灰釉陶器である。施釉陶器の出土は、旧東和町域では初例である。体部下半から底部片であり、内外面に施釉されている。釉は漬け掛けで、光沢のある淡い緑色を呈し、素地は緻密で、灰白色を呈する。高台は比較的低い断面角形の貼り付け高台であり、体部の立ち上がり角度は比較的緩い傾向が看取される。このような残存する形態的特徴から皿である可能性が高い。漬け掛け施釉の開始がO53窯式である編年観を考えれば、10世紀前半頃の製品が想定されるが、高台の形態的な特徴はそれより古いK90窯式に近い印象を受ける。産地は猿投か東濃であると考えられるが、胎土の色調からは猿投産に近い印象である。

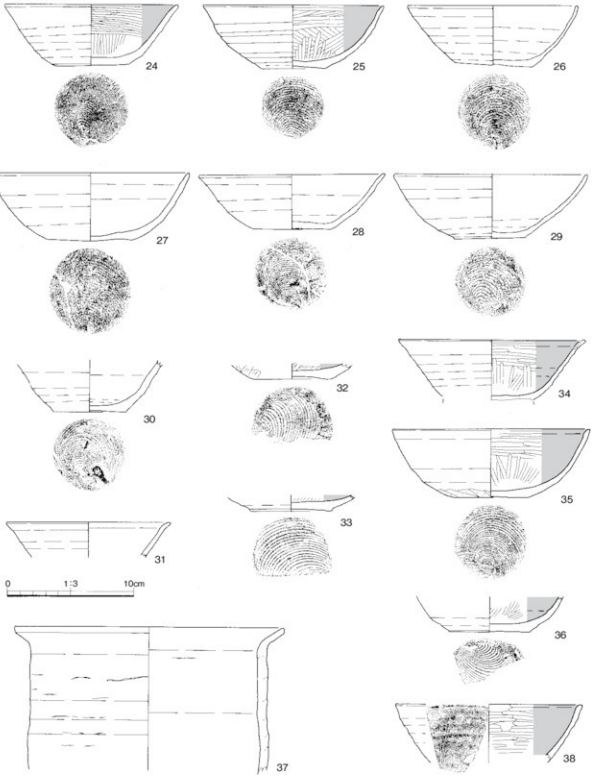
40～52は1A′出土の土師器坏である。40･41･44～46が土師器坏ⅡA、42･43が土師器坏ⅡA′、48･50～52が土師器坏ⅡC、47･49が須恵器ⅡDにそれぞれ分類できる。41は内面にタール状の付着物が、42は内外面に付着が認められる。51は底部のみの破片であるが、皿形を呈する。52も底部のみの破片である。非常に緩慢な回転速度の回転糸切りであり、なおかつ粗雑な作りである。

53･54は1B′出土の土師器坏である。53は土師器坏ⅡA、54は土師器坏ⅡCに分類できる。

55～64は2A′出土の供膳具類である。55～58は土師器坏ⅡA、59･60は土師器坏ⅡA′、61～63は土師器坏ⅡC、64は灰白色だが還元焔で焼成された須恵器坏ⅡDに分類できる。58は内面ミガキ調整が施されているが、黒色ではない。2次的な被熱で酸化消失した可能性も考えられるが、破断面に炭素の吸着による色調変化が見られないため完成当初から内面黒色ではない可能性が高い。通常、ミガキ調整と黒色処理は一体の手法であるが、このような例も存在することも指摘しておく。59は土師器坏ⅡA′としたが、丸く深みのある椀形を呈する。高台は低く、坏底部外周に貼り付けられている。これらの特徴から10世紀半ば以降の所産である可能性が考えられる。62は口径を復元し求めたが、16cmを超え、同様の器種と比べて非常に口径が大きくなる。歪みの大きな土器である可能性が高い。64はやや底径が大きく、回転ヘラ切りの痕跡が認められ、9世紀前半の須恵器坏の特徴を有している。

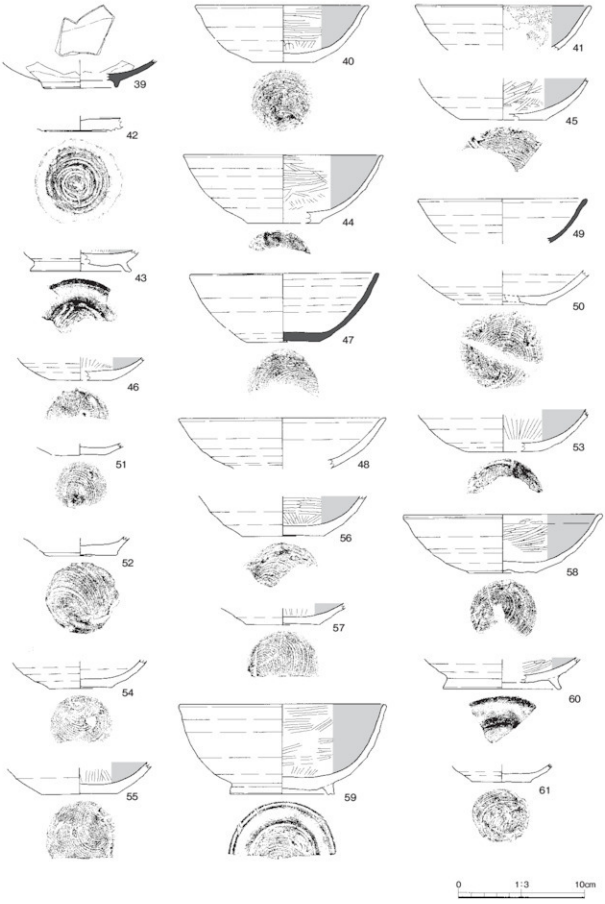
65～68は2B′出土の土師器坏である。65は土師器坏ⅡA､66～68は土師器坏ⅡCに分類できる。65は体部下端にヘラケズリが認められる。67は皿形を呈し、内面1箇所に油煙痕が認められ、灯明皿として用いられた可能性が考えられる。

69～81は4A′出土の供膳具類である。69～71は土師器坏ⅡA、72は内外面黒色処理された土師器坏ⅡB、73～78は土師器坏ⅡC、80･81は須恵器坏ⅡD、79は土師器坏Ⅱであることは疑いないが、内面が剥離欠損しているためⅡAかⅡCのいずれか判断できない。69は土師器坏ⅡAと




第20図　土器（SK1107・1109）

したが、体部の立ち上がり角度が急なこと、器壁に厚みがあることから土師器鉢である可能性も考えられる。77は土師器坏ⅡＣとしたが、皿形を呈するものと推測される。79は底部に墨書が認められるが、大半が欠損しており、字句不明である。




第21図　土器（湿地その１）

82 ～ 85 は 4B' 出土の土師器坏Ⅱ C である。85 は底部がやや厚く、粗雑な作りである。

86 ～ 91 は 5A' 出土の供膳具類である。86 は土師器坏Ⅱ A、87・88 は土師器坏Ⅱ C、89 は土師器坏Ⅱ C'、90・91 は須恵器坏Ⅱ D に分類できる。88 は内外面ともに焼成ムラが顕著である。また、底部の作りも粗雑である。90 は底部に結束痕か線刻のいずれか判断できないが、焼成前の細い筋 1 条が認められる。

92 ～ 99 は 6A' 出土の供膳具類である。92 ～ 96 は土師器坏Ⅱ A、97・98 は土師器坏Ⅱ C、99 は須恵器坏Ⅱ D である。95 は内面ミガキ調整とともに黒色処理が施されていたものと考えられるが、被熱により酸化して消失したものと考えられる。98 は底部切り離し後に不定方向のヘラケズリが施されており、そのため底面は平坦ではない。

100 ～ 102 は 6B' 出土の土師器坏類である。100 は内外面ミガキ・黒色処理され、高台を有する土師器坏Ⅱ B'、101・102 は土師器坏Ⅱ A に分類できる。101 は体部下端にヘラケズリが認められるが、器表面摩滅のためロクロの回転力が作用しているものかどうか判断できない。102 は体部下端から底部にかけてヘラケズリが施されている。

103 ～ 112 は 7A' 出土の土師器坏類である。103 ～ 105 は土師器坏Ⅱ A、106 ～ 112 は土師器坏Ⅱ C に分類できる。103 は内面にミガキ調整が微かにみられるため黒色処理の炭素が被熱等によって酸化消失した可能性が考えられる。104 は内面ミガキ調整とともに黒色処理が施されていたものと考えられるが、被熱により酸化して消失したものと考えられる。106 は皿形を呈し、外面のロクロによる調整に工具が用いられる回転ヘラナデがみられる。108 は底のみの破片であるが、厚みがあり非常に粗雑な作りである。111 は土師器坏Ⅱ C としたが、Ⅱ A の可能性も考えられる。

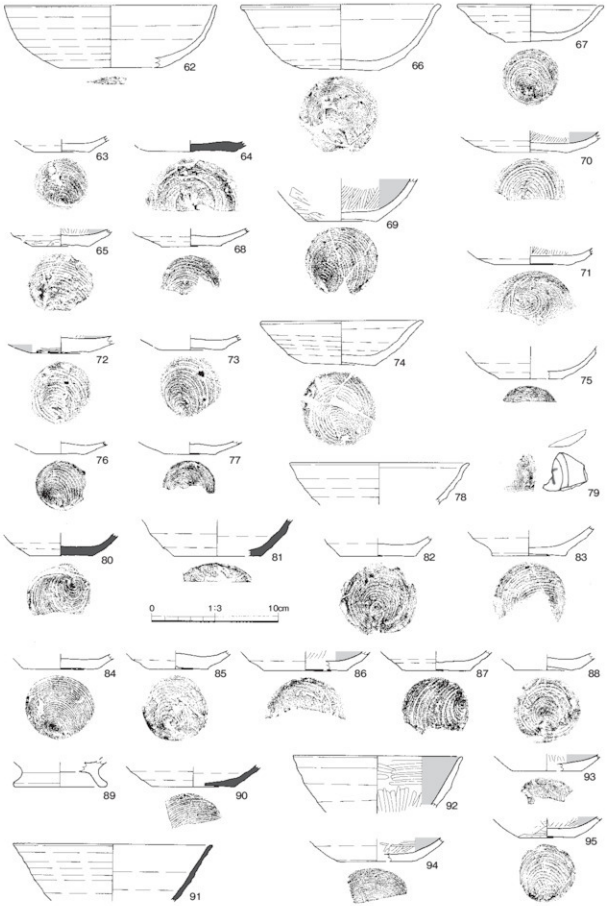
113・114 は 7B' 出土の供膳具類である。113 は土師器坏Ⅱ C、114 は須恵器坏Ⅱ D である。114 は外面に墨書が認められるが、大半が欠損しているため字句不明である。

115 ～ 117 は 8A' 出土の供膳具類である。115 は土師器坏Ⅱ A、116 は土師器坏Ⅱ C、117 は須恵器坏Ⅱ D に分類できる。

118・119 は 8B' 出土の土師器坏類である。118 は土師器坏Ⅱ A、119 は内外面黒色処理された土師器坏Ⅱ B に分類できる。119 は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリがみられるが、体部下端のものは、回転ヘラケズリ後のミガキ調整によって不明瞭になっている。

120 は 8C' 出土の土師器坏Ⅱ A である。体部下位の 1 箇所に穿孔を伴う意図的な損壊痕跡が認められる。土器の損壊儀礼のような祭祀的な意味合いを示唆している可能性が高い。

121 ～ 137 は 9A' 出土の供膳具類である。121 ～ 127 は土師器坏Ⅱ A、128 は土師器坏Ⅰ A、129 は土師器坏Ⅱ A' あるいはⅡ C'、130 は土師器坏Ⅱ C、131 は土師器高坏Ⅰ、132 ～ 137 は須恵器坏Ⅱ B に分類できる。121 は内面に塊状の漆が最大 1.5cm の厚さで固着している。漆は表面に凹凸があり、漆黒を呈するが、破断面は黄金色を呈する。この土器は漆用のパレットとして利用された可能性が考えられる。128 は全体的に器壁が厚く、輪積み痕も認められる。このことから、ロクロが用いられない土師器坏Ⅰ A である可能性が考えられ、前代の伝統を受け継ぐ 9 世紀前半頃の所産である可能性がある。131 は土師器高坏である。非ロクロのもので、外面および脚部底面に不定方向のヘラケズリが認められる。やはり前代の伝統を受け継ぐ 9 世紀前半頃の所産であると考えられる。132 は深みのある器形の須恵器坏である。133 は底部回転ヘラ切りで、内面には星状の降灰が顕著である。体部外面には墨書が認められる。一見すると天地逆向きの「大」の字に見えるが、2 画目の払いが 1 画目を貫いていない点に難がある。可能性として、過年度調査で出土した土器にみられた「万」の字も候補になるかもしれない。134・135 は接点こそ認められないが、胎土・色調・焼成・器形・寸法等に共




第22図　土器（湿地その２）

通性がみられることから同一個体であると考えられる。136は体部に意図的に打ち欠いたような損壊痕跡が認められる。土器の損壊儀礼のような祭祀的な意味合いを示唆している可能性が高い。137は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。

138は9B′出土の土師器坏ⅡCである。小形の坏であり、体部外面には工具が用いられた回転ヘラナデが施されている。

139～142は10A′出土の供膳具類である。139は土師器坏ⅡC、140～142は須恵器坏ⅡDに分類できる。141は内外面に火襷が放射状にみられ、外面の火襷に重なって下端部に結束痕が認められる。結束痕は稲藁のような繊維が顕著にみられ、須恵器坏類の窯入れの様子が復元できる好例である。

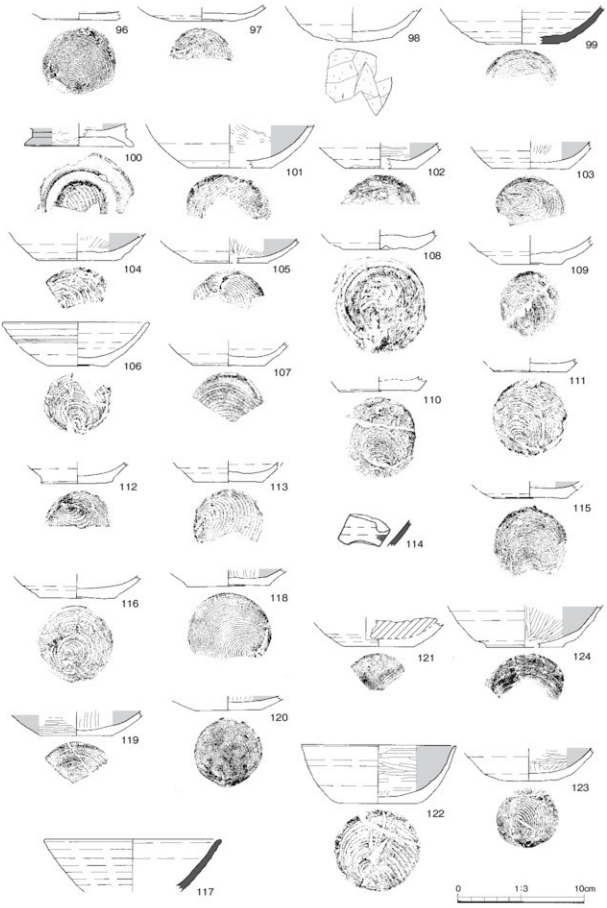
143～153は10B′出土の供膳具類である。143・144は土師器坏ⅡA、145・146は土師器坏ⅡC、147～152は須恵器坏ⅡD、153は高台を有する須恵器坏ⅡD′に分類できる。144は内面にみられるミガキ調整が他の土師器坏ⅡAにみられない特徴的なものである。これはヨコ方向のミガキを切るようにタテ方向、すなわち放射状のミガキが一定間隔で施されている。また、体部は丸みを有する器形である。145は底部のみの破片であるが、底径と厚みのバランスから小形坏か皿形の器形であると推測される。148は須恵器坏であるが、小形坏の形態である。148は内面に微かな火襷が認められる。149は内外面に火襷が認められる。152は底径と器高と底部の回転ヘラ切り技法から9世紀初頭の所産である可能性が高い。この須恵器坏は灰白色を呈する。

154～157は10-11A′トレンチ出土の土師器坏である。154～156は土師器坏ⅡAに分類できるが、157は土師器坏ⅠAの可能性が考えられる。154は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。155は体部下端のみヘラケズリが施されている。157は内面にミガキが認められるが、黒色処理が認められない。外面は底部も含めすべてナデ調整が施されていると考えられる。内面の黒色処理は2次被熱により酸化消失した可能性が高い。形態的特徴や製作技法を勘案すると、8世紀後半～9世紀前半の所産である可能性が考えられる。

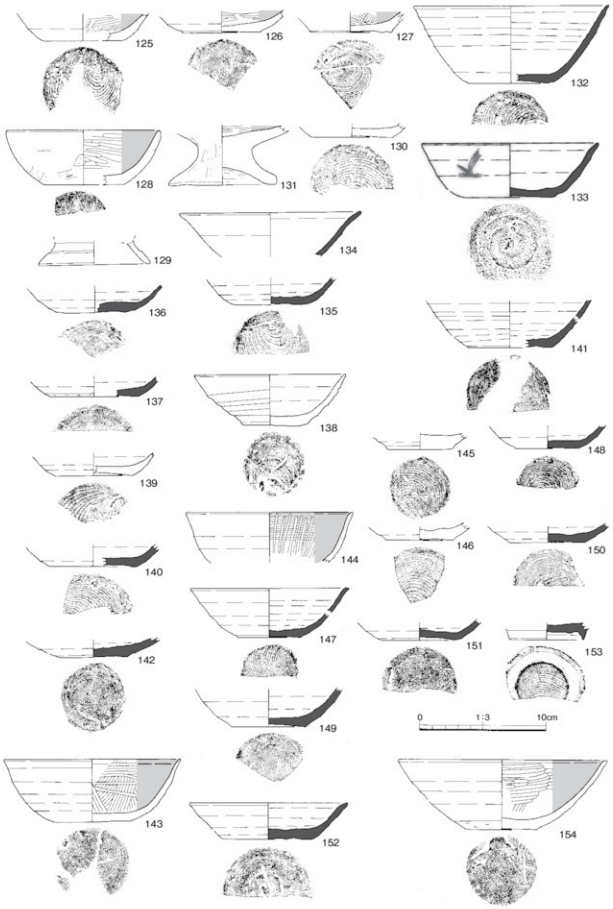
158～161は11B′出土の供膳具類である。158は土師器坏ⅡA、159・160は土師器坏ⅡC、161は須恵器坏ⅡDに分類できる。158は体部下端から底部に回転ヘラケズリが施されている。体部下端のヘラケズリは、残存部分で3段に及んでいる。

162～173は湿地西半の遺物包含層上面で出土した供膳具類である。162～165は土師器坏ⅡA、166・167は高台を有する土師器坏ⅡA′、168～172は土師器坏ⅡC、173は須恵器坏ⅡDに分類できる。164は底部と体部下端に2段からなる回転ヘラケズリがみられる。166は坏底部に焼成前になされた3筋の線刻が認められる。166と167はいずれも坏底部に高台が貼り付けられているが、いずれも低く坏底部の外周に巡らされている点で共通する。168は皿形を指向する形態である。口縁部で片口状に削ぎ取られた部分が確認でき、口縁部の歪みが大きい。169は底部に火襷が認められる。

174～189は湿地各所および湿地確認トレンチより出土した供膳具類である。174～177は土師器坏ⅡA、178は土師器坏ⅡB′、179は土師器坏ⅡA′、180～187は土師器坏ⅡC、188・189は須恵器坏ⅡDに分類できる。174は底部に筋状の結束痕が認められる。これは意図的に施された線刻と異なり、底部から体部下端に連続する。未乾燥の状態で細い紐で結束された可能性が考えられる。175は底部に不定方向のヘラケズリが施されている。このヘラケズリは糸切り時の外周にまで及んでおり、そのため円形であった底部の形状が多角形に変わっている。177は回転糸切り時のミスによって底部形状に不自然な段差が生じている。180は全体的に厚い器壁を有し、非常に重量感がある。各端部に丸みがあり、すべてにおいて異質な特徴を持つ。10世紀中葉以降の新しい特徴であるとみられる。181は小形坏あるいは皿形の形態である。口縁端部が著しく外反する。182は内面の器面調整が丁寧で、




第23図　土器（湿地その３）




第24図　土器（湿地その４）

ロクロ目が不明瞭で滑らかである。183は底部のみの破片であるが、やや粗雑な作りである。184は底径が小さく、小形坏あるいは皿形の形態である。外面の調整は回転ヘラナデがみられる。189は底部回転ヘラ切り後無調整であり、特徴から9世紀前半の資料である可能性が高い。

190・191は1A′出土の供膳具以外の土器である。190は須恵器広口壺あるいは甕であると考えられる。口縁部内面および肩部外面には濃緑色自然釉が厚く掛かる。口縁端部と垂下する端部はシャープな作りである。191は土師器鉢であると考えられる。底部の一部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されている。

192は2A′出土の土師器甕Ⅱである。内面には部分的に漆のような付着物が確認できる。

193～200は4A′を中心に出土した供膳具以外の土器である。193は土師器小壺である。口縁部の形態は不明であるが、底部は平滑である。破断面には粘土紐の積み上げ痕跡がみられ、器面調整等にロクロは用いられていない。調整は内外面ともにナデが施されている。194は土師器甕Ⅱである。厚手の器壁に、丸みを持つ。196は内面にコゲが付着した土師器甕Ⅱである。198は大形の須恵器甕口縁部片である。内面には降灰が顕著に認められる。図上で口径を復元したが、器壁の厚さを考慮すると、さらに口径が大きくなる可能性も考えられる。199は須恵器長頸壺の口縁部片である。色調は酸化焔焼成を示しているが非常に硬質である。200は須恵器甕の口縁部片であると考えられる。

201～205は6A′を中心に出土した供膳具以外の土器である。201・205は土師器甕Ⅱ、202は須恵器小壺、203は須恵器甕、204は土師器鉢に分類できる。202は体部下半から底部にかけての内面調整が工具の先端を押しつけて施してある。これは内面下部に指が届かず苦慮した結果の痕跡であると考えられる。すなわち、この壺の器形はある程度の高さ（深さ）があり、口径が非常に小さい形態のものであると推測される。203は比較的大形の口縁部片である。204は内面にヨコ方向のミガキ調整がみられ、黒色処理がなされている。205の底部外周はヘラケズリが施されており、それ以外の中央部には砂粒が付着する。

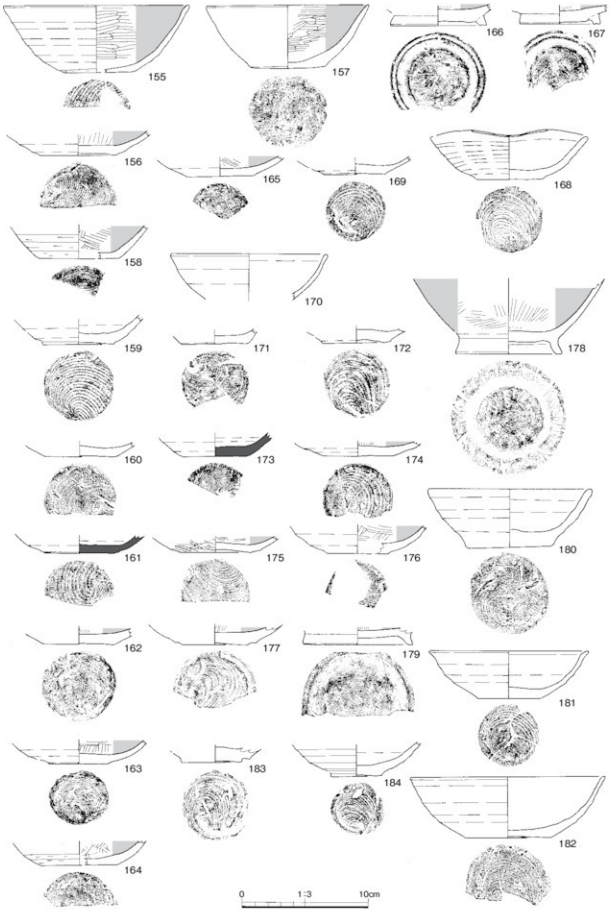
206～208は7A′を中心に出土した供膳具以外の土器である。206は土師器甕Ⅰの底部片、207は須恵器長頸壺下半部片、208は土師器甕Ⅱ底部片である。207は体部外面にカキメがみられ、その下地にはヘラケズリがみえている。また、体部外面には1条の細い線刻が縦方向に入る。高台を有する底部には中央部に砂粒が付着している。

209は7B′で出土した須恵器広口壺口縁部片である。内面には星状の降灰が認められる。

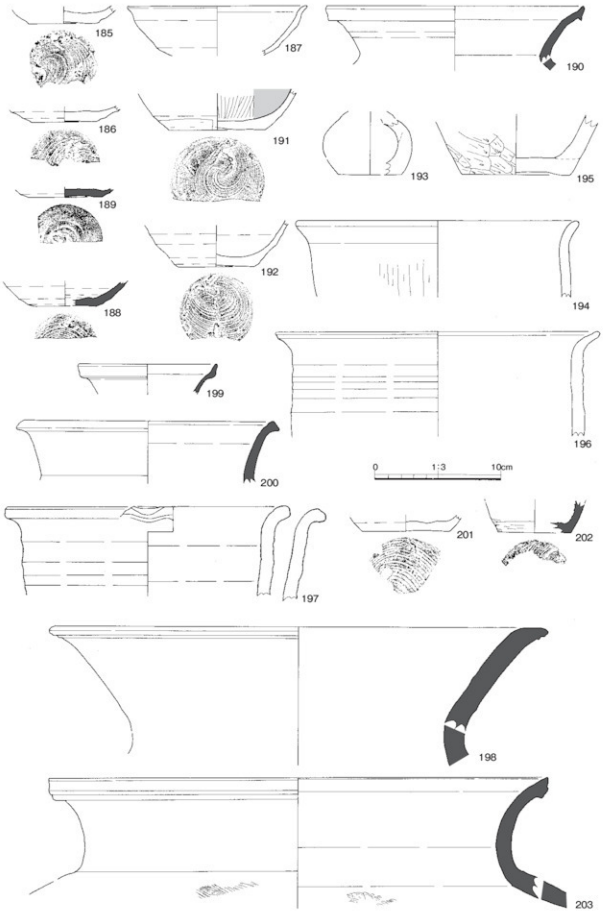
210は8B′で出土した土師器鉢の体部小片である。外面に墨書がみられる。墨書は漢字であると考えられるが、字句不明である。少なくとも上下2文字が連続して書かれているものと考えられ、上が「氏・成・我」など多数の候補が想定され、下は「食」などが候補として挙げられる。

211～222は9A′を中心に出土した供膳具以外の土器である。211～214は土師器甕Ⅱ、215は土師器甕Ⅰ、216は土師器鉢、217は土師器小壺、218～222は須恵器壺類である。212は非常に厚い器壁で、やや還元焼成気味である。213は体部下端から底部にかけてヘラケズリが施されている。214は底部丸底傾向で砂粒が付着する。外面にタタキ、内面には青海波のアテ具痕跡がみられる。215は土師器甕Ⅰ、217は土師器小壺である。217は内外面ともにミガキ調整と黒色処理がなされている。218・222は長頸壺、219・220は直口壺、221は広口壺にそれぞれ形態分類できる。221は肩部外面にタタキ後のカキメが施されている。頸部外面には微かに絞り目が確認できる。

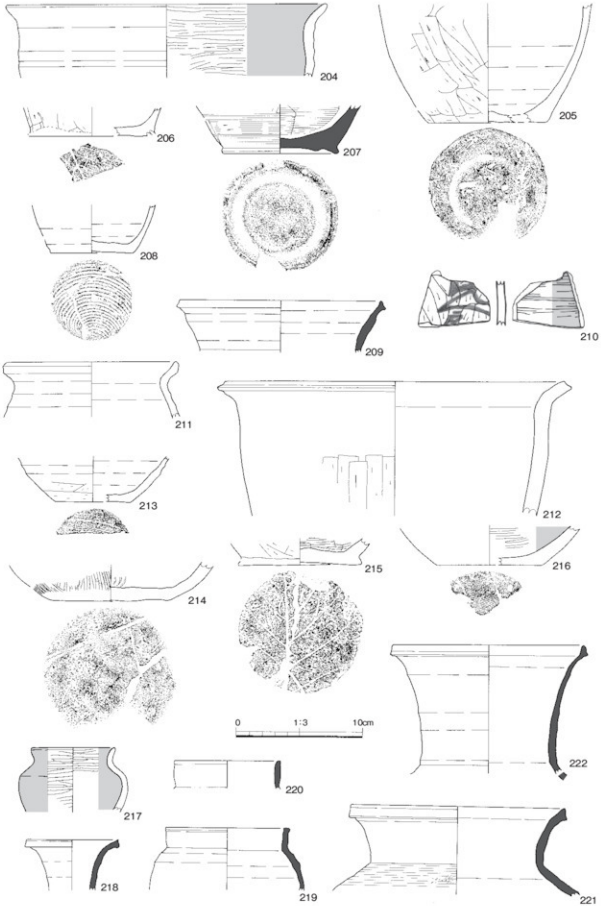
223は8A′・9A′・9B′・10A′・10B′などで出土した須恵器壺である。図上では復元したものを示したが、上半（a）と下半（b）に分かれ接点がみられない。ただし、特徴が共通しているため、両者は確実に1個体のものである。全体的に赤みを帯びるが硬質に焼成されている。底部には砂粒が多




第25図　土器（湿地その５）




第26図　土器（湿地その６）




第27図　土器（湿地その７）

く付着しているが、接地面から浮いている中央部は砂粒が少ない。

224は9B'・10B'出土の土師器甕Ⅱである。小形のもので底部回転糸切りである。

225～228は10A'を中心に出土した供膳具以外の土器である。225は土師器甕Ⅱ、226・227は土師器甕Ⅰ、228は須恵器甕に分類できる。225は内外面に薄く泥奨が塗布されている。焼成前の所作であると考えられる。228は頸部に4条1単位の波状文が2段みられる。

229～238は10B'を中心に出土した供膳具以外の土器である。229は須恵器長頸壷、230は土師器鉢、231は土師器の突起部分、232～234は土師器甕Ⅰ、235～237は土師器甕Ⅱ、238は土師器小壷である。229は底部回転糸切り後に高台が貼り付けられている。内底面には降灰が微かにみられる。230は体部下端から底部にかけてヘラケズリがみられるが、底部は痕跡不明瞭である。内面はミガキ・黒色処理が施されている。土師器坏ⅡAの可能性も考えられるが、底径や厚みを考慮すると土師器鉢とするのが妥当である。231は断面台形に整形されており、貫通しない穿孔がなされている。胎土および焼成は土師質であり、貼り付けていた面から剥がれた痕跡が確認できるため土器側面等に取り付くものであると考えられる。おそらく土器体部外面に孔を上向きにして貼り付けられていたものと考えられる。この突起のみで全体形状を推し量ることは困難だが、福島県相馬市山岸硝庫跡第9号土坑より出土した土器に類似している点を指摘しておく。この山岸硝庫跡出土資料は、成形は土師器だが須恵質に焼成されており、甕の器形に4つの耳が付いている。これら4つの耳に対応するかのように口縁部に穿孔がされているようである。また、この土器は8世紀代の専用蔵骨器と考えられている（菅原2010）。岩手県内では同様の出土事例が無いため、今後出土した際に検討が必要となる資料である。236は口縁部小片であるが、頸部に鋸歯文が施されている。鋸歯文は棒状工具によって焼成前に施されており、工具は静止されず一息に動かされているようであるが、ロクロ等の回転力は用いられていないようである。238は底部に回転糸切りがみられ、小形だがロクロが用いられているようである。

239は湿地中央より出土した土師器甕Ⅱである。器壁が厚く、粗雑な作りである。

240・241は湿地確認トレンチより出土した須恵器壷である。240は底部に砂粒の付着が認められるが、不定方向のヘラケズリも施されている。

**遺構外出土土器**（第29図、写真図版42）

遺構内・遺物包含層以外の攪乱等より出土した土器のうち、本書に掲載したものは244～246が該当する。これらはいずれも土師器坏ⅡAである。いずれも器表面あるいは破断面の摩滅が著しい。

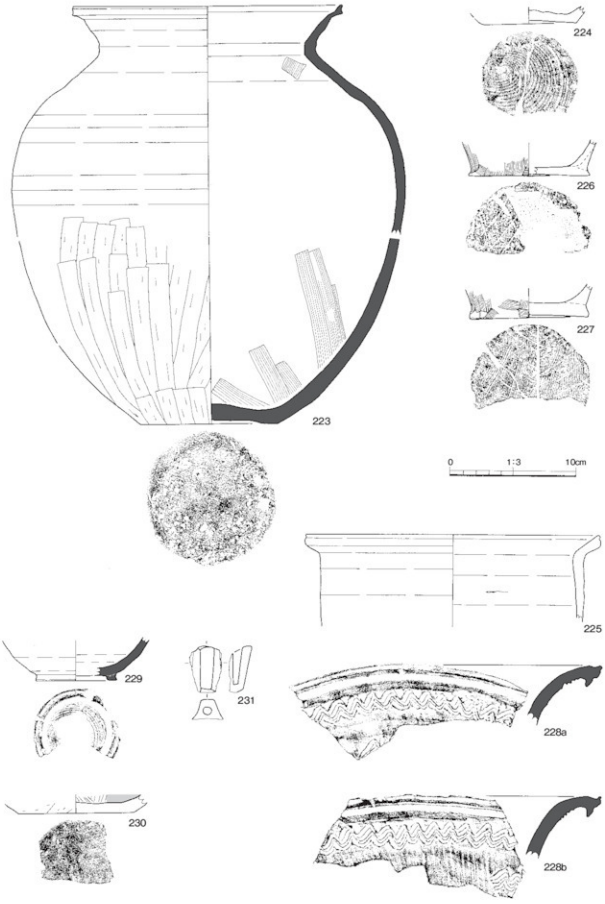
### （2）陶磁器・漆器

**陶磁器**（第29図、写真図版42）

245～247は中世の陶磁器類である。中嶋遺跡の北東500mに位置する安俵城跡が中世の居館として知られている（瀬川1999）。この245～247は安俵城跡と重なる時期の遺物であり、両者は何らかの関係がある可能性を示唆している。

245は中国産白磁碗の破片である。やや緑がかった乳白色を呈し、素地内面には圏線と植物の文様が彫り込まれている。器形は丸みを持ち、器壁は非常に厚く特徴的である。これらの特徴から、いわゆるピロースク型と呼ばれる白磁碗Cである。中国南部の窯が想定されるが、詳細な産地は明らかになっていない。帰属時期は14～15世紀前半と想定されている（山本1995）。

246は中国産青磁碗の小破片である。龍泉窯産の可能性が高いが、非常に小破片のため属性を抽出できる材料に乏しい。素地や釉の質感等から連弁文が施される時期のものかと推測される。この破片では連弁の外形線や鎬の稜が認められない。14世紀代を中心とする時期が想定される。




第28図　土器（湿地その８）

247は瀬戸・美濃産の天目茶椀であると考えられる。釉は厚く暗褐色である。素地は赤褐色を呈する。15世紀の大窯期の可能性が考えられる。

248は漆器椀である。古代以降のものであると考えられるが、詳細な時期は不明である。底部には判読できないが、文字のようなものが認められる。

### （3）その他の遺物

**石器・石製品**（第30・31図、写真図版42・43）

251～253は砥石である。いずれも表面に擦痕が認められる。251の石材がデイサイトである以外、すべて頁岩である。253以外はいずれも包含層出土であることから古代に属するものとみられる。249は欠損する1面を除き、すべてに擦痕が認められる。250は252と同一個体である可能性が高い。251は板状を呈する形態である。252は広い平坦面を有する板状のものである。表面は非常に滑らかで光沢がある。253は欠損する1面を除き、すべてに擦痕が認められる。また、直径0.5cmの円錐状のもみきり痕が1箇所みられる。

254～256は石鏃である。いずれも縄文時代のものであると考えられる。色調は異なるが、石材はすべて珪質頁岩である。

257は石錘であると考えられる。中央に括れが認められ、ほぼ全周しているが、研磨された様子はみられない。

258・259は碁石と推測される石である。いずれも石材はチャートで、258は艶のある黒色、259はやや濁りのある白色である。比較的扁平で丸い形状である。包含層中に含まれる自然石の中にほとんどみられない石材であることから遺物であると考えた。

269は縄文時代の石棒あるいは石剣の破片であると考えられるが断定できない。表面は全体的に研磨されている。石材は頁岩である。

261は多孔質の軽石である。時代および用途についても不明であるが、他所から持ち込まれたものであると考えられる。

262・263は磨石であると考えられる。磨面の使用による擦痕が認められるが、時代および詳細な用途についても不明であるが、粗砥石の可能性も視野に入れる必要がある。いずれも石材はデイサイトである。

**金属製品**（第31図、写真図版43）

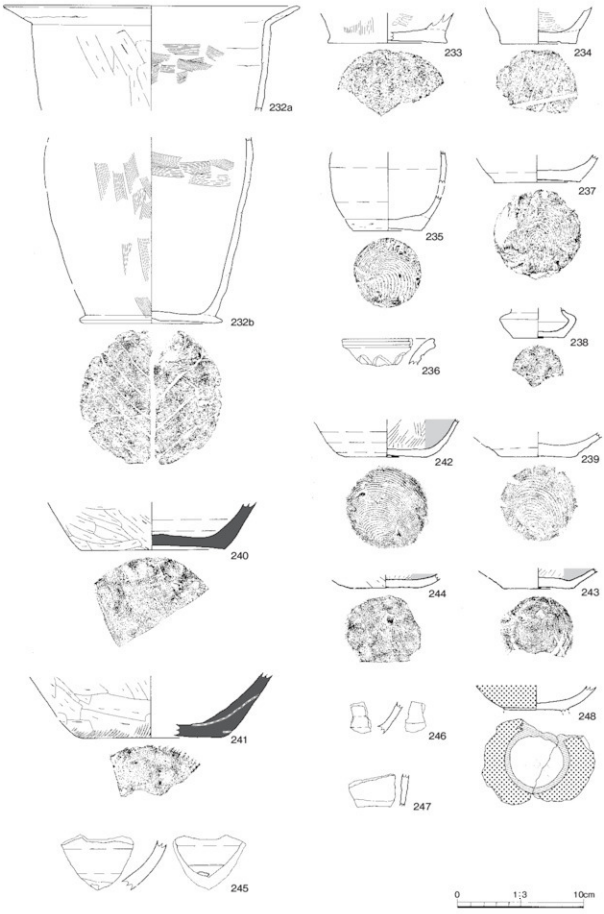
264・265は中世の銅銭である。264はSI1102埋土上層より出土した永楽通寶（明代1408年初鋳）である。この遺構は古代のものであることが確実であるため、この銅銭は何らかの理由で混入したものであると考えられる。265は湿地より出土した至和元寶（宋代1054年初鋳）である。

266は細長く断面が方形であることから鉄釘であると考えられる。赤色の漆塗膜がわずかに認められる。時期は不明であるが、少なくとも古代か中世のものであると考えられる。漆を施した木製品などに使用されていたものの可能性が考えられるが、詳細は不明である。

**土製品**（第31図、写真図版42）

267は湿地2A'より出土した土玉である。中程がやや膨らむ球形の形態に焼成前の穿孔がなされている。孔は直径2.1mmの正円で非常に小さく、直線的に貫通している。胎土は非常に精良で焼成も良好である。

268は湿地5A'より出土した土錘である。中程で膨らみを有する管状であるが、厳密な左右対称形ではない。穿孔は焼成前におこなわれており、孔の直径は約5mmでほぼ正円形である。胎土は精




第29図　土器（湿地その９遺構外）・陶磁器・漆器

良であるが、焼成にはややムラがみられる。

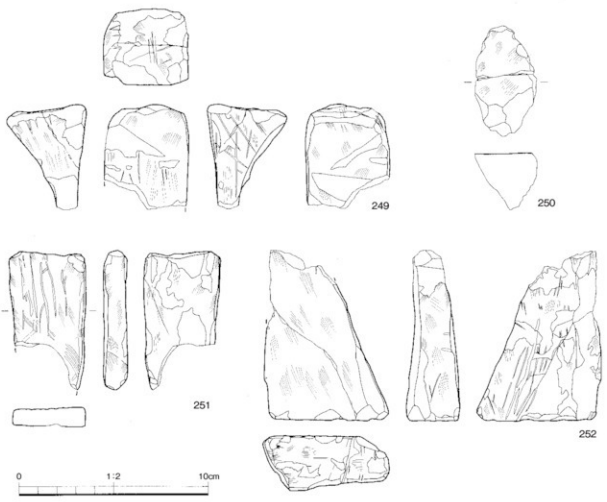
**木製品**（第 31 図、写真図版 43）

269 ～ 272 は不明木製品である。269 は板状の木製品である。片面には板目と直交方向に細い刻みがみられることから曲物の一部であると考えられる。270 は板状の部材である。外側面は丁寧に削られているが、内側面は比較的粗雑である。材の両端部には組み合わせのための「　形の刻みがある。この刻みは直角ではなく微かに「ハ」の字形に広がる。さらに、この両端部には木口側と板目側にそれぞれ 1 箇所ずつ小穿孔がなされており、これに木製釘あるいは現代でいうところのダボと考えられるものが刺さったままわずかに残存している。同様の部材を組み合わせて井桁状にされていたと推測されるが、その他の側面に穿孔がみられないため箱状になっていたかどうかは不明である。271 は板状木製品であるが、性格不明である。272 はきわめて小さい木製品片である。表面には漆が塗られ、赤く艶やかであるが、どのような製品の破片か不明である。

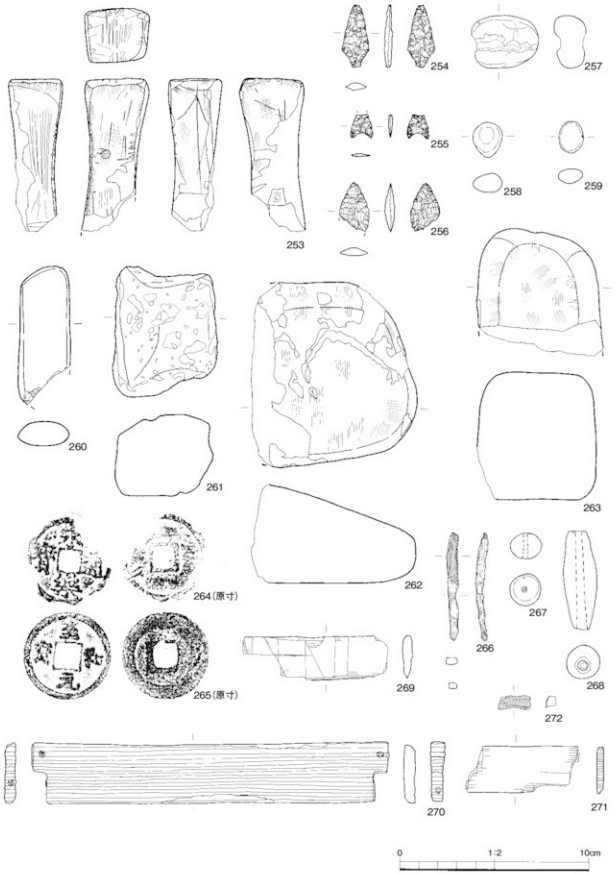
（福島）

**参考文献**

横山浩一　1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第 23 号
菅原祥夫　2010「居宅と火葬墓」『福島県文化財センター白河館　研究紀要 2009』（財）福島県文化振興事業団
瀬川司男　1999「Ⅳ　まとめ」『町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』東和町文化財調査報告書第 21 集　東和町教育委員会
山本信夫　1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編




第30図　その他の遺物（石製品）




第31図　その他の遺物（石製品・石器・金属製品・土製品・木製品）

## 表２　掲載遺物一覧（器類）

1 ～ 40

| No. | 器種 | 出土状況 |  |  | 胎土 | 焼成 | 色調 | 寸法（cm） |  |  |  | 主な調整 |  | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|  |  | 遺構 | 位置 | 層位 |  |  |  | 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | 内面 | 外面 |  |
| 1 | 土師器坏Ⅱ A | SI1102 | p4 | 埋土 | ○ | △ | にぶい黄橙 | 15.2 | 5.6 | 4.6 | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ |  |
| 2 | 土師器坏Ⅱ A | SI1102 | p3 | 埋土 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 15.4 | 6.6 | 4.9 | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 部分的に意図的破砕痕あり |
| 3 | 土師器坏Ⅱ A | SI1102 | p1 | 埋土 | ◎ | △ | にぶい黄橙 | (15.0) | (6.4) | 5.3 | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端から底部回転ヘラケズリ |
| 4 | 土師器坏Ⅱ A | SI1102 | p2 | 埋土 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | (14.6) | (6.6) | 5.6 | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端ヘラケズリ |
| 5 | 土師器坏Ⅱ C | SI1102 |  | 埋土 | ○ | ○ | 橙 | (15.6) | - | [3.1] | [0.4] | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 6 | 土師器坏Ⅱ C | SI1102 |  | 埋土 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | - | - | [0.4] | 回転ナデ | 回転ナデ | 外面に焼成後の線刻あり |
| 7 | 土師器坏Ⅱ A | SI1102 | p2 | 埋土 | ○ | × | 浅黄橙 | (15.3) | 6.6 | 4.8 | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端ヘラケズリ |
| 8 | 土師器坏Ⅱ A | SI1102 |  | 埋土 | ○ | × | 浅黄橙 | - | 6.4 | [3.8] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ |  |
| 9 | 土師器坏Ⅱ A | SI1102 |  | 埋土 | ○ | △ | にぶい橙 | - | (6.1) | [6.4] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端回転ヘラケズリ |
| 10 | 土師器坏Ⅱ C | SI1102 | p10・11 | 埋土 | ○ | △ | にぶい橙 | (15.8) | (6.6) | [6.4] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 11 | 土師器坏Ⅱ A' | SI1103 |  | 埋土 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (8.2) | [3.0] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ |  |
| 12 | 土師器坏Ⅱ A | SI1104 | K3 | 埋土 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | (13.4) | - | [3.8] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ |  |
| 13 | 土師器甕Ⅰ | SI1104 | K1 | 埋土 | △ | ○ | 橙 | - | - | [22.2] | [0.9] | ヘラケズリ・ハケ | ハケ |  |
| 14 | 土師器甕Ⅱ | SI1105 | 煙道 | 埋土 | △ | ○ | 灰褐 | (21.0) | - | [14.1] | [0.8] | 回転ナデ | ヘラケズリ |  |
| 15 | 土師器甕Ⅱ | SI1105 |  | 床面 | ○ | △ | にぶい褐 | (18.8) | - | [6.6] | [0.7] | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 16 | 土師器坏Ⅱ A | SI1107 |  | 埋土 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (5.0) | [1.1] | 0.4 | ミガキ | 回転ナデ |  |
| 17 | 土師器甕Ⅱ | SI1108 | ベルト | 埋土 | △ | △ | 褐灰 | (11.7) | - | [3.6] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 18 | 土師器甕Ⅱ | SI1108 | K1 | 埋土 | △ | △ | 褐灰 | - | (7.8) | [1.2] | [0.8] | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 19 | 土師器鉢Ⅱ | SI1108 | K1 | 埋土 | ○ | △ | にぶい橙 | (22.0) | - | [10.1] | [0.7] | ミガキ | ヘラケズリ |  |
| 20 | 土師器甕Ⅱ | SI1108 | K1 | 埋土 | △ | ○ | 橙 | (23.2) | - | [18.6] | [0.8] | 回転ナデ | ヘラケズリ |  |
| 21 | 土師器坏Ⅱ A' | SK1106 | p1 | 埋土 | ○ | × | にぶい褐 | (15.9) | (8.0) | 6.9 | 0.9 | ミガキ | 回転ナデ | 内面黒色処理だが酸化消失 |
| 22 | 土師器坏Ⅱ（B） | SK1106 |  | 埋土 | ○ | △ | にぶい黄橙 | (15.8) | 5.8 | 5.7 | 0.8 | ミガキ | ミガキ | 体部下端回転ヘラケズリ、外面上半黒色 |
| 23 | 土師器鉢Ⅱ | SK1106 | p1 | 埋土 | △ | △ | 灰褐 | (30.0) | - | [17.0] | [0.7] | ミガキ | 回転ナデ・ヘラケズリ |  |
| 24 | 土師器坏Ⅱ A | SK1107 | p7 | 埋土下層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 13.7 | 5.9 | 4.9 | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | 完形 |
| 25 | 土師器坏Ⅱ A | SK1107 | p3 | 埋土下層 | ○ | ○ | 浅黄橙 | 14.3 | 5.0 | 5.0 | 0.5 | ミガキ | 回転ヘラナデ | ほぼ完形、体部下端回転ヘラケズリ |
| 26 | 土師器坏Ⅱ C | SK1107 | p4 | 埋土下層 | △ | △ | にぶい黄橙 | 13.5 | 6.1 | 4.9 | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 完形 |
| 27 | 土師器坏Ⅱ C | SK1107 | p6 | 埋土下層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | 15.6 | 6.7 | 5.4 | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | ほぼ完形 |
| 28 | 土師器坏Ⅱ C | SI1102<br>SK1107 | p1<br>p2 | 埋土<br>埋土下層 | ○ | △ | 浅黄橙 | 14.7 | 6.1 | 4.4 | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | ほぼ完形、別遺構間接合 |
| 29 | 土師器坏Ⅱ C | SK1107 | p5 | 埋土下層 | ○ | △ | 浅黄橙 | 15.3 | 5.7 | 5.2 | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | ほぼ完形 |
| 30 | 土師器甕Ⅱ | SK1107 | p2 | 埋土下層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | 5.8 | [4.1] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 31 | 土師器坏Ⅱ C | SK1107 |  | 埋土 | ○ | △ | 浅黄橙 | (13.0) | - | [2.8] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 32 | 土師器坏Ⅱ A | SK1109 |  | 埋土 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | 6.2 | [1.2] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端部分的にヘラケズリ |
| 33 | 土師器坏Ⅱ A | SK1109 |  | 埋土 | ○ | ○ | 橙 | - | 6.4 | [1.3] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ |  |
| 34 | 土師器坏（Ⅱ A'） | SK1109 |  | 埋土 | ○ | ○ | にぶい黄褐 | 14.8 | - | [4.7] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 底部剥落 |
| 35 | 土師器坏Ⅱ A | SK1109 |  | 埋土 | ○ | ○ | 灰黄 | (15.6) | 5.8 | 5.4 | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端ヘラケズリ |
| 36 | 土師器坏Ⅱ A | SK1109 |  | 埋土 | ○ | ○ | 橙 | - | (6.4) | [2.8] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 火襷らしきものあり |
| 37 | 土師器甕Ⅱ | SK1109 |  | 埋土 | △ | ◎ | 橙 | (21.2) | - | [11.3] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ |  |
| 38 | 土師器坏Ⅱ A | SK1109 |  | 埋土 | ○ | ○ | 灰黄褐 | (14.8) | - | [4.6] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 外面に線刻 |
| 39 | 灰釉陶器皿 | 湿地 | 5A'・B'<br>7B' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白・淡緑色（灰釉） | - | [6.0] | [2.3] | [0.5] | 回転ナデ | 回転ナデ | K90 ～ O53 窯式 |
| 40 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄褐 | (13.8) | 4.9 | 5.0 | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ |  |

表２　掲載遺物一覧（器類）　41 ～ 80

| No. | 器種 | 出土状況 | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 寸法(cm) | | | | 主な調整 | | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 遺構 | 位置 | 層位 | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | 内面 | 外面 | |
| 41 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄褐 | (14.0) | - | [3.6] | [0.4] | ミガキ | 回転ナデ | 漆付着 |
| 42 | 土師器坏Ⅱ A' | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | - | - | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | 内外面タール付着 |
| 43 | 土師器坏Ⅱ A' | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | (8.0) | [1.7] | [0.6] | ミガキ | 回転ナデ | |
| 44 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 1A' | 包含層 | ◎ | ○ | にぶい褐 | (15.8) | (5.6) | [5.4] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 45 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | (6.8) | [3.4] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 46 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰黄褐 | - | (4.8) | [1.9] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 47 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 1A'2A' | 包含層 | △ | ○ | 褐灰 | (15.0) | (5.6) | [5.4] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 48 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | (16.4) | - | [4.0] | [0.7] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 49 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰黄褐 | (13.4) | - | [3.5] | [0.4] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 50 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | (6.9) | [2.8] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 51 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | 4.0 | [0.9] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 皿形 |
| 52 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 1A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | 5.7 | [1.4] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 53 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 1B' | 包含層 | ◎ | △ | にぶい褐色 | (13.4) | (6.0) | [3.0] | [0.7] | ミガキ | 回転ナデ | |
| 54 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 1B' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄褐 | (10.6) | (5.0) | [2.1] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 55 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 2A' | 包含層 | ○ | × | 灰黄褐 | - | (5.8) | [2.1] | 0.8 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 56 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 2A' | 包含層 | ◎ | △ | 灰黄褐 | - | (6.4) | [3.2] | 0.8 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 57 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 2A' | 包含層 | ◎ | ○ | にぶい橙 | - | (5.8) | [1.3] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 58 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 2A' | 包含層 | △ | △ | にぶい黄橙 | (15.1) | 5.4 | 4.6 | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 59 | 土師器坏Ⅱ A' | 湿地 | 2A' | 包含層 | ◎ | △ | にぶい橙 | (16.2) | (8.2) | 7.1 | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | 椀形 |
| 60 | 土師器坏Ⅱ A' | 湿地 | 2A' | 包含層 | ○ | △ | 灰褐 | - | (9.4) | [2.3] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 61 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 2A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 4.6 | [1.4] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 皿形？、コゲ付着 |
| 62 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 2A' | 包含層 | ○ | ◎ | 橙 | (16.7) | (8.0) | 5.0 | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 63 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 2A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (4.2) | [1.0] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 64 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 2A' | 包含層 | △ | △ | 灰白 | - | (6.6) | [0.8] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部回転ヘラ切り |
| 65 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 2B' | 包含層 | ○ | × | にぶい黄橙 | - | 4.8 | [1.3] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端部分的にヘラケズリ |
| 66 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 2B' | 包含層 | △ | ○ | にぶい黄橙 | 15.8 | 6.2 | 5.2 | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 67 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 2B' | 包含層 | △ | ○ | にぶい黄橙 | 11.6 | 4.4 | 3.0 | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | 皿形・油煙痕あり |
| 68 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 2B' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (4.8) | [1.5] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 69 | 土師器坏Ⅱ A ？ | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 5.6 | [3.4] | 0.8 | ミガキ | 回転ナデ | 鉢の可能性あり、体部にヘラケズリ |
| 70 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (5.8) | [1.7] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 71 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | 5.8 | [1.4] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 72 | 土師器坏Ⅱ B | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | △ | 黒 | - | 4.8 | [1.2] | 0.9 | ミガキ | ミガキ | |
| 73 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4A' | 包含層 | △ | △ | 灰黄褐 | - | 5.6 | [1.2] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 74 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4A'4B'5A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | 12.8 | 5.5 | 3.6 | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | 外面にタール付着 |
| 75 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4A'4B'5A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | (5.0) | [2.6] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 76 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 4.0 | [1.0] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 皿形？ |
| 77 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | × | にぶい黄橙 | - | (4.0) | [1.0] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 皿形？ |
| 78 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | (14.2) | - | [3.3] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 79 | 土師器坏Ⅱ | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | - | [1.3] | - | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部に墨書 |
| 80 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 4A' | 包含層 | △ | × | にぶい黄橙 | - | 5.1 | [1.8] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |

表２　掲載遺物一覧（器類）　　81 ～ 120

| No. | 器種 | 出土状況 遺構 | 位置 | 層位 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 寸法(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | 主な調整 内面 | 外面 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 81 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 4A' | 包含層 | △ | △ | 灰白 | - | (6.8) | [2.9] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部回転ヘラ切り？ |
| 82 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4B' | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | 6.0 | [1.4] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 83 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4B'5A'5-6A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | 5.9 | [2.1] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 84 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4B' | 包含層 | △ | ○ | 浅黄橙 | - | 5.8 | [0.9] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 85 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4A'-B' | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | 5.2 | [1.2] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 86 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 4・5A' | 包含層 | ○ | △ | 灰褐 | - | 6.4 | [1.5] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 87 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 4・5A' | 包含層 | △ | △ | 橙 | - | 5.4 | [1.5] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 88 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 5A' | 包含層 | ○ | ◎ | 橙 | - | (5.3) | [1.0] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 89 | 土師器坏Ⅱ C' | 湿地 | 5A' | 包含層 | △ | △ | 灰黄橙 | - | (7.4) | [2.0] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 90 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 5A' | 包含層 | △ | ◎ | 青灰 | - | (6.4) | [1.6] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部に結束痕か線刻あり |
| 91 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 5A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | (15.8) | - | [4.5] | [0.4] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 92 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 6・7A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | 13.4 | - | [4.5] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 93 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 6A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | (5.4) | [1.1] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 94 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 6A' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | (6.4) | [1.6] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 95 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 6A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | 4.3 | [1.5] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 内面黒色処理だが酸化消失？体部下端ヘラケズリ |
| 96 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 5・6A-C' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (5.8) | [0.7] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 97 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 6A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい褐 | - | (5.0) | [1.1] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 98 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 6A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | (6.2) | [2.8] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部に不定方向のヘラケズリ |
| 99 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 6A' | 包含層 | ○ | △ | 黄灰 | - | (5.6) | [2.8] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 100 | 土師器坏Ⅱ B' | 湿地 | 5・6B' | 包含層 | ○ | ○ | 黒 | - | (8.6) | [1.8] | 0.5 | ミガキ | ミガキ | |
| 101 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 6B' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (6.6) | [3.4] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端ヘラケズリ |
| 102 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 6B' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (5.6) | [2.1] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端から底部ヘラケズリ |
| 103 | 土師器坏Ⅱ A ？ | 湿地 | 7A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (6.0) | [2.2] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 内面黒色処理だが酸化消失？ |
| 104 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 7A' | 包含層 | △ | ○ | にぶい橙 | - | (6.0) | [3.2] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 内面黒色処理だが酸化消失？ |
| 105 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 7A' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | (6.0) | [2.0] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 106 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 7A' | 包含層 | △ | ○ | にぶい橙 | (11.6) | 4.6 | 3.5 | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 完形、体部上半回転ヘラナデ |
| 107 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 7A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (5.6) | [1.9] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 108 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 7A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 5.8 | [1.6] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 109 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 7A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | 5.0 | 2.3 | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 110 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 7A' | 包含層 | △ | △ | 灰黄褐 | - | (6.2) | [1.1] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 111 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 7A' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 5.8 | 1.1 | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 112 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 6・7A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | (5.6) | [1.7] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 113 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 7B' | 包含層 | ○ | ○ | 橙 | - | (5.4) | 1.8 | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 114 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 7B' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | - | - | - | [0.4] | 回転ナデ | 回転ナデ | 墨書 |
| 115 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 8A' | 包含層 | △ | ○ | にぶい橙 | - | 5.6 | [1.9] | 0.8 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 116 | 土師器坏Ⅱ C | 湿地 | 8A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい褐 | - | 6.0 | 1.9 | 1.0 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 117 | 須恵器坏Ⅱ D | 湿地 | 8A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | (14.0) | - | [4.2] | [0.6] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 118 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 8B' | 包含層 | ◎ | △ | にぶい黄橙 | - | 6.5 | [1.1] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 119 | 土師器坏Ⅱ B | 湿地 | 8B' | 包含層 | ○ | △ | 褐灰 | - | (5.8) | [1.6] | 0.6 | ミガキ | 回転ヘラケズリ・ミガキ | |
| 120 | 土師器坏Ⅱ A | 湿地 | 8C' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 5.2 | [0.8] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 体部に穿孔を伴う意図的破砕痕あり |

表2　掲載遺物一覧（器類）　　121～160

| No. | 器種 | 出土状況 | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 寸法 mm | | | | 土器調整 | | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 遺構 | 位置 | 層位 | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | 内面 | 外面 | |
| 121 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰黄褐 | - | 15.6 | [1.8] | - | ミガキ | 回転ナデ | 内面に多量の漆付着 |
| 122 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | (12.2) | 6.5 | 4.6 | 0.8 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 123 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 4.6 | [2.3] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 124 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 46.2 | [3.3] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 125 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 46.9 | [2.2] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 126 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | 46.2 | [1.3] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 127 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 46.3 | [1.6] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 128 | 土師器杯ＥＡ小型Ａ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | (12.2) | 46.2 | 4.3 | 0.8 | ミガキ | 回転ナデ | 下半にヘラケズリ |
| 129 | 土師器杯ＥＡ'ア | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 48.8 | [1.9] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 130 | 土師器杯ＥＣ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | 4.4 | [0.8] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 131 | 土師器高杯Ｉ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | △ | △ | 灰黄褐 | - | 8.5 | [4.2] | 1.0 | ミガキ | ヘラケズリ | |
| 132 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | 15.4 | 46.0 | 6.1 | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 133 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 9Ａ'10Ａ' | 包含層 | × | ◎ | 灰 | (14.0) | 46.0 | 4.5 | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部回転ヘラ切り後無調整、墨書 |
| 134 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | △ | ○ | 灰白 | (15.2) | - | [3.3] | [0.4] | 回転ナデ | 回転ナデ | 138と同一個体 |
| 135 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | - | 46.0 | [2.1] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 137と同一個体 |
| 136 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | △ | 灰白 | - | 46.0 | [1.9] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 部分的に意図的破砕痕あり |
| 137 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 9Ａ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | 7.0 | [1.6] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 体部下端から底部に回転ヘラケズリ |
| 138 | 土師器杯ＥＣ | 墨地 | 9Ｂ' | 包含層 | △ | ○ | にぶい橙 | (12.0) | 5.2 | 4.1 | 0.5 | 回転ナデ | 回転ヘラナデ | |
| 139 | 土師器杯ＥＣ | 墨地 | 10Ａ' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 6.2 | [1.8] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 140 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ａ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | - | 46.8 | [1.8] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 141 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ａ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | 46.6 | [3.7] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | 内外面に火襷 |
| 142 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ａ' | 包含層 | △ | ○ | 灰白 | - | 5.4 | [1.5] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 143 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | △ | △ | にぶい橙 | 13.9 | 46.0 | 5.0 | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 144 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 13.2 | - | [4.0] | 0.4 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 145 | 土師器杯ＥＣ?蓋? | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | 橙 | - | 5.0 | [1.0] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 146 | 土師器杯ＥＣ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ◎ | ○ | にぶい黄橙 | - | 45.4 | [1.0] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 147 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ◎ | △ | 灰白 | (12.6) | 45.0 | 3.9 | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 148 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | - | 45.0 | [1.8] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 内面に火襷 |
| 149 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | 青灰 | (11.6) | 45.8 | [3.0] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | 内外面に火襷 |
| 150 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | - | 46.0 | [1.3] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 151 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | 46.0 | [1.4] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 152 | 須恵器杯ＥＤ | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | (12.6) | 17.0 | 2.9 | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部回転ヘラ切り |
| 153 | 須恵器杯ＥＤ' | 墨地 | 10Ｂ' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | 45.8 | [0.9] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 回転糸切り後、高台部貼り付け |
| 154 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 10-11Ａ'トレンチ | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | (16.6) | 5.5 | 5.5 | 0.8 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端から底部に回転ヘラケズリ |
| 155 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 10-11Ａ'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | (14.6) | 45.2 | 5.3 | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端にヘラケズリ |
| 156 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 10-11Ａ'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 灰黄褐 | - | 46.0 | [1.6] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 157 | 土師器杯ＩＡ | 墨地 | 10-11Ａ'トレンチ | 包含層 | × | ○ | にぶい黄橙 | (12.8) | 6.0 | 5.0 | 1.0 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 158 | 土師器杯ＥＡ | 墨地 | 10-11Ｂ'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 46.2 | [2.7] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下半から底部に回転ヘラケズリ |
| 159 | 土師器杯ＥＣ | 墨地 | 11Ｆ | 包含層 | △ | ○ | 橙 | (10.2) | 5.6 | [2.0] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 160 | 土師器杯ＥＣ | 墨地 | 11Ｆ | 包含層 | ○ | ○ | 橙 | - | 45.6 | [1.2] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | |

表２　掲載遺物一覧（器類）　　161 ～ 200

| № | 器種 | 出土状況 | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 寸法(cm) | | | | 主な調整 | | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 遺構 | 位置 | 層位 | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | 内面 | 外面 | |
| 161 | 須恵器坏ⅡD | 湿地 | 11B' | 包含層 | ○ | ○ | 灰白 | - | (5.4) | [1.5] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 162 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 5.6 | [1.3] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 163 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | ○ | 灰黄褐 | - | 4.3 | [2.9] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 164 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | (6.0) | [1.9] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下半から底部に回転ヘラケズリ |
| 165 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (5.0) | [1.5] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 166 | 土師器坏ⅡA' | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | △ | △ | にぶい黄橙 | - | (7.6) | [1.7] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | 底部に線刻あり |
| 167 | 土師器坏ⅡA' | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | (6.2) | [1.6] | 0.5 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 168 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | △ | 灰黄褐 | (12.6) | 3.9 | [5.2] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 口縁部片口状に整形 |
| 169 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 4.8 | [1.4] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 外面に火襷 |
| 170 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | △ | 灰黄褐 | (12.4) | - | [3.7] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 171 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | △ | ○ | にぶい橙 | - | 5.2 | [1.2] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 172 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | ○ | にぶい赤褐 | - | 5.4 | [1.1] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 173 | 須恵器坏ⅡD | 湿地 | 西半 | 包含層上面 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (5.0) | [1.9] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部に結束痕あり |
| 174 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | △ | ○ | にぶい黄橙 | - | (5.4) | [1.2] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 175 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 7-8ベルト | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (5.6) | [1.3] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端不定方向のヘラケズリ |
| 176 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (4.8) | [2.1] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 177 | 土師器坏ⅡA | 湿地 | 中央 | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | (6.4) | [1.6] | 0.7 | ミガキ | 回転ナデ | |
| 178 | 土師器坏ⅡB' | 湿地 | 7-8ベルト | 包含層 | ○ | ○ | 黒 | - | 8.4 | [6.0] | 0.7 | ミガキ | ミガキ | |
| 179 | 土師器坏ⅡA' | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | - | 8.6 | [1.1] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 坏底部回転ヘラケズリ |
| 180 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 灰黄褐 | 12.8 | 7.0 | 4.7 | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 181 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | (12.6) | (4.9) | 3.8 | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 182 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 西半 | 包含層 | ○ | ○ | 橙 | (15.4) | 6.7 | 4.8 | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 183 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 中央 | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 5.4 | [1.0] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 184 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 中央 | 包含層 | ○ | ○ | 灰黄褐 | - | 4.0 | [2.6] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ヘラナデ | |
| 185 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 南東隅 | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄橙 | - | 5.6 | [1.1] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 186 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 5.4 | [1.0] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 187 | 土師器坏ⅡC | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | △ | ○ | 褐灰 | (14.2) | - | [3.9] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 188 | 須恵器坏ⅡD | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | △ | 灰白 | - | (4.8) | [2.0] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 189 | 須恵器坏ⅡD | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | (5.8) | [0.6] | 0.4 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部回転ヘラ切り |
| 190 | 須恵器広口壺・甕 | 湿地 | 1A' | 包含層 | ◎ | ○ | 灰白 | (20.2) | - | [5.1] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | 口縁部内面、肩部外面に濃緑色の自然釉 |
| 191 | 土師器鉢Ⅱ | 湿地 | 1-2A'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | にぶい橙 | - | (7.6) | [2.9] | 1.0 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端回転ヘラケズリ |
| 192 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 2A' | 包含層 | △ | △ | 灰黄褐 | - | 6.0 | [3.3] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | 内面漆付着 |
| 193 | 土師器小壺 | 湿地 | 4A'6-7A'トレンチ | 包含層 | ○ | △ | 褐灰 | - | (5.0) | [5.0] | 1.2 | ナデ | ナデ | 非ロクロ |
| 194 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 4A'5-6C'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 22.4 | - | [6.1] | 0.8 | ナデ | ヘラケズリ | |
| 195 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 4A' | 包含層 | △ | ○ | 褐灰 | - | (8.6) | [4.8] | 1.3 | ナデ | ヘラケズリ | |
| 196 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 4A' | 包含層 | △ | ○ | にぶい橙 | (25.6) | - | [8.3] | [1.0] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 197 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 4A' | 包含層 | △ | ○ | にぶい橙 | (22.6) | - | [7.1] | [1.1] | 回転ナデ | 回転ナデ | 口縁部片口状に整形 |
| 198 | 須恵器甕 | 湿地 | 4A' | 包含層 | ○ | ◎ | 灰 | (39.6) | - | [11.0] | [1.6] | 回転ナデ | 回転ナデ | 内面降灰 |
| 199 | 須恵器長頸壺 | 湿地 | 4A',4B',9B',10B' | 包含層 | ○ | △ | 明褐 | (11.0) | - | [2.4] | [0.5] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 200 | 須恵器広口壺 | 湿地 | 4-5A'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | (20.8) | - | [5.0] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | |

## 表２　掲載遺物一覧（器類）

201 ～ 240

| No. | 器種 | 出土状況 | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 寸法（cm） | | | | 主な調整 | | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 遺構 | 位置 | 層位 | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | 内面 | 外面 | |
| 201 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 5・6A' | 包含層 | △ | △ | にぶい黄橙 | - | (7.0) | [1.3] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 202 | 須恵器小壺 | 湿地 | 6A' | 包含層 | ○ | △ | 灰白 | - | (5.8) | [2.6] | 0.7 | 回転ナデ | ヘラケズリ | 口径の小さな器種 |
| 203 | 須恵器甕 | 湿地 | 6A'・7A' | 包含層 | △ | ◎ | 青灰 | (39.6) | - | [10.3] | [1.5] | アテ | タタキ | |
| 204 | 土師器鉢Ⅱ | 湿地 | 6A' | 包含層 | ◎ | ○ | 褐灰 | (25.4) | - | [5.8] | [0.7] | ミガキ | 回転ナデ | |
| 205 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 6A' | 包含層 | △ | ○ | にぶい黄橙 | - | 9.3 | [9.4] | 1.2 | 回転ナデ | ヘラケズリ | 底部外周ヘラケズリ、中央少量の砂粒 |
| 206 | 土師器甕Ⅰ | 湿地 | 7A' | 包含層 | △ | ○ | 褐灰 | - | - | 2.3 | 0.8 | ナデ | ヘラケズリ | 底部木葉痕 |
| 207 | 須恵器長頸壺 | 湿地 | 7A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | 9.2 | [3.8] | 1.5 | ハケ | カキメ | 底部砂粒 |
| 208 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 6-7A'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 褐灰 | - | 6.6 | [3.8] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部回転糸切り |
| 209 | 須恵器広口壺 | 湿地 | 7B' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | (16.0) | - | [4.1] | [0.7] | 回転ナデ | 回転ナデ | 口縁部内面星状降灰 |
| 210 | 土師器鉢Ⅱ | 湿地 | 8B' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | - | [4.5] | [0.7] | ミガキ | ヘラケズリ | 墨書 |
| 211 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 9A' | 包含層 | △ | ○ | にぶい黄橙 | (13.4) | - | [4.3] | [0.7] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 212 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 9A'・10A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | (26.8) | - | [10.7] | [1.3] | ナデ | ヘラケズリ | 還元気味 |
| 213 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 9A' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (5.8) | [3.5] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 体部下端から底部にかけてヘラケズリ |
| 214 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 9A' | 包含層 | △ | ○ | 褐灰 | - | (9.6) | [2.9] | 1.0 | アテ | タタキ | 底部砂粒、丸底傾向 |
| 215 | 土師器甕Ⅰ | 湿地 | 9A' | 包含層 | △ | ○ | 褐灰 | - | (9.7) | [1.7] | 0.9 | ナデ | ナデ | 底部木葉痕 |
| 216 | 土師器鉢Ⅱ | 湿地 | 9A' | 包含層 | ○ | × | にぶい黄橙 | - | (8.2) | [2.9] | 1.1 | ミガキ | 回転ナデ | 下半～底部外周ケズリ？ |
| 217 | 土師器小壺 | 湿地 | 9A' | 包含層 | ○ | ○ | 黒褐 | (6.6) | - | [5.1] | [0.6] | ミガキ | ミガキ | 内外面黒色処理 |
| 218 | 須恵器長頸壺 | 湿地 | 9A' | 包含層 | ○ | ◎ | 青灰 | (7.2) | - | [4.0] | [0.5] | 回転ナデ | 回転ナデ | 内面降灰 |
| 219 | 須恵器直口壺 | 湿地 | 9A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | (9.8) | - | [4.9] | [0.6] | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 220 | 須恵器直口壺 | 湿地 | 9A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | (8.4) | - | [2.2] | 0.5 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 221 | 須恵器広口壺 | 湿地 | 9A'・10B' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | (16.8) | - | [6.8] | [0.7] | アテ | タタキ・カキメ | |
| 222 | 須恵器長頸壺 | 湿地 | 9A' | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | (15.4) | - | [10.2] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 223 | 須恵器甕 | 湿地 | 8A'9A'9B',10A'10B'他 | 包含層 | ○ | △ | にぶい橙 | (29.0) | 10.8 | [23.0] | 1.2 | 回転ナデ・ハケ | ヘラケズリ・ナデ | 底部砂粒 |
| 224 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 9B'10B' | 包含層 | ○ | △ | 灰黄褐 | - | (7.2) | 1.3 | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 225 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 10A' | 包含層 | ○ | △ | 浅黄橙 | (23.2) | - | [6.9] | 0.8 | 回転ナデ | 回転ナデ | 内外面泥漿スリップ |
| 226 | 土師器甕Ⅰ | 湿地 | 10A'11A' | 包含層 | ○ | ○ | 褐灰 | - | (9.6) | [2.9] | 1.0 | ナデ | ハケ | 底部木葉痕 |
| 227 | 土師器甕Ⅰ | 湿地 | 10A' | 包含層 | ○ | ○ | 褐灰 | - | (9.3) | [2.6] | 1.2 | ナデ | ハケ | 底部木葉痕後ハケ |
| 228 | 須恵器甕 | 湿地 | 10A' | 包含層 | ○ | ◎ | 青灰 | - | - | - | [1.0] | 回転ナデ | 回転ナデ | 頸部に２段の波状文 |
| 229 | 須恵器長頸壺 | 湿地 | 10B' | 包含層 | ○ | ○ | 灰～灰白 | - | (6.4) | [3.4] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 230 | 土師器 鉢Ⅱ | 湿地 | 10B' | 包含層 | ○ | ○ | 灰黄褐 | - | (9.0) | [0.8] | 1.0 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端から底部にヘラケズリ |
| 231 | 土師器耳状突起 | 湿地 | 10B' | 包含層 | ○ | ○ | 褐灰 | - | - | [3.7] | [1.8] | ナデ | ナデ | 土師器特殊器種の耳状突起？ |
| 232 | 土師器甕Ⅰ | 湿地 | 10B' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | (13.4)<br>- | -<br>(11.3) | [8.3]<br>[14.8] | [0.6]<br>0.8 | ハケ | ハケ・ケズリ | 底部木葉痕 |
| 233 | 土師器甕Ⅰ | 湿地 | 10B' | 包含層 | △ | ○ | 褐灰 | - | (9.5) | [2.4] | 1.0 | ハケ | ハケ | 底部木葉痕等丁寧なナデ消し |
| 234 | 土師器甕Ⅰ | 湿地 | 10B' | 包含層 | △ | ○ | にぶい橙 | - | (6.0) | [2.9] | 1.0 | ハケ | ナデ | 底部木葉痕 |
| 235 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 10B' | 包含層 | ○ | ○ | 褐灰 | - | 5.5 | [6.3] | 1.2 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部下端回転ヘラケズリ |
| 236 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 10B' | 包含層 | ○ | △ | にぶい黄褐 | - | - | [2.1] | [0.7] | 回転ナデ | 回転ナデ | 頸部に鋸歯状沈線文 |
| 237 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 10-11A'トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 褐灰 | - | (6.8) | [2.2] | 1.0 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 238 | 土師器小壺Ⅱ | 湿地 | 10B' | 包含層 | △ | ○ | にぶい黄橙 | - | (4.0) | [2.4] | 0.6 | 回転ナデ | 回転ナデ | 底部回転糸切り |
| 239 | 土師器甕Ⅱ | 湿地 | 中央 | 包含層 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | 6.2 | [1.7] | 0.7 | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 240 | 須恵器壺 | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | (11.3) | [3.8] | 1.4 | 回転ナデ | ヘラケズリ | 底部砂粒 |

## 表２　掲載遺物一覧（器類）

241 ～ 248

| No. | 器種 | 出土状況 | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 寸法（cm） | | | | 主な調整 | | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 遺構 | 位置 | 層位 | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 器厚 | 内面 | 外面 | |
| 241 | 須恵器壺 | 湿地 | 確認トレンチ | 包含層 | ○ | ○ | 灰 | - | (11.1) | [5.1] | 1.8 | 回転ナデ | タタキ・ヘラケズリ | |
| 242 | 土師器坏ⅡA | 遺構外 | 微高地 | 撹乱 | ○ | × | 橙 | - | (6.2) | [2.9] | 0.6 | ミガキ？ | 回転ナデ | |
| 243 | 土師器坏ⅡA | 遺構外 | 微高地 | | ○ | × | 浅黄橙 | - | (5.5) | [1.6] | 0.8 | ミガキ？ | 回転ナデ | |
| 244 | 土師器坏ⅡA | 遺構外 | 微高地 | 撹乱 | ○ | ○ | にぶい黄橙 | - | (5.6) | [1.1] | 0.6 | ミガキ | 回転ナデ | 体部下端ヘラケズリ |
| 245 | 白磁碗 | 表採 | 南東調査区外 | 湿地堆積層由来？ | ○ | ○ | 灰白 | - | - | - | [1.0] | 回転ナデ | 回転ナデ | 見込に圏線・花文、中国産（ビロースク型） |
| 246 | 青磁碗 | 湿地 | 東側 | 包含層検出面 | ○ | ○ | オリーブ灰 | - | - | - | [0.6] | 回転ナデ | 回転ナデ | 中国産（龍泉窯系？） |
| 247 | 天目茶碗 | 湿地 | 9B' | 包含層 | ○ | ○ | にぶい赤褐色 | - | - | - | [0.6] | 回転ナデ | 回転ナデ | 国産陶器（瀬戸・美濃） |
| 248 | 漆器椀 | 湿地 | 東側 | 包含層検出面 | - | - | 黒色 | | | | | - | - | 底部に文字 |

【表２の凡例】

### 器種分類

<table>
<tr><th>種類</th><th>器種</th><th colspan="2">ロクロ使用有無</th><th colspan="2">焼成など</th></tr>
<tr><td rowspan="6">土師器</td><td rowspan="7">坏</td><td rowspan="3">×</td><td rowspan="3">Ⅰ</td><td>内黒</td><td>A</td></tr>
<tr><td>両黒</td><td>B</td></tr>
<tr><td>非黒</td><td>C</td></tr>
<tr><td rowspan="4">○</td><td rowspan="4">Ⅱ</td><td>内黒</td><td>A</td></tr>
<tr><td>両黒</td><td>B</td></tr>
<tr><td>非黒</td><td>C</td></tr>
<tr><td>須恵器</td><td>還元</td><td>D</td></tr>
</table>

※各種、高台付きのものは A'・B'・C'・D' と「'」を付加して分類。

【例】

土師器坏（ロクロ使用・内面黒色処理）→土師器坏ⅡA

### 胎土分類

| 非常に精良 | 精良 | やや粗 | 粗 |
|---|---|---|---|
| ◎ | ○ | △ | × |

### 焼成分類

| 非常に良好 | 良好 | やや不良 | 不良 |
|---|---|---|---|
| ◎ | ○ | △ | × |

### 寸法（最大値）

| 残存値 | 復元値 | 測定不可 |
|---|---|---|
| [　] | (　) | － |

## 表３　掲載遺物一覧（石器・石製品・土製品・金属製品・木製品）

No. 249 ～ 272

| No. | 種別 | 出土状況 | | | 寸法（cm） | | | 重量(g) | 特徴 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 遺構 | 位置 | 層位 | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| 249 | 砥石 | 湿地 | 5A' | 包含層 | 5.5 | 4.4 | 4.2 | 96.3 | 5面擦痕 | デイサイト |
| 250 | 砥石 | 湿地 | 9B'・9A' | 包含層 | 5.8 | 3.2 | 3.0 | 23.0 | | 頁岩（北上山地） |
| 251 | 砥石 | 湿地 | 10B' | 包含層 | 7.2 | 4.0 | 1.1 | 41.7 | | 頁岩（北上山地） |
| 252 | 砥石 | 湿地 | 10B' | 包含層 | 8.9 | 6.5 | 2.8 | 101.5 | | 頁岩（北上山地） |
| 253 | 砥石 | 微高地 | | 表土～検出面 | 8.0 | 3.4 | 2.8 | 76.6 | 5面擦痕 | 頁岩（北上山地） |
| 254 | 石鏃 | 湿地 | 5B' | 包含層 | 3.3 | 1.3 | 0.4 | 1.6 | 有茎 | 珪質頁岩 |
| 255 | 石鏃 | 湿地 | 南側 | 包含層 | 1.2 | 1.1 | 0.2 | 0.3 | 無茎 | 珪質頁岩 |
| 256 | 石鏃 | 湿地 | 9A' | 包含層 | 2.5 | 1.4 | 0.5 | 1.4 | | 珪質頁岩 |
| 257 | 石錘 | 湿地 | 5A' | 包含層 | 3.6 | 2.8 | 1.8 | 26.2 | | 頁岩（北上山地） |
| 258 | 碁石 | 湿地 | 5A' | 包含層 | 1.7 | 1.6 | 1.1 | 4.2 | 黒色 | チャート |
| 259 | 碁石 | 湿地 | 6A' | 包含層 | 1.6 | 1.3 | 7.5 | 2.4 | 白色 | チャート |
| 260 | 石棒？ | 南端 | トレンチ上段 | 表土 | 7.0 | 2.7 | 1.4 | 44.7 | | 頁岩（北上山地） |
| 261 | 不明石製品 | 湿地 | 4B' | 包含層 | 7.0 | 5.3 | 4.6 | 32.6 | | 軽石 |
| 262 | 磨石 | 湿地 | 2A' | 包含層 | 8.7 | 9.8 | 5.1 | 610.2 | | デイサイト |
| 263 | 磨石 | 湿地 | 南側 | 包含層 | 6.1 | 6.8 | 6.4 | 506.2 | | デイサイト |
| 264 | 銅銭 | SI1102 | | 埋土上層 | 2.4 | 2.1 | 0.1 | 0.7 | 永楽通寶 | 混入遺物 |
| 265 | 銅銭 | 湿地 | 東側 | 検出面 | 2.4 | 2.4 | 0.1 | 2.9 | 至和元寶 | |
| 266 | 鉄釘 | 湿地 | 2A' | 包含層 | 5.7 | 0.5 | 0.5 | 3.7 | | 部分的に赤色の漆 |
| 267 | 土玉 | 湿地 | 2A' | 包含層 | 1.7 | 1.7 | 1.4 | 3.2 | 球形に貫通孔 | |
| 268 | 土錘 | 湿地 | 5A' | 包含層 | 5.4 | 1.8 | 1.8 | 13.7 | 土師質 | |
| 269 | 不明木製品 | 湿地 | 西側 | 包含層検出面 | 7.7 | 2.3 | 0.5 | - | 刻みあり | 曲物部材か |
| 270 | 不明木製品 | 湿地 | 西側 | 包含層 | 18.8 | 3.2 | 0.8 | - | ダボ残存、板状 | |
| 271 | 不明木製品 | 湿地 | 9A' | 包含層上面 | 6.0 | 2.5 | 0.4 | - | 小板状 | |
| 272 | 不明木製品 | 湿地 | 中央 | 表土 | 1.8 | 0.8 | 0.5 | - | 漆塗り | |

＊寸法の数値は残存値

# Ⅴ 総　　括

## 1 遺　　構

今回の発掘調査では、竪穴住居９棟、土坑９基を検出した。いずれも平安時代のものであると考えられ、遺跡内の微高地で検出された。本節ではこれら検出遺構について、過年度調査の成果も合わせた中嶋遺跡の総括をおこないたい。

### （1）竪 穴 住 居

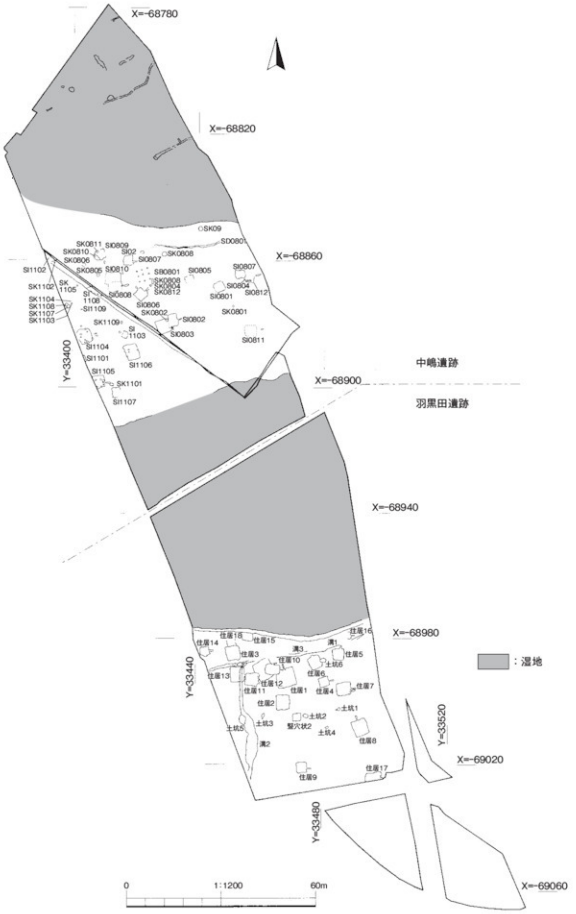
先述の通り、今回の発掘調査では平安時代に属する９棟の竪穴住居がみられたが、過年度の調査でも同時期の竪穴住居 13 棟が検出されており、中嶋遺跡全体では調査された竪穴住居が 22 棟となった。一方、湿地を挟んで南側に隣接する羽黒田遺跡でも同じく平安時代に属する 18 棟の竪穴住居が調査されており、この成果も踏まえた分析が可能である。特に、羽黒田遺跡は中嶋遺跡に比べ、竪穴住居の分布密度が高く、遺構残存度や遺物量も中嶋遺跡よりも良好である。また、竪穴住居の形態が多様であり、集落の存続期間も長いと考えられるため、羽黒田遺跡の資料を基準として分析を進めることが有効であると考え、羽黒田遺跡の竪穴住居について分析を試みる。

羽黒田遺跡の報告書中では、竪穴住居が大きく２形態に分類されている。北カマドの竪穴住居をＡ群とし、これらが遺跡内においてより古相であり、Ｂ群はそれらよりも新出であることが示されている。これら分類に際して抽出されているおもな属性は、カマド方位と規模である。それ以外にも中嶋遺跡においてもみられるカマド脇の土坑を有する竪穴住居が多数存在しており、この土坑の存否も属性に加えることが可能である。さらに、カマドの取り付く位置についても差異が認められ、これも属性に加えることで細分化可能である。今回はこのように過去の分析結果を踏襲しつつもさらに細分案を提示し、より細かな変遷案を構築することとする。

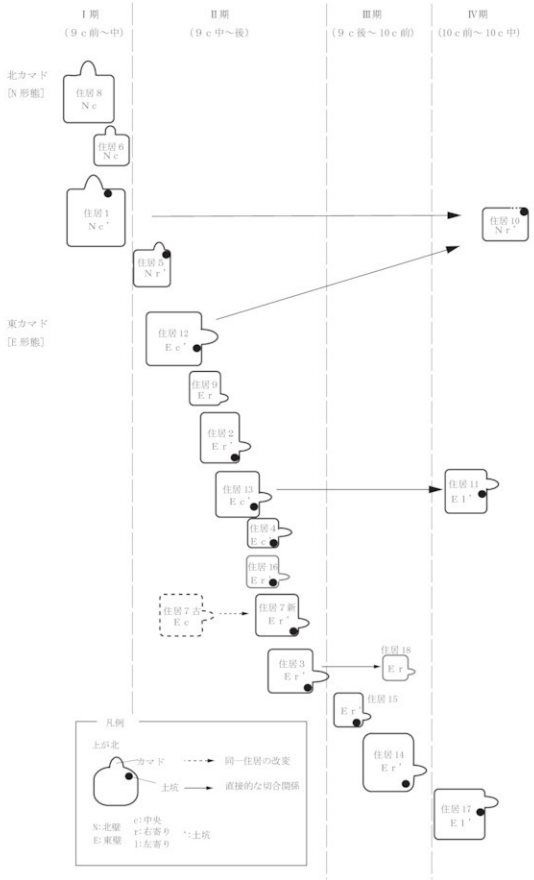
まず、分類呼称であるが、Ａ群と分類された北カマドの竪穴住居を今回はＮ（North）、Ｂ群と分類された東カマドの竪穴住居をＥ（East）と呼称する。次に、カマドの位置については、住居内からカマドに向かって左に付くものをアルファベット小文字l（left）、中央につくものをアルファベット小文字ｃ（center）、右につくものをアルファベット小文字ｒ（right）とそれぞれ呼称する。これに加え、カマド脇に土坑を有するものには、「′」（ダッシュ）を付加して表記する。

羽黒田遺跡の北カマド住居は、住居１・５・６・８・10 の５棟である。住居１はEc′、住居５はEr′、住居６はEc、住居８はEcと分類できる。もっとも簡素な形態である住居８はこの集落の中でもっとも初源的な形態の竪穴住居であると仮定した。この根拠として、集落内で唯一底部ヘラ切りの須恵器坏（９世紀前半）が床面から出土していることが挙げられる。その他の北カマド住居についても羽黒田遺跡報告書中でも古いとされている通り９世紀前半頃の土器を保有している。ただし、住居 10 は煙道が認められず、出土遺物も集落内でもっとも新しい一群であることから、この住居 10 のみ形態の法則からは外れるものと考えられる。このような分析の結果から、羽黒田遺跡では住居 10 以外の北にカマドを持つ竪穴住居が集落造営契機となっていることが窺える。

次に東カマド住居は、この集落において竪穴住居の大半を占めており、住居２～４・７・９・11～18 がこの住居形態に該当する。また、これら大半の竪穴住居には、カマド脇の土坑が付属している。土坑がみられない竪穴住居は、住居７古段階、住居９・18 である。住居９・18 はそれぞれ規模が小




第32図　中鳴・羽黒田遺跡全体平面




第33図　羽黒田遺跡竪穴住居変遷

さいことも土坑を欠く一要因かもしれない。次に、カマド位置が中央にある住居(Ec)は住居７古段階、住居４・12・13であり、主体となる右寄りになっている住居（Er）に比べ、少数である。さらに、カマドが左寄りにみられる２棟の竪穴住居（住居11･17）は、いずれも皿形の土師器を保有しており、新出する住居形態であることが予測される。大まかな変遷過程を考えると、カマドの位置が中央に位置する形態がやや古い傾向で、徐々に右寄りに移行し、最終的に左寄りへと転化するものと想定される。付属する土坑もこのカマドの変遷に伴って右から左へと移動する傾向である。

以上のように、羽黒田遺跡における竪穴住居の形態分類から想定される遺構変遷は、北カマドの一群から東カマドへと変遷し、カマド位置は中央から右寄りへ推移した後に左寄りに転化すると考えられる。また、最終的には10世紀中葉頃で煙道を持たないカマドとなることも付け加えておく。これら遺構から読み取ることができる変遷を次節の土器編年で検証することとする。

一方、中嶋遺跡では、羽黒田遺跡の結果を援用すると古相形態である北カマドの竪穴住居はSI0806の１棟とSI1104古段階が該当し、大半が東カマドの竪穴住居である。また、カマドを持たないものもあり、羽黒田遺跡とはやや様相が異なっている。

### （2）土　　坑

今回の調査で検出された土坑は９基であり、過年度調査で検出された土坑は14基である。これらのうち、その性格が判明するものはわずかであるが、今回調査したSK1101が土壙墓である可能性が考えられる。また、SK1107のように多量の土器が出土する土坑も存在するが、その性格については不明と言わざるを得ない。

## 2　遺　　物

### （1）土　　器

今回の調査で出土した遺物の大半は平安時代を中心とする土器である。これは、過年度調査においても同様である。ここでは、これらの土器の出土傾向やその特徴などから中嶋遺跡全体の土器様相について考えるため竪穴住居の分析同様、隣接する羽黒田遺跡の竪穴住居出土土器類を細分し、その変遷を明らかにする。それを活用して今回の調査で出土した土器の変遷を考えたい。

羽黒田遺跡の供膳具を分類すると、内面黒色処理された土師器坏ⅡＡがもっとも豊富である。これらを容量形態で分類すると４形態に分類可能である。第34図に示したとおり、「小形」･「扁平」･「中間」･「深形」と仮称する。これらはそれぞれ、底部や体部下端にヘラケズリを伴うものと伴わないものに２分され、ヘラケズリを伴うものがより古い傾向となる可能性が考えられる。これは、型式学的により古いとみられるロクロが用いられていない坏に不定方向のヘラケズリがみられる点からも関連するものと考えられ、さらにこの不定方向のヘラケズリがロクロの遠心力を利用した回転ヘラケズリへと変化し、その後ヘラケズリされないものへと移行する変遷が想定される。便宜的に、不定方向のヘラケズリをａ種、回転ヘラケズリをｂ種（１段・２段）、ヘラケズリが無いものをｃ種とする。このような立脚点から各容量形態をみると同一の竪穴住居において共伴関係にあるものの中に両者が偏在あるいは混在する状況がみられる。このような共伴事例を一見すると同一の時期に様々なものが混在しており、新旧を決しがたいと思われるかもしれないが、１点のみで細かな時期差を決めることができないながらも、型式変化の移行に着目すればその組列から正しい順序を導き出すことができると考えた。竪穴住居同士を比較すると、北カマドの住居６はｂ種とｃ種の混在、同じく北カマドの住居

1はａ種と非ロクロのものの混在である。なお、同じく北カマドである住居８は底部回転ヘラ切りの須恵器坏が出土している点で注目される。一方、これらより新出の竪穴住居であると想定される東カマドの竪穴住居では、住居12で、167（ａ種）、164～166（ｂ種）、163（ｃ種）がそれぞれ混在している。住居２も混在しているが、ａ種がみられない点で住居12と異なる。同じく出土数の多い住居３では、すべてｃ種のみで構成されている。このことから住居２・12・３はそれぞれ同じような容量形態の土師器坏を保有していながらも、わずかに組列にズレが生じており、これらを時間的な差であると仮定できる。なお、それ以外の属性においても住居３では、より底径の小さな53などがみられることからもこの変遷は妥当であると推測される。一方、内面黒色処理されない土師器坏ⅡＣは扁平な形態のものと深みのある形態のものに分けられる。これは、住居２において両者が共伴していることからも蓋然性が高いと考えられる。これも土師器坏ⅡＡと同様に小形化する傾向であると考えられる。また、この変化に伴い、底径が小さくなる状況がみられる。特に住居19の225や住居10の124などは底径が極端に小さい。このように羽黒田遺跡の土器の変遷をまとめると、住居１・６・８が古く、次に住居２・12が続くものとみられ、これらに続いて住居４・７・９、さらに住居３・13、住居11・15、最新のものとして住居10・14・17等が挙げられる。このような変遷案を住居の変遷案と重ねると、概ね矛盾がない変遷を辿るようである。このような土器と住居形態がマッチング可能な集落は珍しく貴重な例である。

さて、羽黒田遺跡の土器を検討した結果、おおまかな変遷案ができた。これを基に中嶋遺跡の方に目を移すと、良好な資料は少ないが、９世紀前半から10世紀半ばくらいまでの遺物があることがわかる。しかし、竪穴住居出土のものは９世紀中葉から後葉のものが主体を占めており、土器によって住居の変遷を考えることは困難であると考えられる。逆の見方をすると、羽黒田遺跡の集落は比較的長い期間集落が展開し、中嶋遺跡は集落の存続期間が比較的短いものとみることができる。

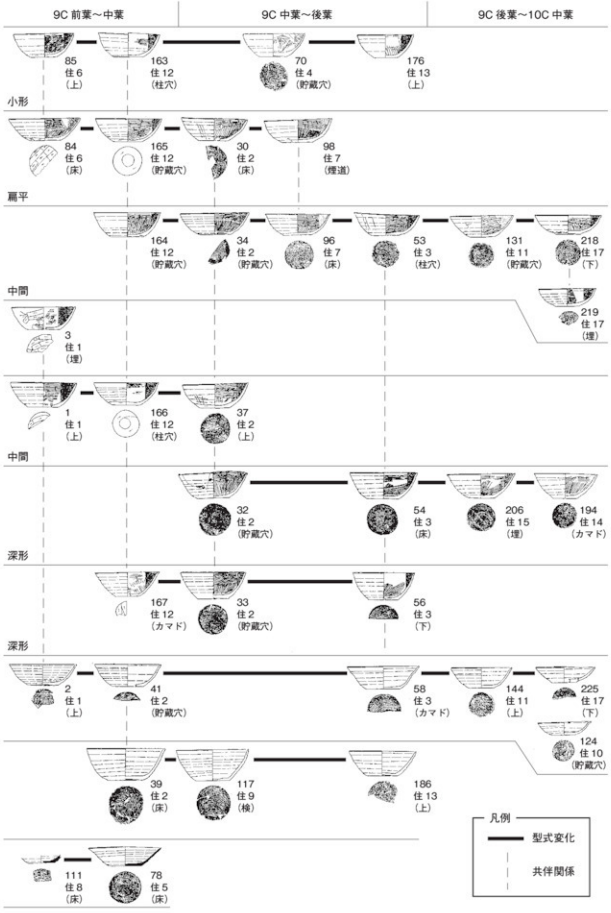
### （２）その他の遺物

土器以外の遺物としては、器以外の土（陶）製品・金属製品・石製品・木製品等が挙げられる。これらはおもに生業に関わる遺物が多い傾向であるが、陶製の風字硯は非常に特殊な遺物である。

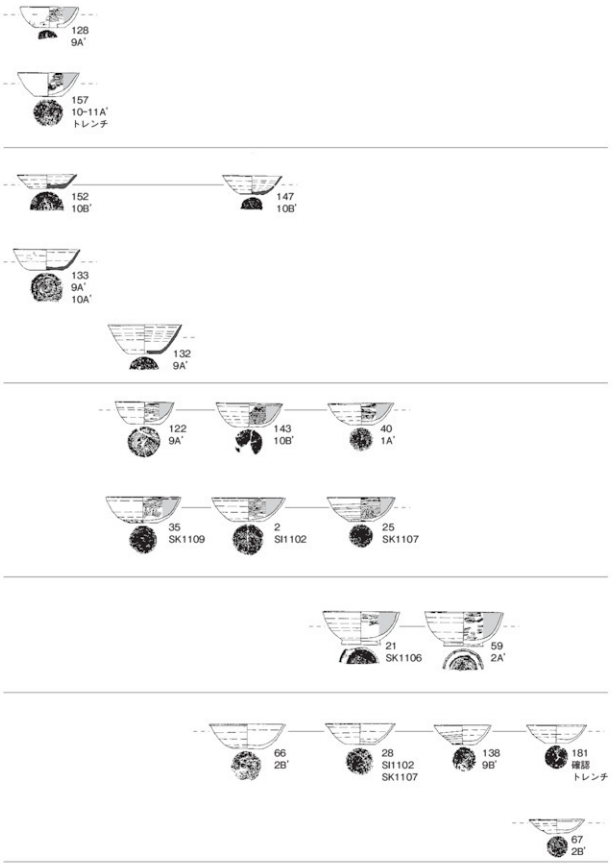
生業に関わる土製品として、今回の調査では土錘が１点出土しており、過年度調査でも２点出土している。一般に土錘は網の錘として用いられたとされ、河川に近い古代の集落では少なからず出土する遺物である。古代における土錘の使用状況を推測すると、使用に際しては同時多量に用いられる可能性が高い。数点の出土のみであることは使用実態とかけ離れており、やはり集落に近接するような小河川ではなく、比較的水量の多い河川での使用が推定される。中嶋遺跡に関して言えば、遺跡南に位置する猿ヶ石川が、土錘を多用するような漁労の場であったのであろう。

中嶋遺跡では、鉄製品の出土が平安時代集落にしては非常に少なく、一つの特徴である。過年度調査では、古代の金属製品は出土せず、今回の調査においても湿地より出土した鉄釘１点のみである。特に、農具や工具といった生業に密接に関わる遺物が出土しないことは不自然である。隣接する羽黒田遺跡でも金属製品は少ない傾向にある。ただし、石製品として砥石が出土していることを考えると研磨する必要性を有する鉄製利器が集落内に存在したことを示唆している。なお、少量の鉄滓やフイゴの羽口が少量出土することを考えると、鉄あるいは鉄製品生産に関する比較的簡単な工程の作業が集落内でおこなわれていた可能性が考えられる。

木製品については不明な点が多い。過年度調査では、古代の井戸から曲物や椀などの木製品が出土している。これら井戸出土の木製品は通常、遺物として残存しない木製品も当時の集落では一定量保




第34図　坏類変遷（羽黒田遺跡）




第35図　供膳具変遷（中嶋遺跡 2011）

有し、使用されていたものと考えられる。しかし、どのような集落でも普遍的に保有しているものなのか、どのような用途で用いられていたのかなど多くの疑問を残している。

この中嶋遺跡を評価するにあたって欠くことのできない遺物が陶製風字硯である。古代においては城柵あるいはそれに関連するような官的な性格を有する遺跡での出土が多いことを考えると、やはり官人層やそれに関わる人物の存在が考えられる。

## 3　ま　と　め

これまで述べた通り、この中嶋遺跡および羽黒田遺跡は古代の集落遺跡である。概ね9世紀前半より集落が営まれ始め、9世紀中葉～後葉にかけて竪穴住居がもっとも多く営まれ、その後縮小しながらも10世紀中葉頃まで集落が機能していたと考えられる。しかし、この認識はあくまでも現代まで残存し調査された遺構や出土した遺物に依るところが大きく、必ずしも正確な様相とは言い難いかもしれない。また、未調査エリアにも集落域は展開している可能性が高く、これらを含めた分析をおこなうことでより正確な具体像を知ることができるものと考える。今後周辺域の調査があれば注視する必要がある。また、集落内に硯を保有していることから比較的拠点的な集落であると同時に官的な機関との密接な繋がりを有する可能性がきわめて高い。特に、この地域は当該期において城柵が置かれていない。これは、城柵支配から逸脱していることを示すわけではなく、硯を有する中嶋遺跡の集落のような拠点的な集落を通じて城柵支配がなされているものと思われる。

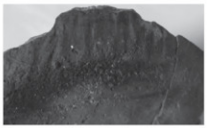
県内において9～10世紀にかけての古代集落の調査例は数多いが、竪穴住居の形態分化と土器の型式変遷が顕著に現れている例は意外にも少ない。このような中で中嶋・羽黒田の両遺跡ではこれらが非常に顕著に分析でき、今後他の遺跡での調査例と照合する貴重な基準となる可能性がある。

（福島）

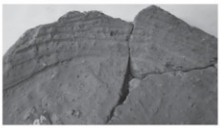
### 引用・参考文献

－（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書－
2010　『中嶋遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第547集
2010　『羽黒田遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第548集

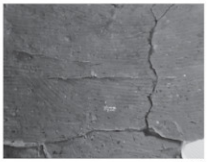
# 写　真　図　版



No214

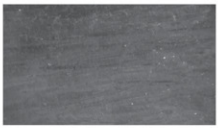


No215

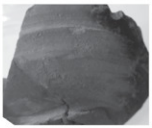


No13

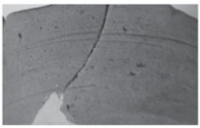
No23a



No23b



No184



No158

No221

No91

P32　第17図の表に対応

遠景（南から）

直上（南から）

写真図版1　航空写真

調査前（南から）

調査終了時（南から）

写真図版２　調査区全景

完掘（南東から）

断面（東から）

写真図版３　SI1101

完掘（南から）

検出（南から）

断面（東から）

遺物出土（南から）

遺物出土（南から）

写真図版４　SI1102

完掘（南から）

断面（東から）

写真図版5　SI1103

完掘（東から）

検出（南から）

写真図版６　SI1104（１）

断面（東から）

断面（北から）

断面（東から）

Ｆ１煙道断面（南から）

Ｆ２煙道断面（南から）

Ｆ３煙道断面（西から）

Ｋ１断面（南から）

Ｋ４断面（南から）

写真図版７　SI1104（２）

完掘（東から）

検出（南から）

写真図版８　SI1105（１）

断面（南東から）

Ｆ１検出（西から）

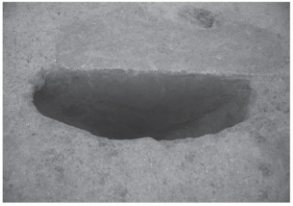
写真図版９　SI1105（2）

F１断面（西から）

F１断面（南から）

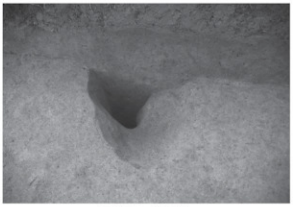
F１煙道断面（南から）

F１煙道完掘（南から）

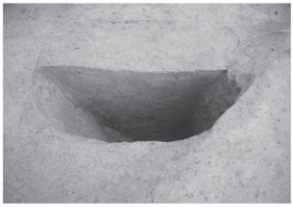


P１断面（南から）

P２断面（西から）



P３断面（東から）



P４断面（南から）

写真図版10　SI1105（３）

完掘（東から）

断面（南から）

写真図版11　SI1106

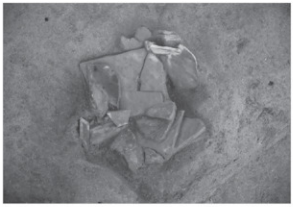
完掘（東から）

断面（北西から）

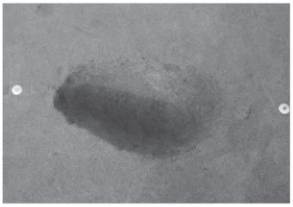
写真図版12　SI1107

SI1108 完掘（東から）

SI1108 断面（南から）



SI1108-K1 遺物出土（西から）

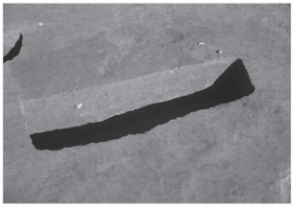


SI09-F1 煙道完掘（南から）

SI09-F1 煙道断面（南から）

写真図版13　SI1108・1109

SK1101 完掘（南から）



SK1101 断面（南から）

SK1102 断面（北から）

SK1103 断面（南から）

SK1104 断面（南から）

SK1105 断面（西から）

SK1106 断面（西から）

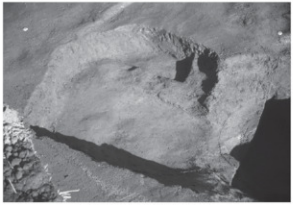
SK1107 断面（南から）

写真図版14　土坑（SK1101 ～ 1107）

SK1107 遺物出土（南西から）

SK1108 断面（西から）

SK1107 完掘（南から）



SK1108 完掘（南西から）

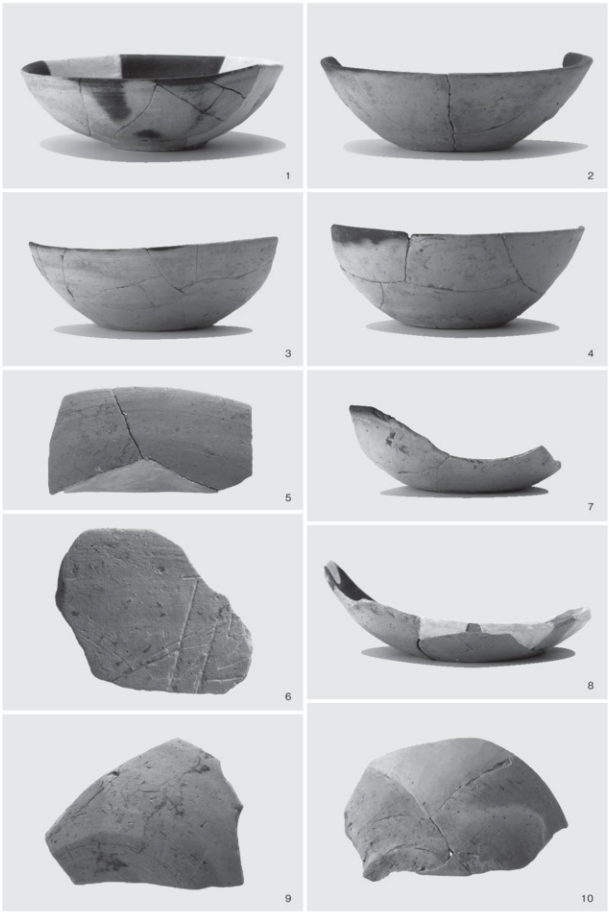
SK1109 完掘（南から）

SK1109 断面（東から）

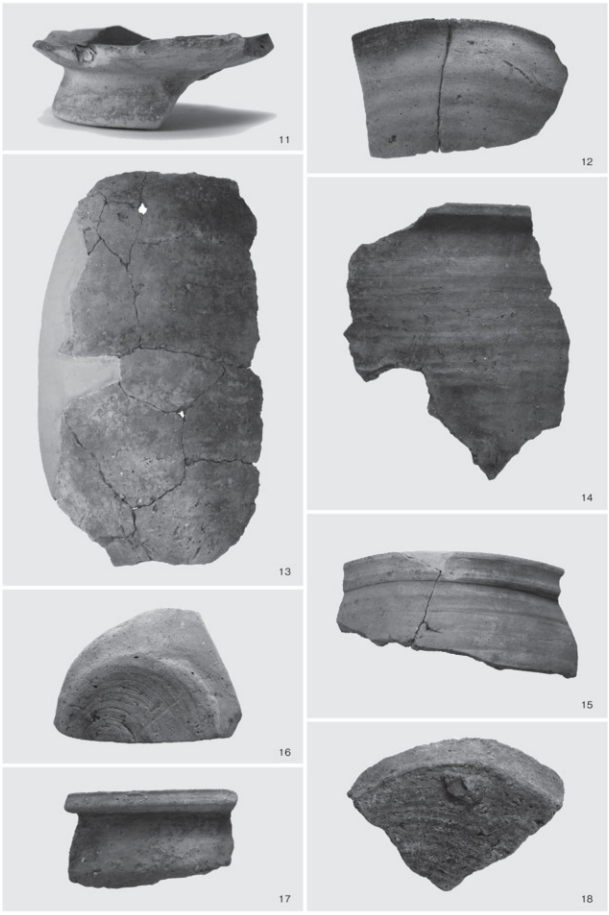
湿地包含層断面（西から）

湿地包含層断面（西から）

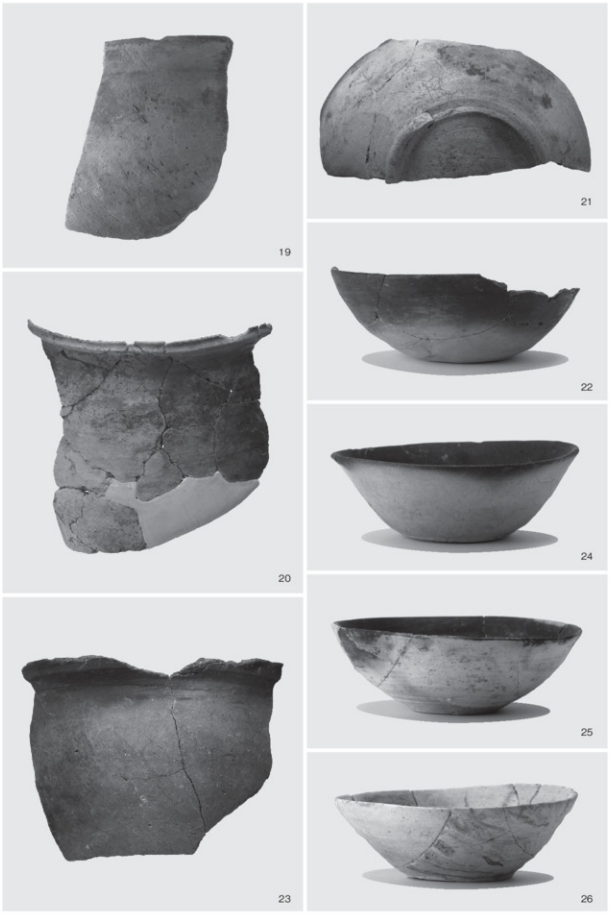
写真図版15　土坑（SK1107 ～ 1109）・湿地



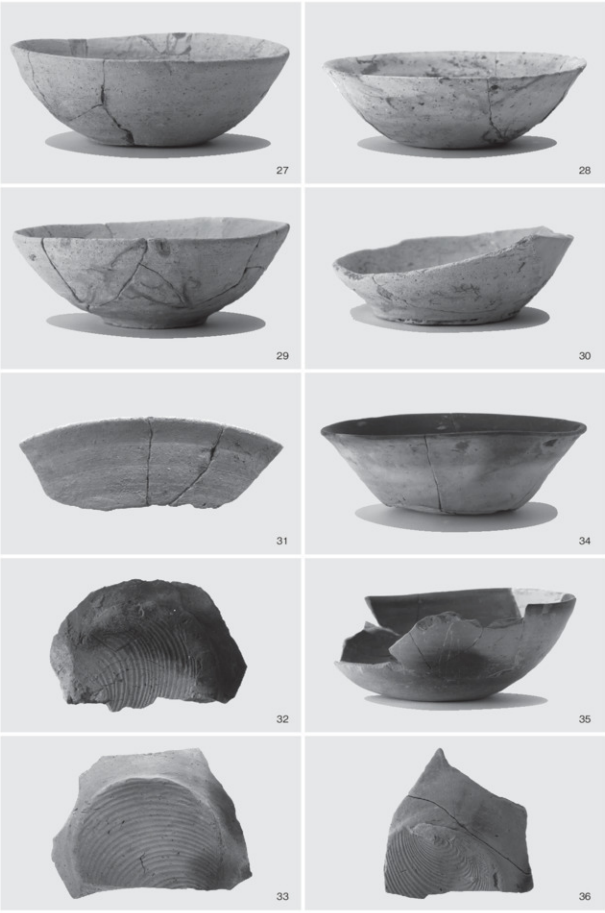

写真図版16　土器（1～10）



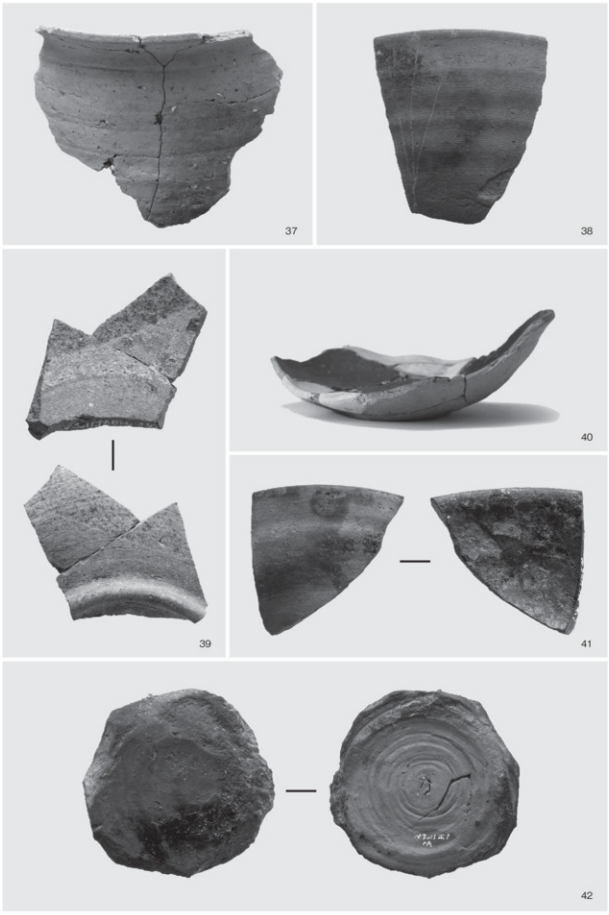

写真図版17　土器（11 ～ 18）



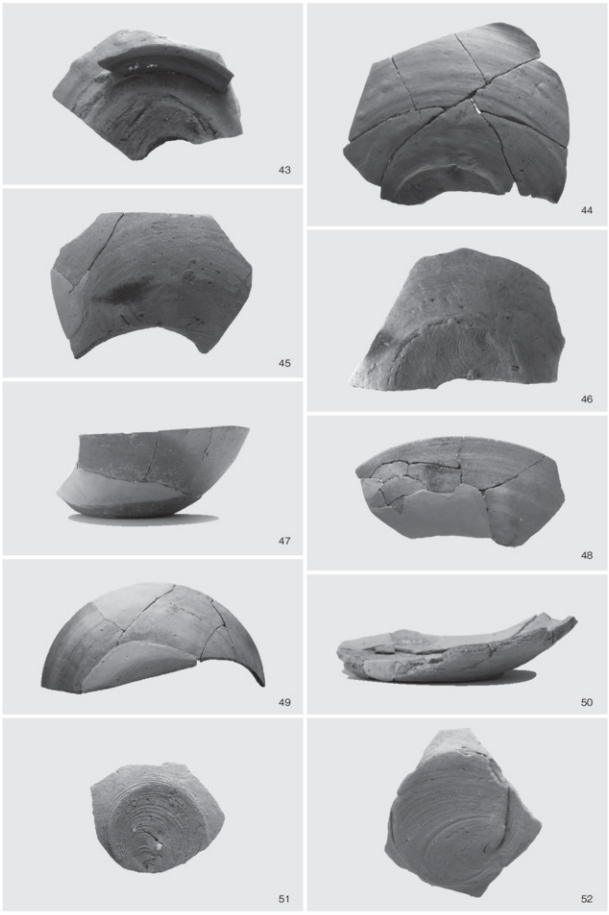

写真図版18　土器（19～26）



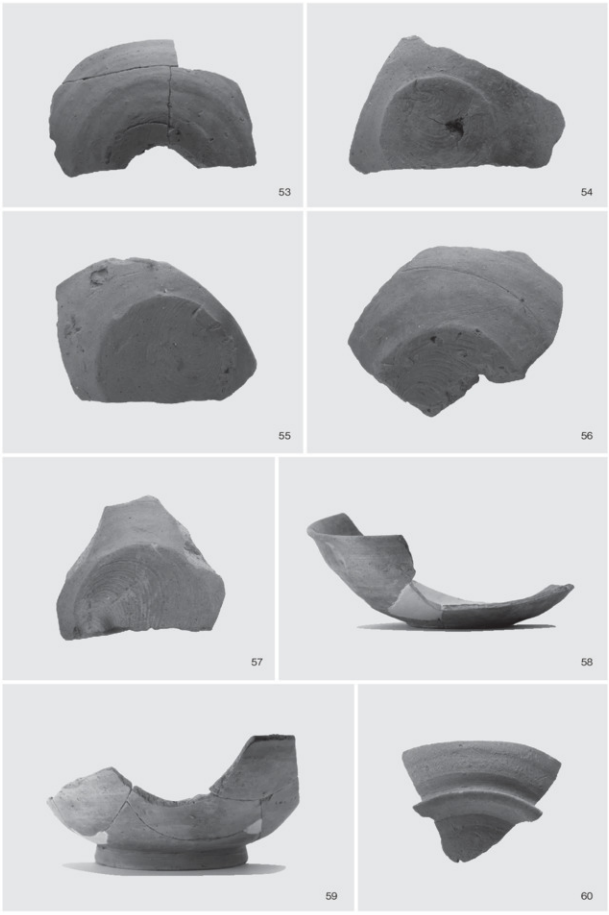

写真図版19　土器（27～36）



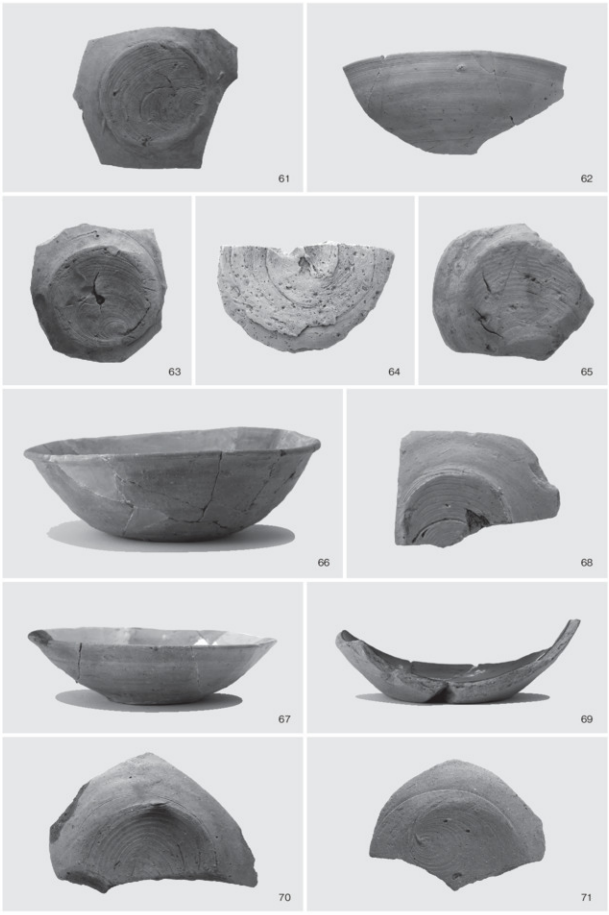

写真図版20　土器（37 ～ 42）



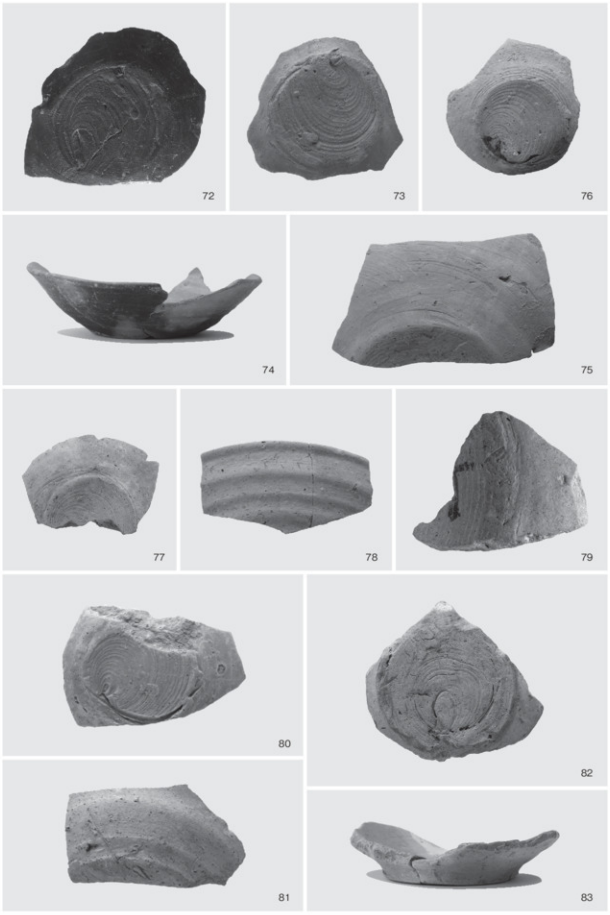

写真図版21　土器（43 ～ 52）



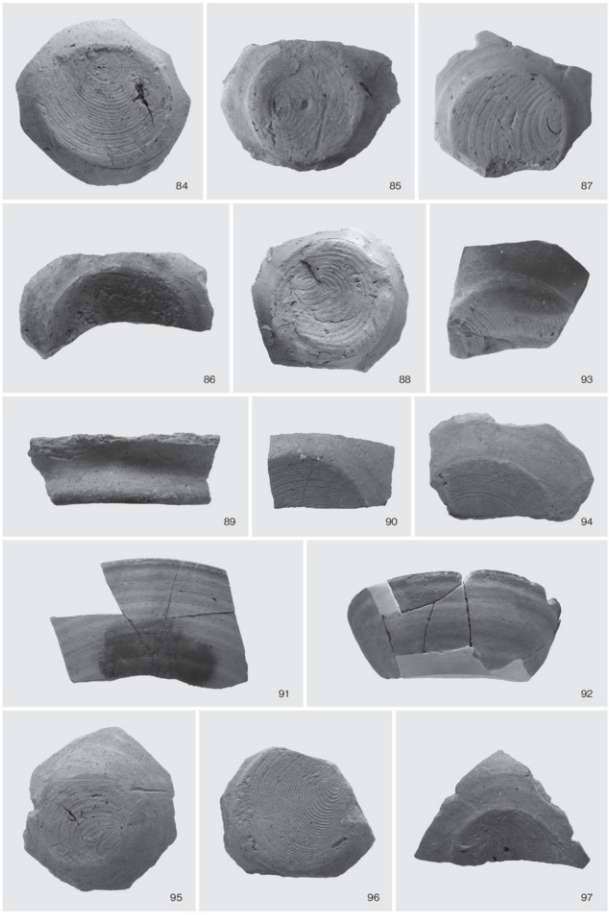

写真図版22　土器（53～60）



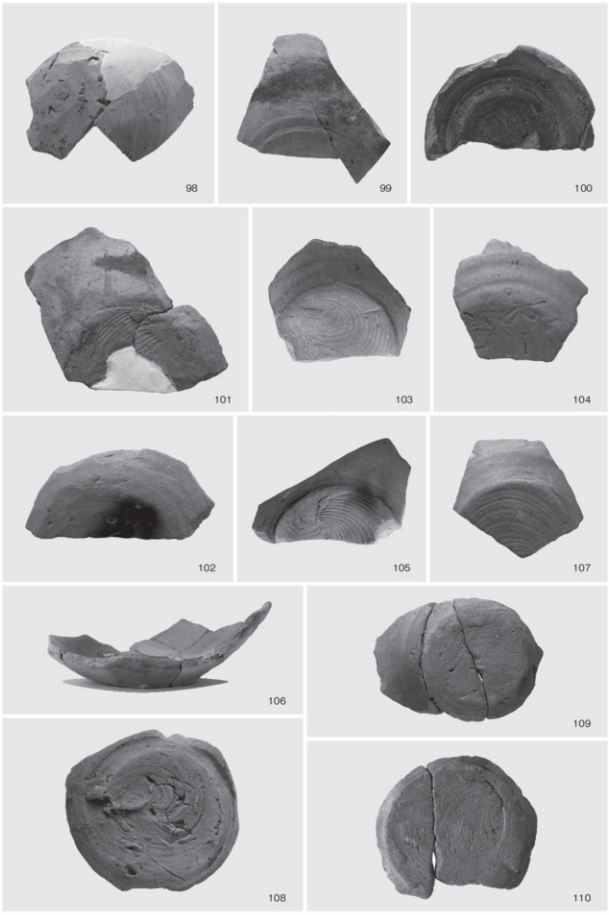

写真図版23　土器（61 ～ 71）



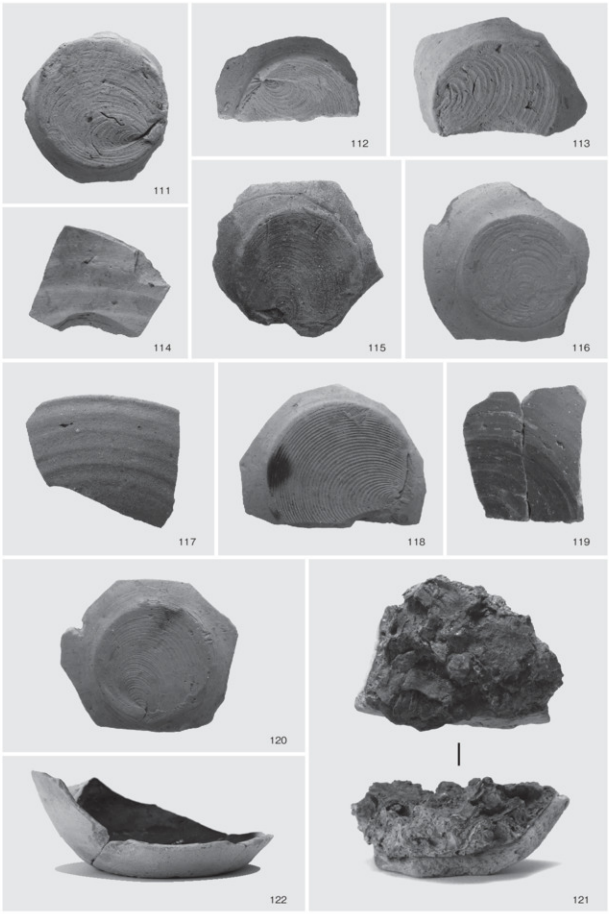

写真図版24　土器（72～83）



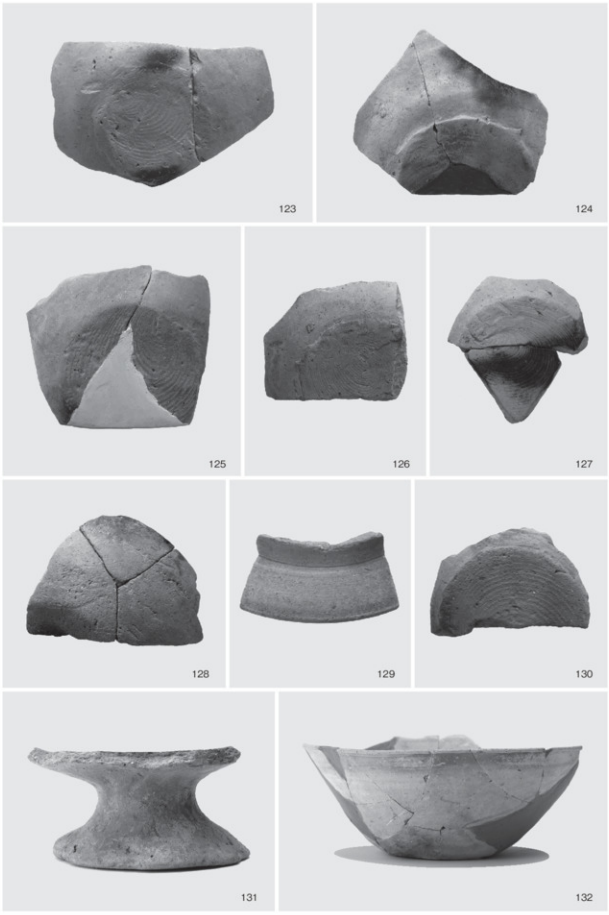

写真図版25　土器（84 ～ 97）



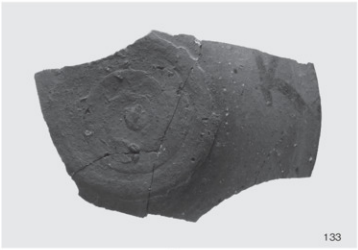

写真図版26　土器（98～110）



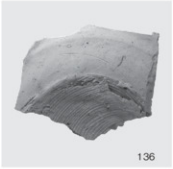

写真図版27　土器（111 ～ 122）




写真図版28　土器（123～132）


133

134


136

137

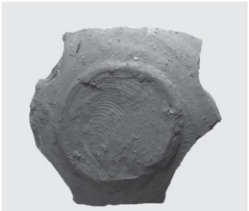
135

139

138

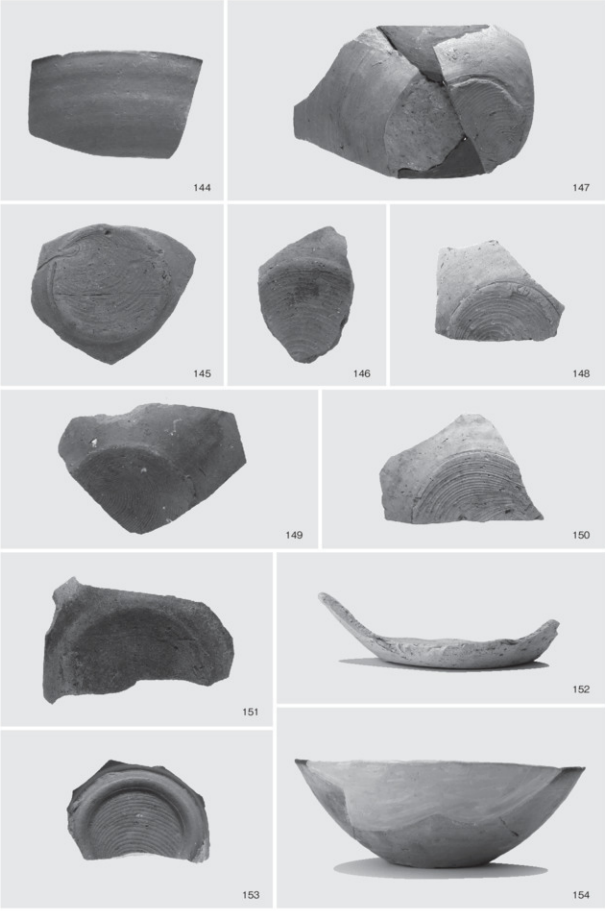
140

141


142

143

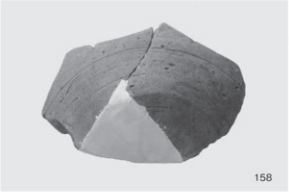
写真図版29　土器（133 ～ 143）

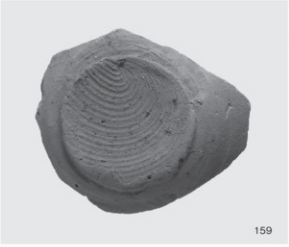



写真図版30　土器（144 ～ 154）

155

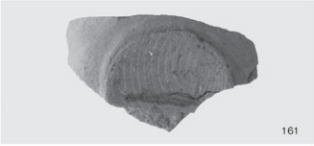
156

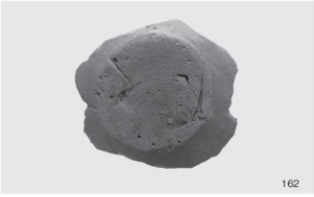

158


159

157

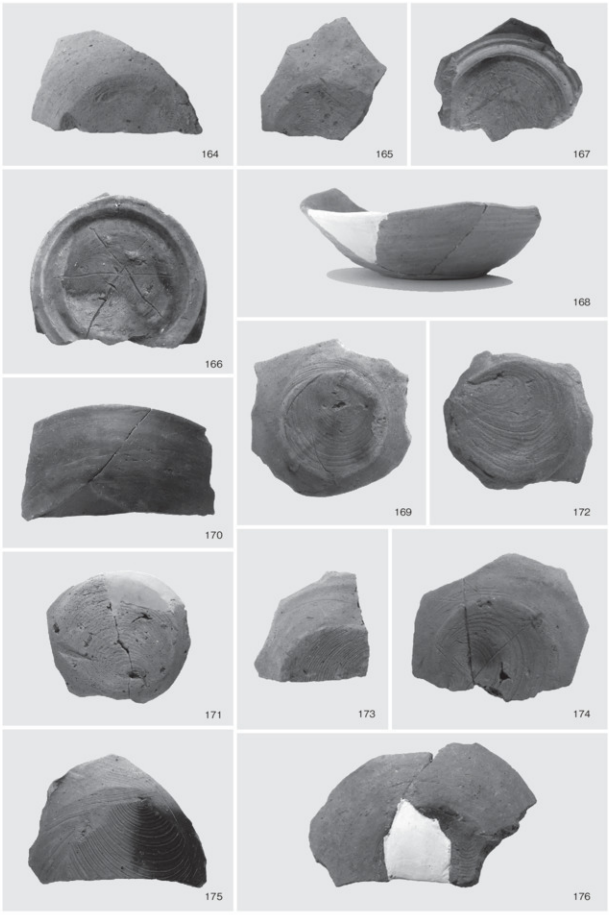
160


161

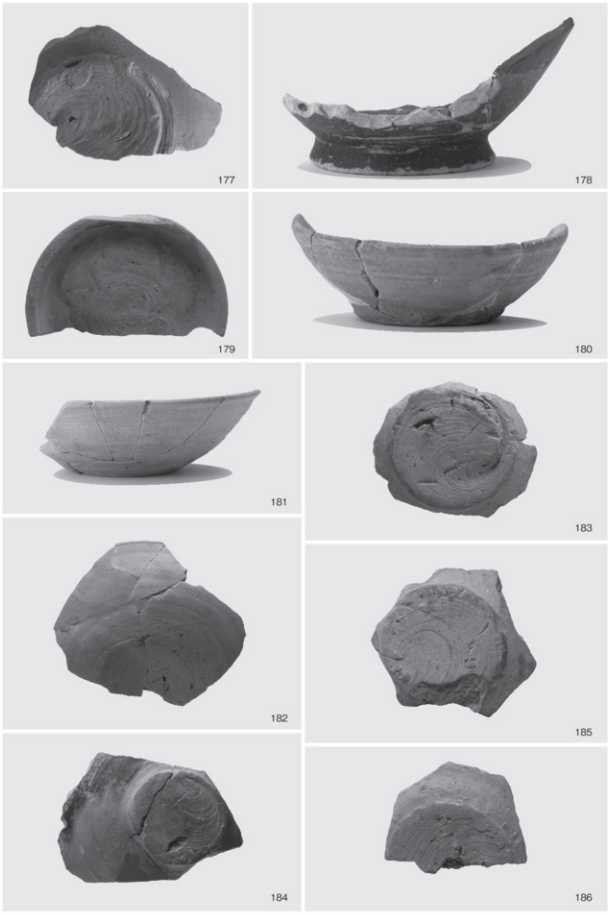

162

163

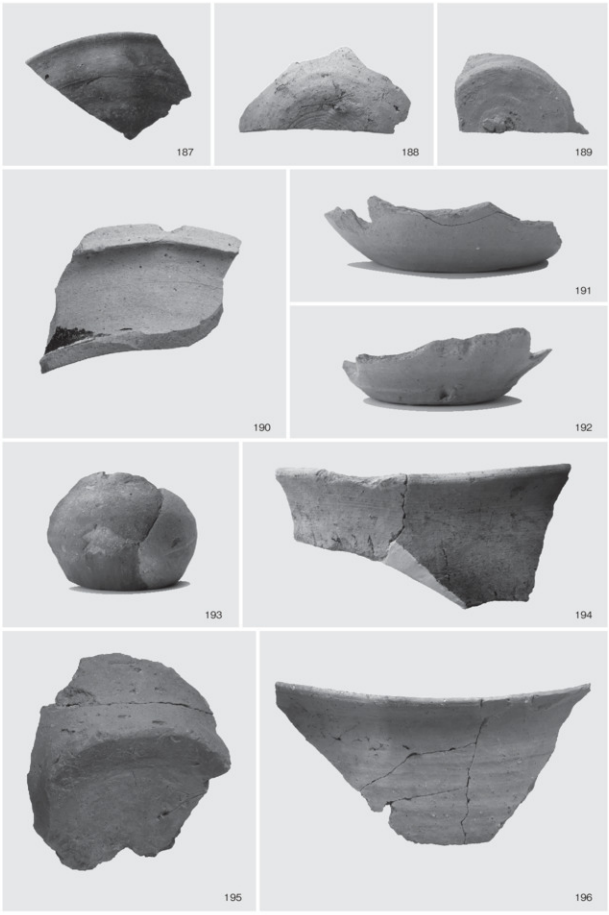
写真図版31　土器（155 ～ 163）




写真図版32　土器（164 ～ 176）

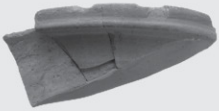



写真図版33　土器（177 ～ 186）




写真図版34　土器（187 ～ 196）

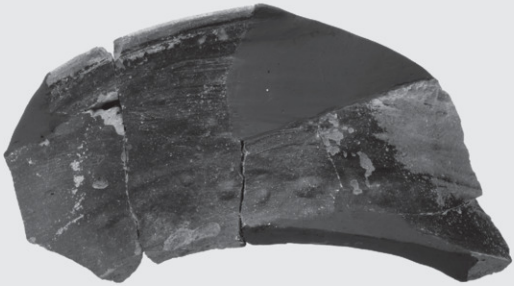
197


199

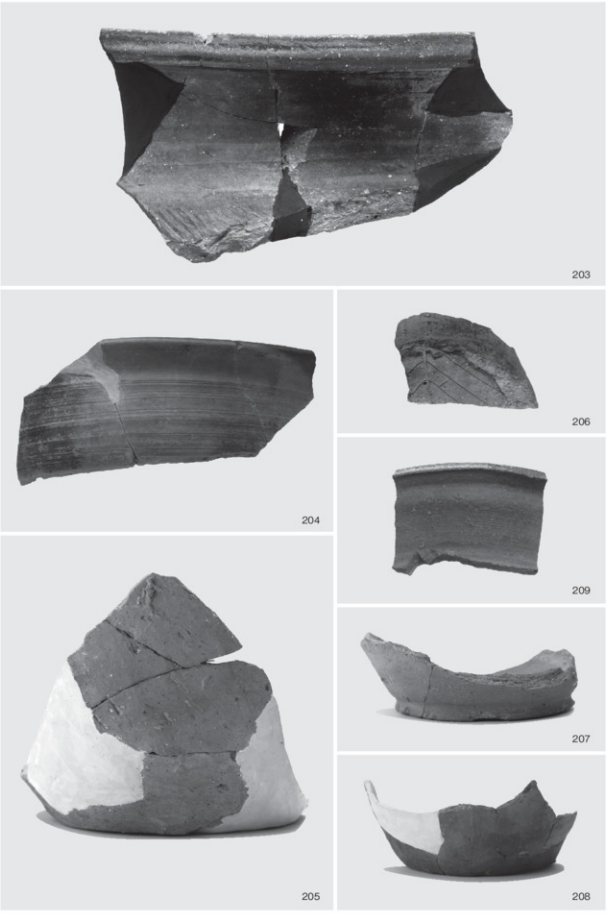
201

200

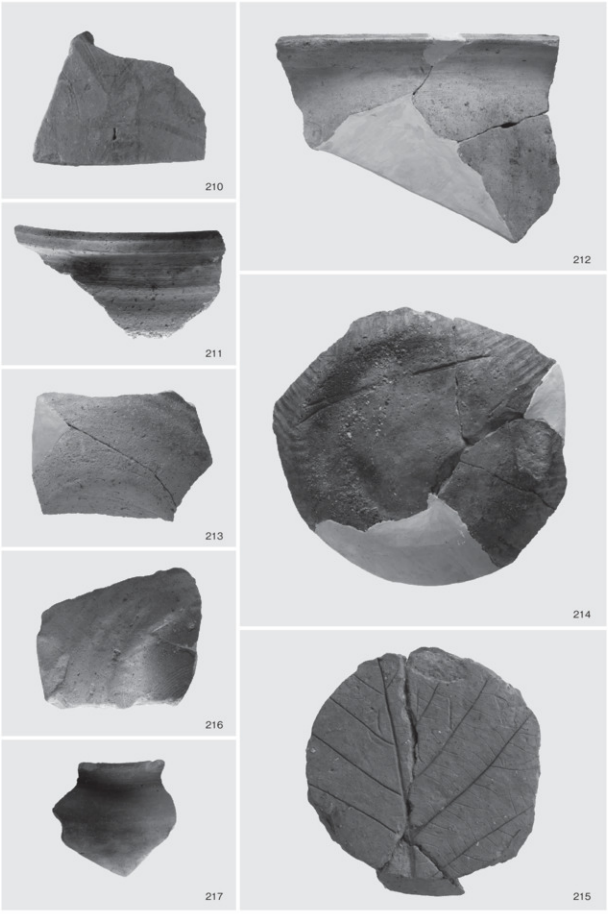
202


198

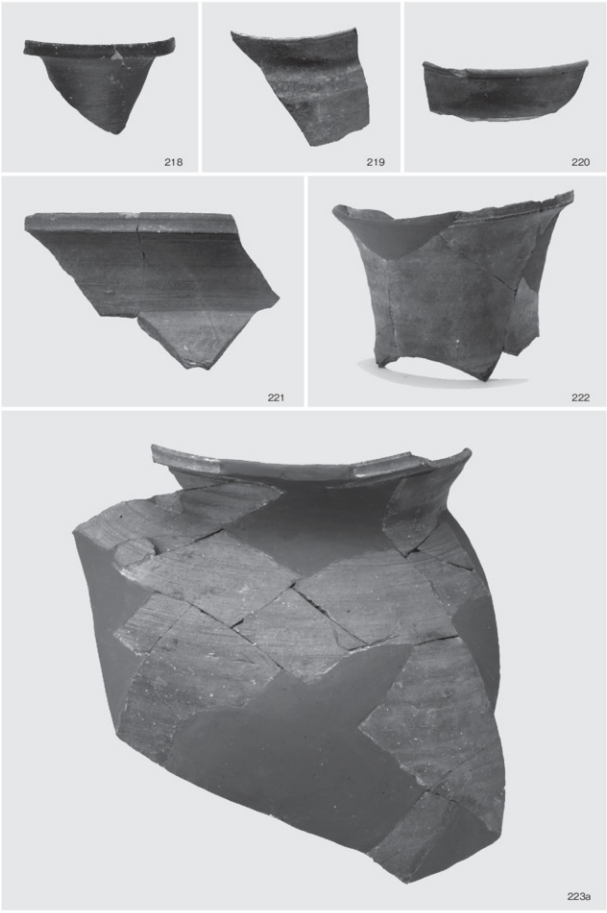
写真図版35　土器（197 ～ 202）




写真図版36　土器（203 ～ 209）

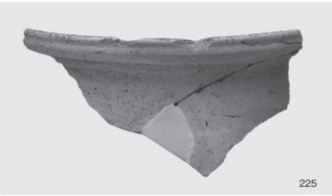



写真図版37　土器（210～217）




写真図版38　土器（218～223a）

224


225

226

227

223b

写真図版39　土器（223b～227）

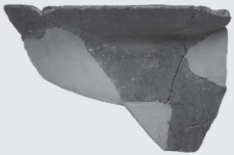
228a


228b

230

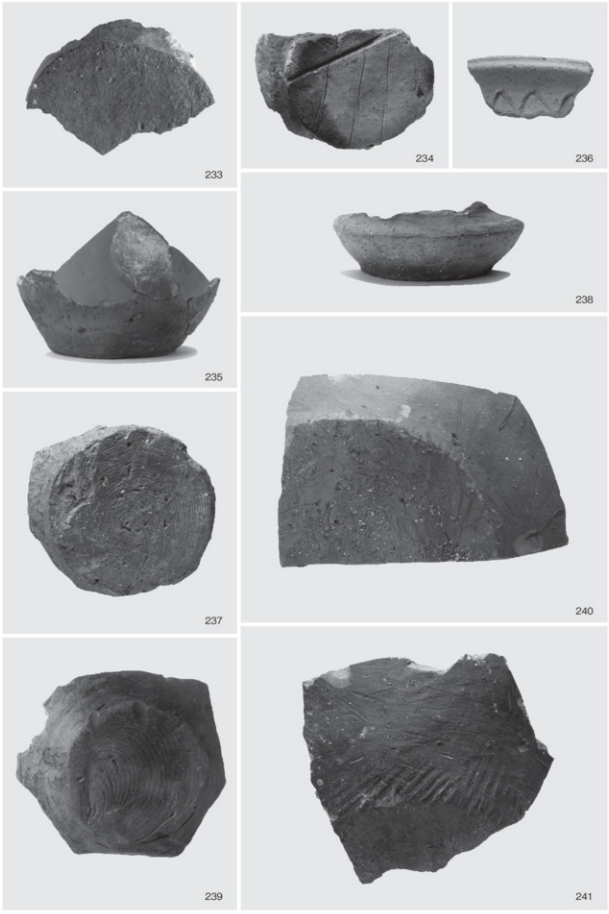
231

229

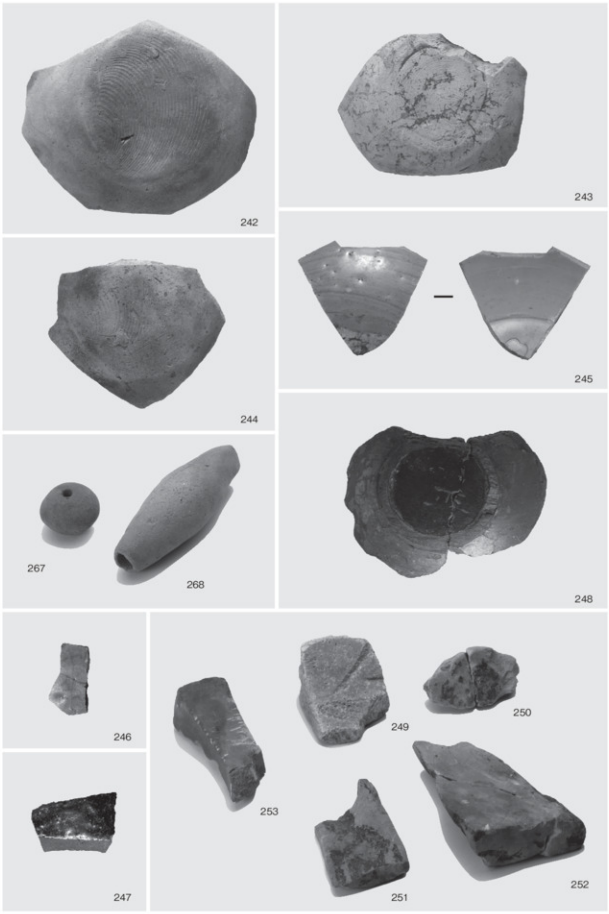

232a

232b

写真図版40　土器（228 ～ 232）




写真図版41　土器（233 ～ 241）




写真図版42　土器(242～244)・陶磁器(245～247)・漆器(248)・石製品(249～253)・土製品(267･268)

写真図版43　石器・石製品（254～263）・金属製品（264～266）・木製品（269～272）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | なかしまいせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 中嶋遺跡発掘調査報告書 |
| 副書名 | 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第607集 |
| 編著者名 | 福島正和・巴　亜子 |
| 編集機関 | （公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638－9001 |
| 発行年月日 | 2013年2月22日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>° ′ ″ | 東経<br>° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中嶋遺跡（なかしまいせき） | 花巻市東和町安俵（はなまきしとうわちょうあんだわら）11区150－2 | 03205 | ME28-2198 | 39度<br>22分<br>42秒 | 141度<br>13分<br>16秒 | 2011.10.17<br>～<br>2011.12.02 | 2,811 | 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 中嶋遺跡 | 集落遺跡 | 縄文・弥生時代 | | 土器・石器 | |
| | | 平安時代 | 竪穴住居　9棟<br>土坑　9基 | 土師器・須恵器・灰釉陶器・木製品・石製品 | 9世紀後半～10世紀初頭の灰釉陶器皿出土。 |
| | | 中世 | | 陶磁器・銭貨 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 調査区は微地形により微高地と微低地に分かれ、微高地には平安時代の居住域が形成されている。微低地は湿地化しており、その泥土の中に土器を中心に多くの遺物が出土した。これら遺物は9～10世紀のものであり、灰釉陶器皿が1点含まれる。隣接する過年度調査でも同時期の集落が調査されており、大規模で拠点的な集落であると考えられる。 |

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 607 集

中嶋遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成 25 年 2 月 14 日

発　行　平成 25 年 2 月 22 日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話（019）638－9001

発　行　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
〒020－0066　岩手県盛岡市上田４丁目２－２
電話（019）624－3195
（公財）岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸 13 番１号
電話（019）654－2235

印　刷　第一印刷有限会社
〒020－0122　岩手県盛岡市みたけ四丁目６－40
電話（019）646－6001

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2013